

增補

俳諧歲時記草

戶

曲亭主人纂輔
藍亭青藍增補

秋

漢書律曆志少陽者西方西遷也
然遷落物於時為秋秋籥也物擊斂

乃成

少皞

帝禮月令其帝少皞注云少皞白精之君金天氏也

蓐收

神月令其神蓐收注云蓐收金官之臣少皞氏之子該也

白藏

爾雅秋為白藏一曰收成注云氣白而收藏萬物故曰白藏

金商

秋五行屬金五音屬商故有金風素商之稱唐高宗九日詩云端居

臨王辰初

明景

元帝纂要秋景曰明景朗明義同

籟

謂秋声也增韻爽清快也爾雅吹物有聲曰籟

夷則

月令廣義

夷傷則法也言金氣始肅萬物于此凋傷猶被刑戮之法

秋



七月 立秋

節月令廣義孝經緯云大暑十
五日斗指坤為立秋七月節

新秋

韓文是時新秋七月
初金神按節炎氣除
孟秋
也始也又

初秋

中院通茂公卿說和歌
謂新秋也
初秋ハ七月十四日まことい

處暑

中月令廣義立秋十五日斗指申
為處暑濱暑將退伏而潛處也

處上声止也暑氣止
息也七月中也

文月

清補與儀抄此月
ふつき七日ふふふとふふと

藏玉七夕のあふよめ空のうげとえて書ふらべゆる
とて文どもをひらく故ふ文ひらげ月とりんと累せ

機棚月

藏玉鶴のよ
つとものこしゆ

女郎花月

藏玉なをを
しぎりのうらふ

涼月

月令孟秋
月涼風至益秋

ふふてあ名とそ一月
もどとそ一月顯昭

のころ待えり家隆
ころせよなあむと月

每年七月十五日為父母
設盂蘭盆供十方自恣僧
得庚則桐秋
日室相
蘭月蘭秋肇秋
要抄云
蘭月
景曰送行燕說文送去也
と訓も暑の去を送る意あり

相月

爾雅七月為
相疏云七月

淮南子一葉落而天下知秋
甲書梧桐立秋之日一葉先墜

蘭月 蘭秋 肇秋

纂要七月曰首秋上秋
肇秋蘭秋月令廣義提

親月

和爾雅此月諸人詣
親墳墓故曰親月
餞月

八月 葉月

此月肅殺の氣を生じ百葉と落す故
小葉落月といふ今畧して葉月といふ

南呂

律記律中南呂高誘註云南任也
言陽氣内藏陰倍干陽任其成功

白露

節月令廣義孝經緯云處暑後十五日
斗指庚為白露言陰氣漸重露凝而

秋分

同上白露後十五日斗指酉為秋分
陰生於午極於亥故酉其中分也仲

秋

月之節為秋分秋為陰中陰仲秋月令八月
陽適中故晝夜長短亦均焉為仲秋

壯月纂要八月為中同上八月亦曰桂月
商又曰壯月桂月○桂の花の

ひらく月中律芋環ふ出せり難月
出處未考唐類函

八月乃讎以達秋氣秋風月
藏玉扶の葉と露宛

みざと音あつちや身ふちを月見月
藏玉名ふしあつち秋の半

の空をこめてむのつとと雁來月
月令仲秋之月鴻雁來

九月無射律禮記九月律中無射高誘註
云無射陰氣上升陽氣下降

萬物隨陽而藏寒露節月令廣義孝經緯云
秋分後十五日斗指

辛為寒露言露冷霜降中同上寒露後十五
日斗指戌為霜降言

氣肅露凝結季秋月令季秋紅樹通俗志
而為霜矣之月小出山人

疑らくハ紅樹月の誤あら藏玉あつち山ゆきとふく

朱熹詩云秋山有紅樹忽憶田野中韓退之

詩云春風紅樹鶯眠處似妬歌章作艶声云と

九月の異名玄月至于玄月註云玄

月長月夜長月と素秋素秋九月小限ら

あり四時と五色小配菊月又菊秋月令季秋月

白小中晩秋對早秋梢の秋季吟云紅

木深月紅葉月證歌紅樹寐覺月藏玉

ふ下枕のおごめ月秋小田菊月藏玉

秋

露まげく袖うら拂ふ
小田のりの月頭昭
色どる月
旗の秋とい
ふみかふし

七月 糸織姫
棚機七姫の内之
異名分類
旧事紀小令天棚機姫神

犬飼星
志の部二星
石枕
仙覚抄
の糸小出
いと枕と

ハ真の石小あらど玉こたな
むこのらふ夜の玉の枕
芋の葉吐露
藻塩
草露

取草とハ棚機の歌と書付
曬衣裳
星のうし物
小袖

四民月令七月七日
麩を作し藍丸及び蜀漆丸と合
し經書及び衣裳と曝し俗小習ふと然り
世説郝隆

七月七日鄰人
ハ皆衣物と曝し隆仰ぎ臥して
腹と出す人其故と云曰腹中の書と曝の
○星のり

し物衣裳と曝まも物とくすも七夕小巧
と云ん爲
賈之家集世と云く我うをホハ七夕の涙の玉の緒と

やあらん秋まても露ゆく袖のせ
はたあつめ何
とくままし舟内侍荒野集七夕よ物うまともあはじ

越人池の坊に立花
洛の六角堂頂法寺雲林院三
條の南ふあり三十三所願礼の

一箇所也近世僧專光數品の花枝と一瓶の
うらふと山
水の景象と摸まると得る人
和俗と云と立花と云今

ふ至て代々こと玩ぶ僧俗此徒弟とある
ゆは多し例
年七月七日立花數瓶砂の物等とあり人争ひてこれと云

と云と池の坊の立花と云ふ
伊勢踊
滑稽雜談

り又二星小供まるとの意あり
と云ひうより侍ると云
生身魂
蓮の飯
閑意

○せふふね坂音頭あり
本朝の世俗七月ふみかふしハ生る二親と供養して生身魂と名

づくこと孟蘭盆の修行あり
盆經願くハ現在の父母
として壽命百年病と云一切苦悩の患と云り
是七月十

五日僧自恣の日現在の父母の壽命長久と祈る
發願の文
あり是生身魂の修行あり
和漢三才圖會刺繡中元の具

祝用と云祖し昔より骨ふ傍て割開き
こと魁うて
二枚と一重と云ふこと一刺とり
○同書云蓮の飯考

妖の靈前ふ供し又以て親戚ふ贈ると礼
穴と云こと称

して生靈祭と云、荷の葉と以て熟せ、飯と包み、
観音草と用てこまごまと縛る佛名に以て好とす、
稻

妻 稻つらゝし 和漢三才圖會 秋の夜暗て電の常
ゆかり 俗傳ていふ此時稻實る故小稻妻稲父の

名あり人御傘 稻光ハ雜あり 稻の殿 稻妻小對して
説文電、陰陽の激曜す、 稻の殿といふ

べし、續猿蓑 獨りて留守 稻葉の雲 詩ニ云多
ゆかりとて稲の殿 一束、 稼如雲○

秋凡ハ田面小冬とことふ、つらゝの雲の露ぞ、
中阮通茂公○稻葉のむらゝのふる景色とす、

の花 夫木 ゆふぎまはるる、わらしみ我家の
門田の稻の花の浪よる 後入我内大臣 秋

本草 系 荻、 隱元豆 天和本草 近年中華よりつらゝ
花紅小盛え、 春子と植秋の末小實多、花紫

之、蔓生と嫩きと花葉とも煮食、京都て隱元豆と云
筑紫て南京豆といふ○此種黄葉隱元禪師來朝して

諸種と持來まゝ其一種、 稻脊虫 和漢三才圖會 蟻
故り隱元豆と名づく、 冬蝨 春黍、和名以

和名 稻脊虫 冬蝨 春黍、和名以

和名 稻脊虫 冬蝨 春黍、和名以

和名 稻脊虫 冬蝨 春黍、和名以

和名 稻脊虫 冬蝨 春黍、和名以

和名 稻脊虫 冬蝨 春黍、和名以

和名 稻脊虫 冬蝨 春黍、和名以

和名 稻脊虫 冬蝨 春黍、和名以

和名 稻脊虫 冬蝨 春黍、和名以

和名 稻脊虫 冬蝨 春黍、和名以

和名 稻脊虫 冬蝨 春黍、和名以

和名 稻脊虫 冬蝨 春黍、和名以

和名 稻脊虫 冬蝨 春黍、和名以

和名 稻脊虫 冬蝨 春黍、和名以

秋

國東上川水もくく舟と引のむもふ血のうしろのうも
るが人の物といやを言てうづりふらふ似たがり又二説ふ
縮とてこの舟をく讀方物といやと入心と
縮舟ふよせくくむらうと藻塩草もえり
縮とてまきこもやふ縮の面の平々とあると申とよして
夜分ちも居所やとゆらぐ○又新葉ゆて織る縮とも又
ぢぢ縮とて木の枝まぐく均いねとゆけりたるとも縮莖
とあり万葉玉むこの道行つと縮莖まきこも人とも
るうもがぬ人丸新古今秋の田のうりねの床の縮む
しう月やまきこもあける露りね定雅○大まきこも心
得
裂繪 和漢三才圖會 縮 俗字 鯧 和名伊和

和之訓及相通 中畧 群行して至る時海波稍赤し澳
人豫知て網と下しとまきこも未る鯧好て鯧と喰ふ為す逐
る者数万群とあして浪棒の下しとまきこも取て膾小作
る炙として食ふ又脂と取て燈油とす○鯧引と八網
と引の義裂繪とハハハ魚刀と用ゆるよ及ぶと指と以て
ととと解故ふり本朝食鑑二名神紫或ハ紫といふ本朝

官閨の兒女 鰯の賤名と忘て神紫といふ
鰯の塩糟 其内色紫黒故小名づらるる
あえとする時一片の白雲ありその
雲段々として波の如し是と鰯雲と云

つこの部月見 十六夜月 既望 古今 君やらん我やう
の条とてしん 十六夜月 人のいよふ慎の聲
もまよひぬふり○りまよふといふちまよふ意十六日の
月暮てのちまよひらうていづる故のちまよふと出てい
ち八月の雲芭蕉○此句意ハやそくと月ハ出まきこも雲
のちまよひとよひていぬといふ曲節あり 蔡氏集傳 日月
相望むことと望といふ 羊肚菜 和漢三才圖會 羊肚菜今
云免口草八月の中湿地ふ
多く生も其織の表褐色端曲り捲裏ハ黄白色細刺
あつちまよひらうて孔あり蜂の巢のこも毒あり

石葺 同上 杖木耳のこ 織柄まき黒色裏灰
白色葺の頭髪の上あふりまき得
小屋 同上 守舎未と看座あり○ 稻木 稻掛
田間ふ建て猪鹿と追ふ処

秋 い

秋 い

秋 い

秋 い

稻干 多識篇 喬杆 加計 稻木俗稻桿とのみ禾
と掛る具之竹の長短相等しきもの三莖と

取一三小篋を用てと縛り田 和漢三才圖
中ふ於て禾と上ふりけて乾す 全指二形

て束ねて一把二把とす是あり又稻塚あり 和漢三才圖
と束ねて後積て堆く 拾遺記 家の如し是と稻塚と云 稻

負鳥 古今 我門ふらふむき鳥の鳴あつてふけり 和漢三才圖
凡ふ鳥はきあつて 真淵翁云 稻負鳥の鳴く

りハ此哥とあるも心得とて 詞 詞をもあらぬひとて
少く皆りつふ足らば度々 和漢三才圖

実ふ秋の半さきて來鳴りのあり 綺語抄 稻負
鳥の鳴く 和漢三才圖 人ハ意路ふまら 和漢三才圖 〇鶴鴒 稻負鳥

庭 和漢三才圖 〇鶴鴒 稻負鳥 三才
圖 和漢三才圖 雀のこゝひ飛 和漢三才圖 鳴行 和漢三才圖 稻 和漢三才圖 大 和漢三才圖 鴒

のこゝ脚長く尾腹の下白く頭の黒く連銭のこゝ
故ふ杜陽の人 和漢三才圖 色鳥 和漢三才圖 御傘 和漢三才圖 秋 和漢三才圖 小鳥

と連銭とりふ 和漢三才圖 雪王 和漢三才圖 又 和漢三才圖

由かき山路ゆく秋や 和漢三才圖 桑鳥 和漢三才圖 和漢三才圖 竊指

限りの色鳥のま改為 和漢三才圖 青雀 和漢三才圖 臘 和漢三才圖 雀 和漢三才圖 狀鳩

より小く頂黒く腹灰青色羽の末黒く白き 和漢三才圖 故ふ

背微曲て厚く浅黄色尾短く好て豆粟と食ふ故ふ 和漢三才圖 伊須

豆甘美と名づく俗以て豆廻しと名づく常小鳴 和漢三才圖 伊須

て春月も轉る比志利古木利と名づく 和漢三才圖 加鳥 和漢三才圖 正字未詳同上 狀鸚鵡のこゝく 和漢三才圖 頸背

加鳥 和漢三才圖 蒼く又腹臆最赤く此余あり 和漢三才圖 青 和漢三才圖

詛語又とあま 和漢三才圖 故ふ事物 和漢三才圖 九月 生王祭 九日

詛語と伊須加の背とり 和漢三才圖 神社啓蒙 生王の社 和漢三才圖 根津國東成郡天王寺の辺 和漢三才圖

あり祭 和漢三才圖 神一座 天の生王の命 和漢三才圖 社家註進記 明應年中 和漢三才圖
本願寺の僧 和漢三才圖 未 和漢三才圖 來 和漢三才圖 寺院と創し 和漢三才圖 神地と以て境内 和漢三才圖
小接を神其不潔と惡 和漢三才圖 彼僧と野 和漢三才圖 僧を 和漢三才圖 して神 和漢三才圖
殿と今の旅店の側 和漢三才圖 遷 和漢三才圖 造營 和漢三才圖 其後信 和漢三才圖
長の兵火 和漢三才圖 殿社 和漢三才圖 灰 和漢三才圖 焼 和漢三才圖 繞 和漢三才圖 小神 和漢三才圖 聖 和漢三才圖 別所 和漢三才圖
近 和漢三才圖 慶長年中 和漢三才圖 秀吉 和漢三才圖 城 和漢三才圖 築 和漢三才圖 今 和漢三才圖 地 和漢三才圖 遷 和漢三才圖
〇例祭九月九日 和漢三才圖 神 和漢三才圖 賽 和漢三才圖 一基 和漢三才圖 遊行 和漢三才圖 流 和漢三才圖 鑪 和漢三才圖 あり 和漢三才圖 社内 和漢三才圖

十坊ありその内 十五日八所明神の社ハ
南坊と別當ナシ 岩倉祭 洛の北長谷村の

西岩倉あり王城の四隅小岩倉と置まされ其一あり

拾芥抄 大雲寺岩倉觀音○親長卿記云文明三

年三月廿九日岩倉長谷の觀音小春十一面圓融

院の御願日野中納言文範卿草創あり○鎮守岩倉

大明神所謂八所とハ八幡加茂松尾山王住吉春

日新羅大座是小太神宮貴船稻荷平野と加へて

以上十二社と云ふ十二所明神と称も是大雲寺の鎮

守なり土人本居神とも例祭九月十五日神輿遊行

を神主八村中の氏子交りくると勤む大雲寺衆徒

四人名代して公人法師二人供奉夜言小大炬火二立深

更ふ及て角力五番あり滑言雜談俗ハ岩倉の尻々

き祭といふ夜ふ入て神供と奉ふ一村の内新婦とえらて

婚礼の服と着せしめ神供の器と頭ふ戴き神前ふまて

あり一村の老若ちひきき枝木と持新婦の尻とら新

婦とてまゝとらると立ちまゝ 十五日○河内

てらあり故尻とまゝとらふ 一宮祭 國文野

郡北枝方村あり祭る神牛頭天王八王子北野の天神

撰社帝釈天王服立寄姫大明神淺原大明神鎮座年曆

詳ありも例祭九月十五日今ハ十六日神輿出を神樂神湯

ホあり氏子八郷坂村小倉村招提村田口村甲斐田村中宮

村禁野村濃村是社僧神宮寺及社家岡田氏記を處へ

又一説小宮平岡大明神ハ河内國河内郡ハあり祭る神

天の児屋根命姫大神香取神鹿島神若宮の社末社ハ

社神武天皇の御宇鎮座例祭九月八日九日社務水足大炊

下祢宜神子五六輩皆農民 伊勢御遷宮 紀事

社造替毎小陣の義ありて時日と定らる勅使あり伊勢

大神宮春日の社廿一年を經るときハ必造り替あり遷宮の

時納る所の神宝行事官調進をこの月伊勢恭宮の人多

く京師と出て十六日の御祭會並御遷宮ありんとも凡

恭宮の人先壺山の國阿の像小詣てその杖履と戴拜す

相傳國阿深く太神宮と信し時々木履と着柱杖と

携りて恭詣とも終り行路の難あり故ふるの福よ做ひ

秋

屋より出て羽の出さういふると盆の聖者の箸とともて
夜鳥屋より出さふより箸鷹とも申とつるの小鷹持
の糸とも見 **鳩吹** 鳩とともて手と合せて鳩の声の
合まべし **八雲御抄**

歌林良材 **藻塩草** **袖中抄** 亦説同し **花火** **和漢三才圖會**

炭俵集 名月や誰が吹かとも炎の鳩酒堂 **秋** **和漢三才圖會** 天
祥燧ふ代ふべきゆけし又夏月河 **御傘** 正花と持し **花** 花史より

如し枝さる小枝葉長く垂地と蔽ふ状糸櫻ふ似て
一極三葉葉の葉ふ似て又南天燭の秋ふ似て尖らば糸
軟く秋小花と著淡紫色俗専ら萩の字を用ふ奥州宮
城野方二里より萩生茂より山萩あり白花の者あり白
紫開分の者あり○或書ふ宮城野の萩ハ草ふありハ本萩
くらわとふ作る木あり稍小青き枝生てふの萩ふ花さる
○ともありの萩鹿鳴草古枝草糸萩 **萩の錦** 錦

小萩さる萩ハ其頭字の部ふわちて註 **萩殿** **秋殿**
もてていふあり **新後拾** いふまことゆりてをゆき **秋殿**
秋もぎの花のありさの露のたてぬき **法皇御製**

萩の戸 **禁秘抄** 萩の戸ハ常の御所 **天要抄** 萩ハ限
らと色く秋の花さるを萩と清涼殿の西
の方武間の前 **五社百** **蓮の實** 菰頌曰其蒨秋
首註 菊戸萩戸同し **蓮の實** 菰頌曰其蒨秋
水ふ沈む石蓮子とも○山谷詩倒萩萩蓮菰云 **初**
とも蓮の葉の房中より萩出さる穴と萩と見立し **初**
嵐 **和漢三才圖會** 山の氣と嵐といふ醫書ふ山嵐不正の
氣といふ是あり今初秋以後朝夕山より吹風と俗
嵐と名づく **連哥新式秘抄** 初嵐ハ **絡線虫** **和漢三才圖會**
七月末より八月中ごろまでこの風あり **絡線虫** **和漢三才圖會**
鳴初て七月中ごろまで野叢の中昼盛ふ鳴く其声
ギイ、ス、とゆが如く一二声の内ふ、チヨ、と舌打も俗是
と蛩と云て小籠ふ入て市ふ賣て小兒の翫ともその形
鳥蟻と似て大あり是もそのおろしギイ、とゆハ機杼の音
チヨ、とて機杼の音あり又キスとゆり **續猿蓑** **蝮虫**
夏の附合ふ砂と這ふ藜の中の絡線のともを沾園 **蝮虫**
冬蝮 蝮虫の屬長サ三四寸身もふとて薄て方あり首
兩額に眼あり目の上は二ツの鬚あり翅は灰赤色黒

秋は

點あり腹の下白く善跳て捕へが、
櫛和漢三才圖會黃櫛以て黄色と染

天子の御袍黄櫛深しと称き是あり帛と深て上り
礎水と用ふ畧深き黒茶色とあり其葉小く浅青色

莖微赤し三月小白花と開き細子と結ぶ秋ふ至て紅葉
ま、可く似せり添の類あり葉柳の如くありて滑く元山

木今世子と採て専ら蠟燭ふ作る
依て多く平原の地ふ植て利と也

日亥中月廿日の亥の正刻 旗芒袖中抄花芒秋芒と

ふと同じひきこあり或ハ万葉裏書ふも薄く穂
り出て旗とさげさうある薄といや能因申し

けさと 花野千草の花の野ふ咲き 芭蕉大和本草本草に

用とり花野とりとさハ野大和本草 本草に
体とありて花用とり心得し 濕草小載と軟ふ

る地ふ植て茂易し春葉を生じ秋ふ至て止む冬根
莖枯ら羊々發生を冬と登て大より黄花と開く極めて

掃東鑑ふ其花と優曇雁來紅とくまら 葉雞頭如の部見る也

薑和漢三才圖會生薑音姜今俗多く姜字と用ふ 倭名抄生薑

美蜀椒奈留波以多知波 吳茱萸加波波此等と

以て考ふる小姓昔波之加美といふりれハ辛果の惣名
蓮芋其葉荷葉小似て田く其根栗の形の如し味

種るゆのを栗芋といへハ 彈の余ふ出づ 班龍鹿

異名 鮫鈎和漢三才圖會彈塗魚俗波世川の末海

行小鍛と以て餌と論の端鈎と去ると二三許の處
小鈎の鍾と着鈎と地ふ附し微動の響と候て草と場

秋月貴賤以て遊魚の一ツとして形色類ふ似て小く細鱗
體畧滑く口闊く腮大ふ眼上ふ向く斑點微黒と帯ふ

尾ふも又小斑あり虎彈魚
納彈魚飛彈魚ホの類也 八月八朔 田の實の節 徳の節供

持枯の節 紀事 凡毎月朔ハ吉日ヤリテ相賀スル中

田面の節 華と同じ今日殊ハ八朔と称シ又持枯の節と

称ス又憑の節供トシハ或ハ田實の節と称ス又田面

の節と号ス中世農民給の初穂ト 禁裏ハ献じ故

小田の實の節といふ世又其訓と借用テ憑の節供

と称ス蓋君臣朋友相依テ頼の義小取君臣朋友の

明互ハ贈答の義あり今日貴賤各白帷子と著シ互ハ慶

と修ス公事根源八朔の風俗後嵯峨院晉詔の時外戚

源の通方卿の真下存一ハ近習の男女密ニ新義と

して開素と慰め奉る後皇位ハ即ちハ尔来嘉事と

初月夜 或説ハ四日五日六日迄と云フていハ一ハ害

初月と賞スルハ三五の月と待ラるより

ありし猿蓑集 粟柳とて云々初月夜半残 初潮

十五日の潮といハ一説ハ初潮の初ノ字ハ粟月の潮といハ

五雜俎 海潮八月獨大なるハ何ぞ也潮八月ノ

應じざるハ故ハ月望トモ潮盛ナルハ八月の望尤盛

御傘 伍子胥ク死靈八月十五日夜ハ風波と云々

箱崎祭

十五日 神社考 筑前國那珂郡此社ハ 譽田帝の祠あり博多に近し

祭る神三座中ハ應仁天皇東ハ神功皇后西ハ武内宿禰

とあり仲哀天皇三韓と討んと欲しとあり神功皇后と

あり筑紫橘日の宮小至リ給ひ軍旅と催との時天

皇崩御ありこの時皇后懐妊疎月ありんと云々自ら

男子の貌とあり弓鴛斧鉞とあり此日清明征伐の

後降誕ゆれと三韓と云々平定し筑紫歸りあり

男子降誕ありハ應神天皇是ありこの地と云々宇都

邑といハ胎衣と宮小籠りて地ハ埋ミ松と裁ミ標と

まその地と呼テ箱崎と云々醍醐天皇延喜廿一年六月

廿二日託宣より云々宮と宮寄の松原ハ建らる例祭ハ

月十五日ハ○古老傳てりハ昔この松原ハ戒定寺三

字の簀と埋む故ハ箱崎と号ス松と裁ミ標と

標と云々その松猶在と云々縁起 昔白幡四流赤幡四流

虚空より降其所ハ松と裁ミ標と云々故ハ八幡の号あり

貞享式 御傘ハ正化あり春

送ハ異あり 花白 あり細ハ穿鑿と云々種々の理

秋 は

野あまごの分ちて置方がよきありて如何なる秘

事やちやま今按ぎて小花種も花畑も次いで秋分定

むべきなり○花畠 初紅葉 初花初櫻といふは同

ハ草花とまじりてなり 新拾遺 ぬの山

木々の梢のまろむもちけこの 薄紅荷 和漢三才圖會

あまごのまじりてなり 宗長親王 薄紅荷 菘菜

菘荷菜の諸名あり本綱曰二月宿根より苗を生じ

清明の前こもと分つ方ある莖赤き色其葉對生初

時形長くと頭圓し長き小及て尖る其莖葉在る

似て尖る長し冬と經て根枯る梅もさく山城より出

花紫 花京大和地方多く藝芸種と下す長じて

て小あり又俗ふよハ琉璃草ふ似たり差互して生じ三月

花と開く梢の葉の間ふあり形状圓く瓣五出やて内

ふ葉懸ふハ又留璃草の花小異るるともやハくその

色白し又粉紅及び黄色のわけあり下ハ長廿号あてて

こととくく実と結ぶその形圓く尖まふ稔類して

大あり秋小至て熟すと黄白色あり○按ぎて小御傘

ホの俳書小花紫と秋く若紫と春とを然るハ本草花

景ホの説三月花と開くとりり紫草と種て試る人あり

て曰此草秋種るハの春花と開き春種るわけハ秋花と

くとりて御傘小花秋ありととりハ亦據あるふありて

○銷帛と紫小 花芒 かの部穂芒 濱木綿の花

深る者此草あり 大和本草 品濱木綿 万年青ふ似たり俗濱ありといふ

海辺小生じ七八月白花とひらり莖高く延て只梢ふ

數花ありまりひらり卷丹の花の形ふ似たり好花

ありハ季秋実と結ぶハ化咲る跡小數顆もの一類の

大ハ胡桃の如し内ハ核ふく白肉あり中 篤信曰今按ふ

西土ふもあり濱芭蕉といふ紀州熊野ふ多し甚ハ雪寒

と畏る宅中ふ植てハ冬月葉まて厚く包む或ハこむこ

ておわふべしさつせさまハ枯る盆小植て屋下の暖き処

ふやぐハ海濱ふありてハ潮風温りて雪早く消る故

ふふハ二種あり一種ハ葉柔く薄く其莖の皮多く重

まふハ身ハ百重ふまるともハあぐハ一種ハ葉つるあつ

一莖の皮重ふらと 万葉 三熊野乃浦乃濱木綿百

秋 は

重成心者雖思直尔不相鳴人丸滑替雜談此者
未俳書小載也然アこのへども古哥ふ多くある尤花と

以て季 針草 和漢三才圖會 鼠草小似て綴あり
小用ふ 長さ二寸むくり、灰白色平地ふ叢生

初茸 同上 浅山松樹の陰處小生、狀松茸小似て
赤黄色、立秋の初小出づ、柔みして味

甘く諸茸より先小出づ故初茸也 白雁 白雁全体
白くして

翅翻黒く嘴と脚と赤色其肉脂少し、凡中秋白雁先
來て雁金とよ次真雁又とよ次て選し、春ハ真雁

先て歸り白 初鰾 和漢三才圖會 鯉の本字
雁とよ次く、魚臭あり正字未詳、狀鱗小

似て円く肥大するもの二三尺、細鱗青質赤章腹淡
白く肉赤く細刺あり、脂多く味厚美、頭の枕骨軟く

やして瑪瑙の如く、氷頭と称す、味亦佳、天和本草本
邦東北州の大河ふ多し、南州ふ、和名曰鯉

和名佐介俗鮭守 鮭の子、同上、其子二胞あり胞
と用ふ非あり、中數千粒明透上小一紅點あり、

鰯とりの又筋子 放鳥 やの部八幡 九月海
甘子と云りのあり、祭の条小註

贏廻 紀事この月九日小兒小石と以て海螺の殼
と穿り、鉛と鎔して壳の内へ入ま、或ハ洲濱鉛

と壳の内へ充て、其力と助け、各緒と以て海螺と纏
ひ、勢ふ來して臺中小投入も運轉せしむ、その力つこ

きものハ其力弱きりのを盆外不出も互ハ勝負と争
ふ、こまと海三腕擊とり、席の兩端と巻てるこを盆

り、和漢三才圖會いつこの時より始ること云、田
夫野人の玩ぶ所より海螺の壳と用て、頭の尖りと碎

き平仗尻の尖りと摩りて、山の糸繩と巻て引てこま
と席盆の中ふ舞も、二三の螺と以て勝負とあそび、打

さる者勝負とあそび、先小入るものハ伊加と云、後小
入るものと乃字と云、か、打合て同く出るといへば、

張とりの張のときハ伊加と勝とも、婆利女祭
九熊野よりつる海螺厚く堅し、

廿日○婆利女の社ハ洛陽高辻の北室町の西小あ
て祭礼昔ハ七月ありしと中ごろより九月廿日とそ

秋 は

奉膳式と雁鴨と並あがり、賞する処ハ秋冬の差別あり、（註）見聞の次第情と論せむ、初雁とハハ風雅と思ひ、初鴨とハハ風味と思ふ、爰と天眼とも天耳ともいへり、譬ハ初雁と音ハ喚とも風味と先ハ思ふべき也、鴨の冬ふるハ勿論、初ノ字、肌寒（秋声賦）其氣慄（列後）人肌骨

七月 庭の立琴

江次第 巧奠御所より第一張と申下

東北西北の机上の妻小置く、註ハ延喜十五年の例和琴と用ふ、裏書小云柱と立るハ三様あり、常ハ半呂半律と用ふ、秋の調子あり、公事根源頭書半呂半律とハ、樂書小云黄鐘調大食調ハ律呂の調ハ半律の調也、夫木（木）のあふ夜の庭小、新綿（藻塩草）琴のあふ引（引）の糸寂蓮（ひ）ハ貢ももつらむ、作者あつらふ、二百十日、正月の節立春の初日より、へて二百十日とハ、此等秋の最中、金氣殺伐の氣變動する時、故ハ必凡

雨あり、此時節中稻の花盛とて、この花とて、こゝろをへんとを農民恐る、續猿蓑、公羽草二百十日も恙、心鳥、

廿六夜待

江戸の俗、今月廿六日の夜、月の出ハ三尊佛の影向と拜じ、とて、高輪小群集

も、此夜蔭芝居手踊、或ハ音曲ハ人藝、うつし繪等と仕組者あり、是と一夜藝者といふ、酒樓小月と待遊客、是と招て與ふ、又虫賣菓飴餅りくくの商人來りて、賑はらし、土人幫間虎ハ云、土人廿六夜祭と称ス、其由來を尋るハ、審（審）むむむ、近村の民、此處ハ未だ海岸小生さる、菰と折取圓座とて、月の出ると待、今聖天棚敷とて、菰と敷物小賣ハ、その名残、

と云、此外田女の臺湯島の社地群集とて、高輪の賑はし、

兼三秋物 似枿

柳所枿小似て肥満、

八月 庭たき

鶺鴒（鶺鴒）のせの、濁酒（濁酒）の酒あり、

和名毛呂美今、俗濁酒といへ、

九月 鬼箭

良安云、衛才和名久曾末由美、

其葉秋よ至て紅葉す、面色丹の如くやして青赤相
襍錦の如し、故俗錦木とり入子と結ぶ二顆ほ
て尖り小正りして紅あり信州野州の山谷ふあり、

七月 星合、星の契
齋諧記 天の河の東ふ織女あり、乃天帝の子

あり、機梭小勞役して容と理る小違あらむ、天帝其
獨居と憐とて將小嫁せんとして、河西の牽牛と夫小
與ふ嫁して後竟小女工と瘞も、天帝怒り責て河東

小歸らしめ、惟一 **星祭、星の手向**
周處凡土記 七月七日の
年小一會せしむ

夜庭と洒掃して、露小几筵と施し、酒脯時の果と設
香粉と河鼓織女小散し、云注云二星辰会さるる小
當て、夜と守る者皆私願と懐く、或云天漢の中と

見る小爽爽とる白氣あり、光曜五色あり、此とりて
徵應とて、見る者拜して願ふ、富と乞ひ、壽と乞ひ、

子と乞ひ、子と乞ひ、唯一と乞ふるを得、兼求るを得
む、三年あて是とり、願ふ其作と受る者、ゆり、○
牽牛、犬飼星、織女、祭、河鼓、秋より、姫、薰姫とく、小姫、

百子姫、糸織姫、朝顔姫、梶の葉姫、とり、妻、梶の葉、
天の川、秋去衣、石枕、九枝燈、庭の立琴、紅葉の帳、
火取香、願の糸、衣裳と曝す、芋の葉の露、素餅、銀

河、銀漢、雲漢、鳥鵲の橋、紅葉の橋、竿の渡、二星の屋形
乞巧奠、乞巧針、乞巧瓜、七箇の池、百箇の池、妻迎舟、
妻あり舟七種の舟、以上各頭字の部、小、もちて註を

星のかし物、いの部、衣裳と曝す、星合の濱

増山の井、伊勢小あ、本願寺の籠花、昨日

の晩、東西の本願寺末流、並家礼、花数種と以て船の状
と作り、又槽の形と作り、中小草花数品と建て、御門主
小献むらとと堂上ふらとと、盆市、草市、荷の葉賣

おく、今日七、諸人とれとと、盆市、麻賣、盆大鼓賣

紀事、凡七月街市小太鼓團鼓大小、加伊羅木、三尺手拭、
奇特頭巾、作鬢、金銀箔の紋所ホと賣、是盆踊必用
の具、又盆前、童子燈籠、臺燈籠、金灯籠、草挑灯、
小行灯と賣、是皆中元の夜点むる所、又索麵、梨

秋、は

乾瓢茄子、角小豆、空開梨、木蘇材、鼠尾草、荷の葉

麻、大小の土器、供饗膳、破子、くちあけ、ホと賣、是民

間聖、会、**穂屋**、みの部、御狭山、**鳳仙花**、時珍曰

の處用、奈の條、小出づ、其花小

頭、翅尾、足具、まり、翹然、として、鳳の形、の如し、故、名、く

二月子と下し、五月再、ハ、植、で、し、苗の、高、三、三、尺、莖、小、紅

白の、二、色、あり、大、指、の、く、く、中、空、あり、て、脆、く、葉、長、く、し、て

尖、く、桃、柳、の、葉、小、似、て、鋸、齒、あり、極、の、間、小、花、と、ひ、く、く、或

雑、色、亦、變、易、ま、状、飛、禽、の、如し、夏、の、**木瓜の子**

初、より、秋、の、冬、ま、を、開、謝、相、續、て、実、を、結、ぶ

時、珍、曰、其、實、小、瓜、の、如、く、あり、て、鼻、あり、津、潤、小、味、不、木、あ

る、もの、を、木瓜、と、も、鼻、ハ、乃、花、の、落、く、處、臍、蒂、小、あ、ら、ん

木瓜、灰、小、焼、て、池、中、小、散、す、以、て、魚、小、毒、ま、ま、し、**和漢三**

才、圖、全、世、小、木瓜、と、稱、ま、る、もの、本草、の、註、小、合、ま、ま、是、木

桃、く、く、木瓜、小、あ、ら、ん、武、川、江、州、より、多、く、こ、ま、を、出、す、

藥、肆、以、木瓜、小、充、近、頃、唐、木瓜、と、い、ふ、者、あり、人、其、花、と、愛

ま、ま、是、真、の、**穂掛**、**深塩草**、田、舎、の、稻、の、と、り、初、め、新

木瓜、あり、く、ら、き、藁、の、す、り、ぬ、く、と、い、ふ、もの、を、文

て、穂、と、組、合、せ、門、戸、あ、ら、と、倉、戸、あ、ら、

掛、て、神、小、奉、る、ま、ま、ほ、の、あ、ら、と、い、ふ、**兼三秋物鬼**

灯、**和漢三才圖會**、酸、醬、酉、五、月、小、花、と、謂、く、純、白、莖、亦

白色、あり、て、莖、ハ、青、く、宿、根、より、自、ら、出、ま、小、兒、中、此

白、子、と、鑿、去、空、殼、と、して、こ、ま、を、舌、上、小、合、て、吸、吹、と、記、ハ

音、あり、**○**今、の、世、小、女、の、童、の、く、く、吹、ま、**棠花物語**

初、花、の、卷、寬、以、五、年、の、所、小、御、色、白、く、く、い、ま、う、は、づ、は

あ、ら、と、吹、ま、ら、ら、め、て、**源氏物語**、野、合、の、卷、初、づ、き、こ、ま、

い、ま、ら、ま、ら、ふ、く、ら、ら、あ、て、ま、ま、こ、ま、を、こ、ま、

い、ま、ら、ま、ら、ふ、く、ら、ら、あ、て、**南瓜**、時、珍、曰、南瓜

は、出、三、月、種、と、下、ま、沙、沃、の、地、小、宜、し、四、月、苗、と、ま、ま、蔓

と、引、と、甚、く、繁、し、一、蔓、十、余、丈、延、べ、く、節、々、小、根、何、り

地、小、近、て、即、着、其、莖、中、空、其、葉、の、状、蜀、葵、の、如、く、大、く、倚

の、葉、の、如、し、ハ、九、月、黃、花、と、い、ら、こ、瓜、と、結、ぶ、正、四、月、て、大

さ、西、瓜、の、如、し、皮、の、上、小、稜、あり、甜、瓜、の、如、し、一、本、小、數、十

顆、と、結、ぶ、小、其、色、或、ハ、綠、或、ハ、黃、或、ハ、紅、あり、霜、と、經、て、

収、む、暖、處、小、置、け、ハ、留、て、春、小、至、ま、へ、**○**一、種、**南京瓜**

一名、東、埔、寨、一名、**唐、茄子**、本草、南、瓜、の、下、小、所、謂、**陰、瓜**

秋 ぼ

是螺芋 形螺ふ似て大 ほと鵲 鳥の部鳴の 星 茶不出川

月夜 つづく世に闇小星の多くて明るき夜といふ あり只秋季あり 東花式 古抄ハ星月夜の名と

あけて只秋ありとむらり云捨て月ふ去嫌の論ありとむらり
是ハ秋ありて月ふあわむを登勾殿才三才とふ此名目あり
ときハ其三句ハ素秋やと七句目の月の座ハ他の季
とて異名とむらりハ例の埒ありとむらり故

公羽芭の遺訓 **八月 譽田祭** ほんとまうり 十五日 河内國長野山 護國寺地藏院

の縁起ニ云當社ハ人皇十六代應神天皇の御陵あり
母后神功皇后の御胎内小ほりて三韓征伐の後
筑前の國小於て降誕脚腕小柄の形あり故小譽田別
の皇子と号し奉る是弓矢の家と守るありとむらり
此時小願もて久治世四十一年仙齡百十歳の春大和
國豐浦の宮小崩む玉躰と瑪瑙の棺小納り河内
國藻伏の岡小葬り奉る三十代欽明天皇の勅小よ
りて宝殿と營之三所の神明と祀る所謂中殿ハ八幡

大菩薩左ハ仲哀天皇右ハ神功皇后と世小神祠多し
とつとと當社ハ玉躰と納り奉るの靈厩ありて八幡
宮の根源威験深きとむらり云云○神祭八月十五日
と先ツ十四日の夜奥の院の御席前本堂へ鳳釐と行幸
ふし翌十五日午の刻還幸舞樂あり四月八日首宮祭
申祭兒舞隔年ふること行ハ放生會ハ當社ふこととむらり
よし但社 **放生會** の部八幡 **菩薩祭** 廿二日
説の趣と記 の条不出

肥前國長崎小於て米舶人船神と祭る八月廿二日
とほとまうりといふ 和漢三才圖會 舟の神と媽祖娘々
といふ俗とと舟菩薩といふ唐船長寄小未て住々祭
る所の神是あり 船中の品物と水揚 ○長崎小唐人寺
とて四ヶ寺あり福州ハ石灰町崇福寺漳州ハ下筑後
町福濟寺南京ハ寺町興福寺この三ヶ寺昔ハ唐僧
住と今ハ番主持ハ外小目付寺とて筑後町小聖徳寺と
のあり昔より和僧持ありはと祭の日ハ和僧ハ唐僧
東より法事修行ありハ本尊ハ觀音あり此日米舶人を
その寺院へ恭詣も其異体とむらりて言入群集をや

のへ四箇寺と 穂 ほすき 花芒 芒の穂と尾花とのふく
ふ黄蘗流る 尾花 穂と子とる形獸の尾

お似り、故ふ名く 牡丹の根分 ねぶん 和漢三才圖會夏
まこと花芒しゆいふ 月川の地と採

乾し、古き畑の土と細き沙と以上三品篩和八月紅き
芽と出ると移し栽べしとと培ふふ糞濁と用ふへ

らむ冬月油渣と用ひて少根の傍ふ入 頬赤鳥 ほあ
え或ハ鮮魚の洗ひ汁と灌ぐも亦佳あり

正字未詳 和漢三才圖會狀雀より小く背の色も亦
雀のし、其頬赤く胸白くして鳴鶉の文あり、声

青鶯小似て細く高し 畫眉鳥 えびす 同上 俗頰白鳥
常く蒿間不棲む 状ち鶯より大く

灰赤色眉白く 畫くか如く頰亦白くして間黒し
背上小黒點あり、翅尾畧黒く、尾の兩端小白毛あり

腹微赤黄色臆下小赤き斑あり、其足赤黒く其声
田滑りて多く轉る小鈴の音ある者其声と謂て

行鈴諸鈴 九月 星見草 ほしけんそう 菊の異名あり 藏玉
の名あり、庭りせふくく

りやほりこぎゆぐみ色とまがたあぞくる清浦○
異名ありとも星ありせてよびあり 古今のこの雲の

うふてくる菊はあまろ 鬼目 おにめ 鴨上ナ くのせ己人
ほりてらやまられり、家の祖根小自

然りと生む蔓草、葉朝顔小似て小白花と開、秋
実と結ぶ秋季はもみれハ其実を賞して、春秋その

実甚ど紅く鴨好んでるとと啄む依て名あり、菩提
○時珍曰白英ハ其花とつひ鬼目ハ其子の形象

子 校量類珠功德經 諸陀羅尼及び仏名と念誦
こわり、木患子ハ千倍あり、浄土小生せんことを求め

こ此珠と受よ水精ハ百万倍あり、菩提子ハ無量倍
くくせ己 昔洛東建仁寺の千光國師宋ふ入此種と

得て歸朝し、筑前の香椎報恩寺小植りて
傳ひてるなり、後其種と京師の寺々小傳りて

泉涌寺六角堂觀山の西塔ホあり、宇治の興聖寺ふ
子ここと見る、一樹小葉二色あり、一ツの葉ハ掠ふ似て厚

く大く又一ツの葉ハ木犀小似り、其葉小莖ありて莖
より嫩ある細枝と出し、をまら花さき実と結ぶ

秋 はへ

其淡黑堅硬して念珠として香氣芬々たり、與
聖寺の僧曰、是經小説る菩提樹あり、天竺此樹下ふ於
て佛成等正覚し、樹ありといふ、樹の高さ一
丈をり、枝極のふり、百日紅ふ似て甚ど奇樹也
杜

鵲草 和和本草 品葉ハ紫亭ふ似て短く小筋
多し、又篠の葉ふ似たり、蒼ハ筆の如し、花秋
開く六出あり、中より葉出て又花の形とさきり、葉こ
と小紫の點ありて、杜鵑の羽の形ふ似たり、あがり、赤の
ざく、莖の高さ
一二尺ふもさきと



兼三秋物 辨慶草

和漢三才圖會 景天和名以岐久佐俗よのふ、辨慶草、本
細小景天極めて種易し、枝と折て土中ふ、澆漑旬
日便生ざると、二月苗と生え、脆き莖、嫩赤黄色と帯
高さ一二尺ふもと折ハ汁あり、葉淡綠色ふて光沢
あり、柔ふ厚く、状長き匙の頭及び胡豆の葉ふ似て
尖らば、夏小白花と開き、実と結入、連翹のぐくやして
小く、中小黒子あり、粟粒の如し、人皆盆ふ盛て屋上ふ
養ふといふ、火と辟べし、故ふ慎、火草の名あり、按ずる

小景天佛甲草ふ似て大あり、さきと折取て擔間ふ、倒
不懸る、小日と經て潤まど、後地ふ栽る、小亦活き、と馬
齒草、不勝、と、蓋辨慶ハ源の義經の家臣とて、女
童相傳へて、強勢の士とて、故ふ相比りて、と名づく、
以岐久佐も亦 **布瓜** 時珍曰、六七月黄花とひらく、
活の字訓り、五出微胡瓜の花ふ似たり、蕊
辨具ふ、黄ふ、其瓜大さすむり、長さ一二尺、甚さきハ
三四尺、深綠色、皺の點あり、瓜頭體の首の如し、嫩ふ
る時皮と去る、蔬ふ充老
るもさハ大さ杆のぐく、
八月 紅草 和漢三才圖會
陰處ふ生も、其織紅色裏
白く細き刻有て毒あり、**蛇草** 大毒あり、故ふ
人近あらず、**蛇**

穴小入 月令 仲秋月雷始收声、蟄虫抔戸、和
俗春の彼岸、小出、秋の彼岸、小入といふ

と **七月 ととと 妻** とととハ妻の字と
よめり、稀少の義

あふこの稀ふといひ、き妻こ、故ふ織、女年下一度、まへふ
あふといひ、妻とよととと、哥あり、ととと **増山の井** **序**

とみてみつゝ入てもこへまる **頼桐** 天和本草 倭俗
りん云云 稻の花とりんと之を 唐桐 とりて高年二

三尺ふすきと夏紅花とひらく花繁多 **蓖麻** 蓖麻
ちて盛り久し美ゆて愛を盡し ひま

うせと 和名唐柱又くらぐらハ葉ハ大麻の如し甚と
大あり夏冬の間花穂と抽て色黄高丈余及

ふ實あり大 **兼三秋物 番椒** 天井守 和漢三
才苗全

番ハ南蛮の義あり俗云南蛮胡椒今唐芥子二月種
と下し葉柳の如くやそ小亦胡椒の木ノ葉ふ似て和

五月小白花とひらき実と結ぶ數品大小長短尖り
と田きとの種あり初め青く熟まれば紅あり秀吉公

朝鮮と伐りき彼國より渡る故俗又高麗胡椒と
りハ○天井守番椒の一種とくく上とびく故小名く

とと **菘蓂** 附 てんごを **唐の芋** 是と連禪紫芋と
まのり つら 色つく素 ハ蘇蒜曰毒少し

煮て食ふべし時珍曰連禪芋魁大なりて **鳥劫** ハ
子少し○莖紫色と帯ハ味美く栗の皮

部案山子 **八月 富賀岡八幡祭** 十五日名所
の条ニ出づ 記江

戸城南深川ふわり祭る所鶴が岡ふ同トといふ別
當大栄山永代寺 宗 深川才一の大社或ハハ神体

ハ菅公の作あり源三位頼政深くこまこと崇む其後
千葉家ふ移り足利高氏ふ傳へ基氏持氏ふ至り後

上杉ふ傳へて太田道灌ふくこまこと信仰と **磯石集**
寛永元年長感法印其夢のこありて永代島ふ宮居

と建立し同八年成就と○深川の主人本居神と云
祭礼八月十五日放生会あり二三十年一度祭と行ふ

とよらま **豊浦祭** 神社啓蒙 長門國豊浦郡龜山ふり
仲哀天皇あり **三十二社註式** 人皇五十六代清和天皇貞

觀元年男山は遷座の時行教和尚行宮と造りこれを
勸請と後土御門院文明年中建立と○今八月祭と

三月十四十五日の両日龜山祭ありと先帝祭といふ
安徳天皇の御祭礼ありと阿弥陀寺ふ御陵あり海辺

ふ宮ありこの祭前後四日の間鳥飛とと得と又平

秋 と

家蟹赤間が関の海辺に上る常はこのところ、是先帝の御祓月と里民より又九月十四日十五日八幡春日此両社と祭る國主より馬二疋其苗高三四と牽き競馬あり是八幡祭也

烏頭其苗高三四尺莖四稜と作葉艾に似て其花紫碧色穂と作其實細小桑椹の如し黒色本附子一物と種成熟も小至て四物あり天雄

黄蜀葵時珍曰二月種下し烏頭側子附子是也或ハ宿き子土にあり

て生む夏に至り始めて長む葉の大き蕺麻の葉の如し深緑色岐子と開く五の尖あり人の爪形の如し旁小尖あり六月花と開く大さ椀の如し黄

色紫心六瓣やして側てり且ふ開き午に收暮ふ落亦呼て潤金錢花其莖長きもの木賊刈 尚

六七尺皮を剥く繩索とあまべり木賊刈 尚

曰木賊苗の長さ尺むり叢生根毎小一幹花も葉もあし寸々小節あり色青く冬と交て凋む四月こ

もと採時珍曰木骨と治る者こもと用て磋擦ハ光淨なり木の賊といふが如し和漢三才圖會物と磋

と砥の如し故小砥草と称千振 ○本邦秋月を採る胡黄連 漢

三才圖會苗の高さ五六寸一根小數莖其莖細くして淡紫色葉地層草小似て小く七月花とひらく桔梗の花小似て小く黄色○千振天和本草胡黄連六黄連

小似て大く黄ふらむと味苦し此草日本ふりや未詳千振とて秋白花とひらき葉細く味甚どびりく

苦き小草山野ふありたうやくとて酴醴醪

天和本草酴醴花の條下小云本邦のハ白花千葉菊の如し依て筑紫とて菊といふといふ中花ハ黄色

ある者ありと農政全書ふ記せり唐黍 江戸の俗故ハ黄色の酴と酴醴醪とのふ唐黍

あしとて春の日待意こめ殿と九月 杼の唐黍との荷今

實蘇頌曰三四月花とひらく黄色粟の花小似とてこくうせ 山木あり大木あり葉の大さ七八寸実ハ粟より少く大く餅ふ作て麩とて山羊の食

とも木ハ斑文あつて諸の器ふつらり箱とも甚美なり

木曾の山中不多し、是と麩とまざる、其粉と熱湯を
ら糸調へ温飽のどく棒、小捲て温まる内、急ふこま
と伸じ、冷まハ堅く縮つて伸じ、其手廻し

罌子

甚急なる故、俗諺は擦麩棒、あつといハ是あり、
天和本草、荏桐とも油桐とも云、夕モと訓む

桐實

るハ非あり、桐不似より、其實大毒あり、食ふべ
りらも實、油多し、民用とたまふ、此油とぬると青漆
の如くまゝ法あり、○時珍曰、罌子桐の實と荏桐と名く、
罌子ハ實の狀罌不似とも、因てあり、荏ハ其油、荏の油

不似とも、和漢三才圖會、濃州江州多くこまこと種、油子
まほりこまこと取、其功荏の油不同、煉成て漆、代ふ

桐油漆と名く、五色とぬると、常の漆ハ白色と塗と
あとも、又松脂ととも、船槽と塗る、水と漏らば、こ
とチヤンとのハ、○年浪草、桐油、ダモ、同物といへり、

ろ、**唐枿**、魚花果の異名、**團栗**、の子、數種、
の部、**唐枿**、この部、**團栗**、この部、

ドンクリハ、榲の一種、小榲といふ木の實、榲不似
て大あり、味、淡く食ふべ、榲の形狀、この部、

七月 中元

十五日 修行記 七月中元ハ、大慶の月、
道書小云、七月中元の日、地官

下を降り、人間の善悪と定む、諸大聖普く宮中、
道士その日夜、小於て經と誦し、大方大聖、
冥篇と録し、餓鬼囚徒といふ、解脱と得せ、**五雜俎**

道經ハ正月望と以て上元、七月望と中元、十月
望と下元とも、遂小三元、三官大

帝の称あり、是俗妄の甚しき、
地藏祭、**紀事**、**洛外**

六所の地藏詣あり、加茂御泥、池、山科、伏見、鳥羽、桂、太
秦、こまこ九一日六所の行程十四里、文徳天皇仁壽

二年、小野篁、地藏の像六体と造り、木幡の法雲山大
善寺、小安置を、故小の所と六地藏村といふ、その後保元

二年、平清盛、六ヶ所小堂と造り、こまことわらち置く、七
月廿四日、供養、西光法師こまこと與り行ふ、今ふ至りて七

月廿四日、諸人六所詣こまことと地藏祭といふ、洛下の
兒童ハ、又各香花と街衢の石地藏、小供してこまこと祭

る、又今日六齋念佛の徒も、又六所の堂、小詣り、太鼓と
撃鉦と鳴し、以て踊念佛ととも、俗これと六齋太鼓と

秋 ち

新嘉、洛東光福寺

ちくろ虫

名分類 ちくろひ夜

干菜の一派をうり、
ふく風やまじりらんやんれ
むいれよよる声たのめ

兼三秋物 茅

和 大

本草 白茅本艸小蘗頌云春芽と生じ針の如く俗小
こまと茅針といひ小兒好て食ふ毒あり血と破る血と

止む 九月 重陽

潛確類書 重陽ハ魏文帝の
鍾繇小典る書ハ歲往き月

来て忽ち復九月九日九と陽數よりて日月並ひ應じ
故ふ重陽といふ俗其名と喜して長久よりて宜うんす

故ふ寡して 重陽宴

公事根源 九月九日ハ節
日にて侍まむ菊の宴行ハ

高会ハ享ま
るこまこと重陽の宴と申九月九日八月と日と九陽
の數ふ叶ふがゆらん小重陽といひありむうハ天子南

殿ふ出御ありて節会行りて上達部御子達より始て
其道のハミに探韻給り文つくり文臺ふめて講せらる

十月の旬のふあはもけふも氷魚の例あり又羣
臣ふ菊酒と賜り大くハ五日の節会ふあ御帳の

左右小葉黄の袋とけけ御前小菊瓶とおく又葉黄の
房と折て頭小挿め悪氣とさるといふ本文あり下畧

千代見草

よまの草 菊の異名あり慈童八百余
歳の後出で彭祖と名と替

て長壽の術と魏の文帝小傳ハ奉り文帝百歳の壽
と成ら多かり和歌と菊ふ千と世の秋と詠むこと

珍しくと此意 契草

菊花の異名ハ藏王陸奥
國ハ兄弟あむりの世ふあ

てまびて弟ハ筑紫へ行りてとがひふ名残と惜と別れ
りるとき兄庭前の菊と一本と二つふまけつ意しえ

とりのいこがひふ此きくをてまびつとひたり弟
筑紫へちつ下向して此きくとうまたりこの菊二ふ

分しまふかて技
て小化咲るるとあん

兼三秋物 律

の調

索隱曰按むる律十二あり陽六を律とと
黄鐘 大簇 姑洗 蕤賓 夷則 無射 陰六を

呂とと大呂 夾鐘 中呂 林鐘 南呂 應鐘 是也名
づけて律といふ貞徳曰こられちらべ秋こまを

秋 ちりぬ

呂の声ハ春よあふべき道理あり
共其さこそをいひに呂の雜やま

八月 龍膽 草

和漢三才圖會其葉莖の葉よ似て厚く、九月花を開く、
花紫やして鈴鐸の形の如し、上ふむく、花中小蒼子の
リ、又正白花の者あり、笹龍膽とあづく、八雲御抄、二の
草、三の草と云、○思ひ草、八重垣、龍膽といふ、

露くさといふ、通具御説「道のへの尾花がもとの思ひ草
今さらふまど物とありん、○こま真洲翁云、木丹
とよまきて云、字書、木丹ハ、施子の花也、と出る是、
源氏とよめの巻、四季といふ、その夏の方ふ、花橘撫
子、さうびん、ふおとやりの花とさづく、うもてとあり、
是、これ夏くさふ、いらくれ、あること知らる、○尾花
がもとの思ひ草ハ、龍膽と定家卿の御説をよむと、
む、つ、あ、い、こ、に、を、龍膽といふ、ハ、誤とあづく、

九月 鯉魚風 九月の風、李賀詩、明前
流水江陵道、鯉魚風起、美

兼三秋物 零餘子 野山菜也、草、解と蔓

葉の形状混雜して分別せざり、草、解亦零餘子ありて、
山菜の如し、故、小諸説、草、解と以、山菜といふ、
其、蔓、紫色と帯ふ、其、葉、山く、大あり、其、花、白色、穂
とあして下り、垂る、草、解、其、葉、円くして、大り、且、枝
わり、其、蔓、青色、淡黄の小花といらく、隨て、葉と結ぶ、
三稜あり、山菜もま、葉とむま、故、小見、易、ら、む、

九月 白膠木紅葉 時珍曰、楠木木の形、椿
のどし、五六月、青黄色の

穂とあふ、一枝、小、累々、と、り、七月、實と結ぶ、鹽、層、
子と名、川く、葉の上、小虫あり、五倍子と結ぶ、成、せ、

八月 縷紅 如し、莖より蔓と出し、八月、小紅花と
いらく、形、丁子、小似て、長さ、
六七分の花あり、愛ま、べし、

溜璃鳥 和漢三才圖會、碧鳥、俗
云、留里、大、雀の、こ、く、か、して、頭、背、翻、上、翠、色、頰、頰、臆、
下、小、至、て、純、黒、胸、腹、白く、嘴、脚、尾、具、小、蒼、色、其、舌、圓、
滑、あり、て、

七月 鬼の洞念佛 七日
清く、轉る、

秋 ぬると

とワハ又オホトチハ女郎花小似て花白きありと云々
 をこころの花と云々人敗醬と名づけしハ此花葉の臭
 醬の損じしと云々本草云つり今試る小然ア
 ○此花と女子の艶姿小と云て讀ミ歌俳諧とも小
 同ト古今名よめてと云るを云々續猿蓑と云ハ一鶴坂
 みきと人ふと云る於僧正遍昭續猿蓑と云ハ一鶴坂
 の杖おきふく杖の凡天和本草杖ハおきふくと
 云々馬寛おきふく杖の声おきふく淀川其外處々小阿羅
 山野おと水辺も生む中実おきふく少ハ其中と云
 草と云ふと生ト似るも此ハ水草也○杖の葉小凡
 たりて音おきふく杖おきふく大和本草おきふく麥門冬おきふくの一種
 とも杖の上凡と云ふおきふく小羽草おきふく小て葉ハ大葉の麥門冬おきふく
 小暮春及び夏の初め純白あり故小羽草と云ふ後
 漸く青くも根小門冬あり尤大葉麥門冬のごとく小て
 異草也滑稽雜談按おきふく和名おきふく白頭翁おきふくと翁
 草と和らげり然れどもと本草綱目と考つる小別
 種ハ白頭翁ハ俗云ふ猫草小畧似り今云羽草ハ
 あらも翁草ハ初生の葉純白あり秋月紫花と云らる

穂の如し猶考ふべし又此草と云羽草と云翁草と云
 と云混をべらる九月の部小註と弟切草おきふく

和漢三才圖會初生地膚子の根ハ似り兩相對し枝
 小極あり莖葉おきふくと按おきふく汁ありおきふく須臾おきふく紫色
 變む六七月小黄花と云らる單五瓣おきふく細き葉
 あり莖と結ぶ三稜あり中細子あり藥小用入相傳
 入花山院の朝ハ鷹飼あり晴頼と名づく其葉おきふく精おきふくと云
 神小入鷹傷と被おきふくある時ハ葉と按おきふくと云おきふく
 ときハ愈也入草の名と云ひ問おきふくも秘おきふくて言おきふく然おきふく小
 家弟密おきふくと露おきふく暗おきふく大おきふく怒おきふくておきふく又傷おきふく
 云々おきふく鷹おきふくの良藥と云ふ弟切草と名づく○又葉師
 草と名づく慈鎮和尚鷹おきふく百首おきふく秋の野おきふくと云らる

青くとりりて鷹おきふく旋覆花おきふく燕頰曰二月以後苗と
 やさしそちるらんおきふく生おきふく多おきふく水おきふくのおきふく
 近し長さ二尺以來柳葉の如し莖細し六
 月花と開く菊花の如し深黄色七八月小及ぶ

兼三

秋物 鬼芒おきふく時珍曰葉芽の如くありて長さ四五
 尺甚と快利なりて人ハ傷おきふくと鋒刀の

秋と

如 **辛生の浦梨** 梨生浦伊勢守和哥ふこの浦

古今と人のちらふふとてこゝにありしなり
小田守、晚

稻守 山田守九田と守て稻と守るハ
八月尾

花の粥 大内記田原康富日記 文安五年八月朔日卯
云尾花の粥の事、その由来何事なるや、自

然見及ふのよ一問しめあへいまど見及むその子
細とちらふは返答一畢ふ、云 **海人藻** 八月

朔日、小花の粥、内裏仙洞以下令用給良菜、云彼粥
調法、薄黒焼ヲ粥ニ入合也 **後水尾院** 當時年中行事ハ

朔の条ニ云、夕々この御いし、初献は **鬼のちこ草**
紫死の事、云 **白粉の花** 和漢三才圖會白粉草

の部とて、正字未詳、春苗と生し
冬枯ふ、高さ二三尺、叢生、葉淡青、少て赤く、白雞頭ふ

似て微小く、四一、其花朝以後萎、夕陽ふ至て開く、深

紅色五出、單葉、少て草の長と一寸余、亦紅花の中ふ
紅の皮と出を細く糸の如し、萼の本ふ子と結、灰黒

色、皺胡椒の如く、中ふ白粉、中ふ緑、採て婦人
の面ふ塗、光沢銚粉は優、中ふ中草の書、云

外國の物、大 **車前子** 蕪頌面經 春の
和本草、云

地ふ布く、匙の面の如し、年と累一者長さ尺余、中ふ
數莖と抽て長き穂と作、鼠の尾の如し、花甚細密

く、青色微赤き実と結、草、今入五月苗と
採て七八月実、珠 **尾花** 此者苗或ハ花とて

む、古来より実とて八月 **思** 名の部、穂若
の部とせり、故、云

草 この部龍膳 **黄蜀葵** 名一物、この部
の条とて、

落穂 詩經 此有滯穂、伊寡婦之利、注云、滯ハ
遺、棄るの意、收成の際、滯漏の未
穂、わらひ寡婦、こゝとて利、こゝとて得、こゝ此
豊成餘あつて、及く取らむ、又寡、こゝとて共ふ、

秋と

こと見ても

列子 落鮎

和漢三才圖會七 八月最長三尺

拾穂者行歌

近し此時鮎芥子の如き者腹小満其背淡斑の文と
生さ刀刃の錆くま如し故不錆鮎といへ九月湍の水
草の間ふ子と生さ後漂泊して流し墮して死さ是
落鮎なり其下こ落るゆゆと持葉と構て以てこまを
捕へ名つけて下り葉といふ
九月より肉瘦味甚劣
九月 岡崎祭 十
日或ハ東天王祭九月十五日洛東岡崎ふあり名勝

十六日志九月十六日祭礼云云紀事東山岡崎正一位
東天王祭神輿一基銚七本有りその内一本の銚鋤
下二埴と以て鷹二連櫛犬一疋と造り彩色と施す
是と大鷹銚といへ其傍に感神院の三字と彫刻を疑
らく八田感神院の銚云云當社に聖護院の杜小あり
故有て吉田の地不移と然る小同神社亦岡崎ふ何
る故小東西と以てこまと分つ雍州府志大鷹の銚
ハ村人神室と称 豺祭獸 月令此記戌月之
候祭獸者祭之於

天戮禽者 弟草 少女草 菊といふこも草同前
殺之食也 藻塩草ふいふあり

梅と花の兄といひ菊と花の弟といひ故やや○古露ま

こまひおわいし 少女草あらま風ふと花ハあて小蛇
おきまふこ 菊とも松ともり住吉の里小五位の松とて
公羽草 年よりこも松ありふの此松の神やあるとけん

後小ハ化して公羽小成て任り常小心とま海して琴
とあらふ又庭小菊とて名て愛しり久翁が言我庭まこ

り松蔭まのそまむ翁が草の花もさあん○此故
事小ありて松とも菊ともこも小翁草といふより
老

母草の實 三四月一莖と抽で淡黄花と開く
穂の如し其莖高ららむ随こ実と

結ふ生ハ青く熟すとハ真紅果々として天南星のまふ
以て可愛三才圖會 万年青葉芭蕉ふ似て隆々として

衰へる其多壽と以て万年青と名く大和本草 落
唐ふハ一切祝儀に用るゆゆ花鏡ふこまあり

栗 熟せんとして子出て其苞 遅稲 晚稻 時
自ら裂けて地小墜る物是

秋 とわ

日種稻早中晩の三収あり六七月収る者と早種と
も八九月収る者と遅種とを云云是遅種あり時珍
曰十月収る者と晩種あり芋環拾遺田のむら
とす云云是晩種あり

ハ所々稻と為て後田ふ菜種と植る故ふ
兩作所といふ田の水と落さハ菜種と植る用意

すん 鉄懸の木と旧事紀ふ載るもの
是あり秋甚紅葉を立花と好む者秘藏して

わ 七月早稲 時珍曰六七月収る者
者早種といふ食ふ

童相撲 扶桑畧記 延喜元年七月廿八日
丁丑童相撲廿番と御覽綾綺殿

兼三秋 七月六日童相撲廿番終つて舞と奏と

物木綿取 挑吹 和漢三才圖會 其实挑の如
し四ツ小裂て中よ白綿と出

すことと挑吹といふ綿車と以て中の子と繰り去る
竹と以て小弓と作ら弦と牽て綿と弾くといふ

若煙草 和漢三才圖會 煙草相思草 淡
婆姑 淡色菰 羅山文集 佗波占

希施妻 皆番語也云云 按てふ天正年中南蠻の商
船始て此種と貢を以長崎の東の土山小植二月種と
下も五月移し植新芽と摘去る虫を除去し毎旦
怠るべからざる高三四尺葉高陸よ似て長大七八月
葉と米こも葉と覆てこもとわさし一宿と取
出し一葉と小繩ふもこみ編るがごとくして晒し乾し
一夜露宿して後晒し乾き黄赤色とあり

八月

楓菌 和漢三才圖會 此月諸鳥異國
より群飛して

山林江湖小来る 是と渡鳥といふ **九月** 度會新嘗會 外
宮

十六日 内裏より初稻と伊勢兩宮へ奉らせ給
宮十七日 大嘗会といふ御即位の後日本國中
の神々へ御饌と奉らせらるる

新米と奉る故よ早稲米の御祭云 **吾亦紅** 陶
弘

秋 わか

景曰地榆其花子紫黑色或の如し故又王豉と名く云是北土景小のワレモカウ本名王豉一名地榆比叡山鞍馬及び近道ふ生む宿根より二月苗と生じ初生地ふく独莖直上高三四尺對し分て葉と出ま榆の葉ふ似て稍狭く細長くして鋸の齒の状ふ似て青色七月花とららく椹子の如くや紫黑色

加 七月 梶の葉姫

異名分類 梶の葉姫 棚機七姫の内あり

ハ八雲御抄の梶の葉よとの書也皆由緒あり云漢雲問答は芋の葉の露と硯の水と梶の葉七枚小歌一首づ書よる是等ふより

梶比葉

年浪草 和俗七月六日市中小穀の葉と賣明夜詩奇と書て以て二星小供も所あり又短冊小楸の葉と用て詩歌と書く和漢三才圖會和名加知俗云加按もさる楮の皮今多く紙に造る又布に織往昔木綿と称も今も亦祭祀の人木綿織ふ被る上古の衣服小象の敷今二星小供も時詩奇と數の葉ふく牛女神と

祭るの故小本綿の義小象らる菅草長高辻朗詠抄曰昔余吾の海小天人下羽衣と獵師小盜ま心あらば獵師の妻とあり年月と經て羽衣と取得く天上し再び人界よ下りて獵師と共に天上も女ハ織女とあり男ハ牽牛とあり其再び天へ上るの時梶の木の上より糸と降りし是小取付て登る故二星の手向小梶の葉と用ひ願ひの糸と五色の糸と用ふと云畧して爰小記此事淡海志に云

の鞠 **河鼓** **烏鶉**

鞠の糸ふ出つ

河鼓の糸ふ出つ

烏鶉の糸ふ出つ

藻塩草 鴉鷲記云史記小云瓊小夫婦あり夫と遊子といひ婦と伯陽といひ皆老と契り子ハ

二ハの候陽ハ三四の旬也云此文のころハ遊子十六歳伯陽十二歳夫婦とも互ふ志切共月と爰まると限る夕小ハ月の出ると待て里小行曉ハ月の入ると惜て高峯小上る伯陽九十九と死ま遊子深く歎て月と形見とらる或夜伯陽鴉小乗て空と飛とらる遊子殊も歎きて百三歳わて

死せり天の星とありて鳥に乗て天と飛行て銀河を望
 て川と隔てたりと云々帝釈毎日此河を水とあひ給ふ
 故水けなき有て渡ること許さる然りと云々也
 月七日あ帝釈善法堂へ御参りの日ある水とあひ給
 ふはして渡ること許さる年一度と云々也人間の鳥
 一日一夜あり此と云々鳥と鶴と羽とありて橋として星
 織女と通せん是と鶴のこゝろあり云々 **大和本草**
 鶺鴒ハ畿内東北の國ふと云々筑紫ふ多し朝鮮より来
 ると云々也高麗鳥と云々鳩より小くつらみより大と云
 羽小黒白あり尾長し本草ふ載る鶺鴒あり合り **門**
茶 せの部扱待 **縣心躍** 紀事十四日あり晦日小至
 の条ふ注る 夜ふ入大入小兒街頭は躍
 と催し或ハ又各同列して相知處の家ふ至て大は踊躍
 と云々是と懸踊といふ掛らる所の家再び踊躍と催し
 て云々也酬ゆ、つげらふとの部ふんが、つげらふと
 是と返しと稱へ、 **蜻蛉** くの条ふ注る **螳螂** つげらふと
 こいの部 **柏ちる** **御傘** 拍ちるハ夏あり無言抄ふ
 秋と有と僻事のかやりの常

盤木の鬱ハ夏の中 畧今此國の人の申柏ハ初秋小紅葉
 てちるものといへり此注よつきて無言抄ふと云々也これ
 つしと云々也 **増山井** 夏の部ふ貞徳説夏あり又一説
 秋ハ **貞享式** 此柏ハ御傘ハ説ありて論語の松柏と證
 と一畢竟ハ雜と云々也 **兼三秋物** 桂
 散字と結んで次て秋と定へき **兼三秋物** 桂
男 といふ條ふ出づ、 **鴈来紅** 兼雞頭時珍曰雁
 穂子とも小雞冠と同一其葉九月鮮紅と云々也望よ
 花のとも故ふ名く兵人呼て老少年とも一種六月葉紅
 の者あり十様錦とも云々也 **雞頭** 雁のくも時猶
 赤し芭蕉 **増山の井** 雁来紅一説うまのの花云々
 枕草紙ふうまのの花 **枌** 時珍曰枌高樹大葉圓は
 雁の未し書といへり云、 **枌** 光沢あり四月花とひらき
 黄白色實と結ふ青綠色ハ九月熟も **烘披酥枌** 白枌
 胡盧枌 樹練枌 木茨枌 似枌 伽羅枌 山壁枌 華枌
 田舎枌 君遷枌 樽枌 樽枌 **枌** 藏番曰枌餅黃枌
 以上各頭字の部ふつらて注る **枌** 藏番曰枌餅黃枌
 米粉を和して **糎**

秋 加

とけて肩骨く鹿の妻といふをて、曰事紀才二云復令中
 臣祖天兒屋根命忌部祖天太玉命内坂天香久山之
 真牡鹿之肩而取天香久山之波波加而令占矣古事記
 の説よりいふや、神代より鹿の肩骨と扱てうらなひ
 らるゝも、かの木八和名抄云櫻桃和名波加一名 延喜
 式云九年中御下料波々加木皮八和国右封の社
 小仰て採てことらふら 夫婦相そむせ離離
 れと進らむ、**片鶉** して居るといふ、**駉鶉**
 草鷹狩いこま馬上下て鷹と居
 て、りり立て鳥ふ合するといふあり、**八月 菅大**

臣祭

十六日 雍州府志 京四条の南綾の小路西洞院
 の東より南北道と隔て是善公の宅

地この内北は菅神の祭あり是菅神降誕の地故不
 社と建てここと祭る、**神社啓蒙** 或人云此所昔菅家の
 館一夜飛梅の天神といひ是こ今飛梅の跡この地不
 存也又説小文字の宅ありて菅神をめては座の地こ
 浴の人阿米神と称も例祭八月十六日社迎の氏子是
 と祭る神楽一基童子素袍供奉社僧といふふとこへ

亀戸天神祭

廿四日 江戸本所の末亀戸村より
 祭る所筑紫太宰府の神

体よ同じ寛永三 寅年菅家の末兼大鳥居信祐
 建立も祭礼八月廿四日本所牛の御前と隔年菅家の
 神室天國の劍といふありこの外後水尾院の宸筆安
 樂寺の瓦硯もみちの文臺大關秀吉公の文臺と連う師
 繪等神庫よ藏祭の日奉幣、**貝割菜**
 神樂ホりて近來正祭あり、**貝割菜**
 菜の条出

苺萱

天和本草 霜草莖葉節穗皆葺の如くして
 小宿根より春苗と生る葉は青白のこ筋

多くまがして本末を通じ四五月穂と生む中華の
 書いまいまご見て葺草の類かルカヤともいふ、**新撰**
 嵐や岡辺に茂るわらもの上葉の露はまがこれらん、
 衣笠内大臣の萬葉集に苺萱といふる、後世の二種の
 苺萱のあらを秋苺といふる萱といふ、**萱川 萱萱**
 とし和訓葉は雀麥ことといふらうし

萱の軒端

倭名抄 茅和名 萱和名 天和本草と
 カキ 長短一種あり短き者こカヤといふ

秋 か

御傘 萱菅、萱葎、軒端植物もあらむ秋ゆめあつたき道理からゆめあつたき名草ハ秋の季大切なる故ふ用方がよきとてつくりせ御傘編集の時、事甚だ無数よつて、如此了簡多し、屋根も皆て何十年よるもの秋季植物ハ用ひてし、宜しくらざる式、**桂の花** 木犀ありしと、蕉門の徒はとて用ふべし

南方草木状 江南の桂ハ九月花をひらけ、子ふ、此木犀

あり、**本草綱目** 菌桂、巖桂の二種あり、菌桂ハ葉材の

葉の如く、尖り狭く光沢あり、三縦の文ありて鋸齒は

其花ハ黄あり白あり、巖桂ハ其葉ハ鋸齒あり、此花の

葉の如く、平て粗濁め、者俗呼て木犀、**蓋草** 蕪頭

と云、○木犀の花、香気高く人として酔ひ、**蓋草** 日蓋

草ハ兼竹に似て細く薄し、亦田小ハ荆襄の人煮く

黄色と染じ極て鮮好、**和漢三才圖會** 多く越前よ

こ出を以て深家必用の物とて、按むるハ倭の蓋草

竹の葉に似む、芒の類ハ江湖大浦の辺、山中最も多し

老鴉瓜 王章 ○時珍曰、王瓜一名土瓜、其根土氣

と作し、其實瓜に似たり、故ハ土瓜

と名く、王の子、何の義と云ふと云らむ、瓜、電子小似

て熟るとときハ色赤し、鴉喜ること食ふ故ハ俗ハ電

老鴉瓜と名く、三月苗を生し、其蔓鬚多し、其葉田々

として馬の蹄の如く、六七月五出の小き黄花とみらき

簇こみす、子と結ぶて、果をくり、熟るとときハ紅黄の

二色あり、**天和本草** 其實まろく長し、王章と云、王瓜の

実ハ文とむすべし、**籬豆** 本草と考ふるハ人家

あり、故ハ王章といふ、**籬豆** 籬垣の側ハ三月種

と下す、甘蔓生して延纏いて籬を蔽ハ故ハ浴籬豆と

名く、又和俗破牆豆といふ、此豆一粒と植むハ豆八升と

得ると破牆と八升、**芥菜時** 時珍曰、芥數種の

と音近し、故といふ、**雁** 時珍曰、雁の状

と下す、月令仲秋月鳴雁來賓、時珍曰、雁の状

も、**鴈** 鴈に似て亦蒼白の二色あり、今人白にして

小ふるものを以て雁とて大ふるものと鳴ること蒼を言

と野鴈とも、雁ハ四徳あり、飛、鳴、序ありて、前ハ鳴、

後ハ和ハ其禮也、寒きことハ北より南の衡陽小止る

熱きときハ南より雁門小帰る、其信也、偶と失ひて再

秋
か

又川才三見クナナドヨ伊弉諾山コト阿波魚前

この外も猶あり近ごろ山海名産園会へ書み交しく論じたまはるる小畧記も、青藍山は焦門の先哲のよめ

るのうへ蛙ふあると様蓑あやまりてききうむ

鱸しほの九月桂の宮相撲八日拾芥抄六條の嵐葉北西洞院の西九

月八日桂の宮相撲今昔物語天曆の御侍小震且より渡

り増長養老いんいん元医師ふありる桂の宮の前小大ある桂の木ありる桂の宮こころり

長養唐の桂心ふまきりとより雍州府志桂の宮一町云の神社江戸湯

第宅詳あり神田明神祭島ふあり祭る所

の神二座神社啓蒙大己貴尊鎮座とを將門の社ハ本殿と去る百歩大己貴尊八八五十五代聖

武天皇天平二年鎮座、將門の灵ハ六十二代朱雀帝天慶三庚子年二月十四日將門滅亡とその後怨灵とむく

祟ある小依て延久のろう一遍上人三世真教坊將門の灵と以て神田の神社ふ合せ祭の當社との今の神

田橋の邊あり此所いへ芝寄村今に至てく祭礼の日神輿とをとりく此所に留りて奉幣あり祭礼九月十五日花町山王と隔年く神輿二基引山三十六本踊屋堂太神樂ホこと小従ふこの祭の練物は頼光大江山入の形状と摸して二間余の鬼神の頭を造つて臺小のせて敷入とし何ふ引山の外今ハ是ら神事不預るの町内神田外神田大傳馬町濱町辺日本橋通町前後都合三十六町く神幸の町々ハ夜官より棧鋪と構種々の提灯と出して甚賑へ神樂渡御の町ハ本社より鎌倉町通り飯田町より田安御門へ入上覽所前常盤橋十軒店通り筋違御門と通て本社へ還御へ大抵祭式山王祭とおおむむハ神事能あり今ハあり

神主芝寄大隅守社上難波祭家五人巫女ありあり祭る神三座才一稻荷倉稻第二祇園去鳥才三平野仁德後三糸院延久三年勸請俗小仁徳天皇の祭とのハ毎年九月廿一日神事神湯あり氏子醴と醸と互不相贈る社説小仁徳帝の社ハ元大江橋の東上

秋

か

町の内ふあり是の皇居の
跡あり秀吉公の時上難波遷す
部野の宮の別と

かえらよもた
和名抄 菊 和名
良字枝木又云
加波良花波岐

天和本草順ふ和名抄よから
よむたと訓む但野菊よむべし
かこみ草
名あり 菊の異

藏王のうもせむいつこまうくのつこ草をこりも秋
とかり名残此菊は奥州新妻の里ふあり因縁無常

新妻といふ物語ふあり業平作是はきくといふつ
きて秋ふ入らう、彼物語ハ十月十五日しあり然る冬

時珍曰其木文木と名づく斐然として草米り
榎
故よこまこと榎といふ信州玉山懸の者佳といふ中

按ぞろ小羅願爾雅翼云被ハ杉ふ似て杉ふ異ハ被ハ
美しき實ありて木ふ文采あり其木桐に似て葉杉ふ似

たり絶て長ト難し木此壯あり壯ハ華き此ハ實る
ふん囊のてし其枝長くと擗攪のてし核ふ尖る

者あり尖らるるものあり核ふくして殼薄し黄白
色其仁生りて食ふべし亦焙り收じへし一樹數十

斛小下らど天和本草其木屑と焼を
蚊退くカヤリの木こりの字と畧せり
櫛の實
時珍

日三四月白花と開き穂とありと栗の花のごとく実
と結ぶ大サ櫛の子の如し小苞あり霜の後色さけて

子墜
和漢三才圖會本草綱目と案ども
小楓ハ岐あつて三角とまると霜の後

小至て葉丹し愛をへし雞冠木も亦楓の屬然し
楓の花ハ白色実大りて鴨の卵のごとく雞冠木の花

実と廻小異ふ猶朝鮮の松の子大りて常ふ異り
が如し雞冠木ハ數種あり高き者二三丈葉尖りて岐

あり蝦蟇の手の如し大低七八岐或ハ九岐又十三葉の
者ありとまると十二重とあり三四月嫩葉紅色と満山ふ

映む五六月青葉ふ復て深秋其葉黄と落つ歲経
るものハ五月小黄花とひらく狀飛蛾のごとく梢頭の実

と結ぶ中の子牛房子のごとく和州竜田雍州高雄山
最多といふあり秋ふ至て葉丹く赫耀くり天下これ

と賞美を凡草木秋紅葉も者多くあり蝦蟇手の
樹の葉勝るるも故小只紅葉と称するハ即蝦蟇手

秋
かよ

の葉あり、**桺紅葉** ハ雲御抄 紅葉の詠をる木、桺云

あり、**夫木** 秋くれバ山の木の川

の紅葉 紅葉の川水よりうらとひ、枯草上露

枯野枯草ハ冬あれども、**よ** 九月 淀祭

神社啓蒙伊勢向の神社ハ山城國紀伊郡淀の歌小

橋の東河中ハあり祭る所の神一座天逆向津姫尊

今三座淀姫の神千觀内供の天神天神以上三座傳云

千觀法師肥前國佐賀郡淀姫の神との地ハ勸請を

淀姫の明神ハ八幡宗苗の叔母神功皇后の御妹ト云

紀事淀大荒木の社祭日廿二日或ハ淀水垂淀姫大明

神の祭廿三日何まは是まうや土人云淀祭と称する者

是より是淀の鎮守と神異一基淀の堤路狹と神樂

還幸の時行列と立がよりよりて跡を先へ振うよりて

同じ堤と帰るより故跡先うら此祭とりのり

夜寒 夜寒秋ハ寒き夜

た 七月 織女祭

の雜書よ出てる事と經史よ尋る小未典據をる事あり

らむ詩經三皖彼牽牛改彼織女と云と説音以爲

二星名あらして實多一夏小正三言七月初昏織女正

た

七月

織女祭

牽牛

或書云牛女の天

河は會こく此流俗

の雜書よ出てる事と

經史よ尋る小未典據をる事あり

らむ詩經三皖彼牽牛改彼織女と云と説音以爲

二星名あらして實多一夏小正三言七月初昏織女正

向東十月織女正向北五雜俎牛女の事齊諧始り

武丁の妾言ふ成り博物志よ成る様も衆の浪説十

歳の下は婦人女子傳て口實とさる可なり文人

墨士乃習て常語とを天上の列宿とて横は汚蟻

と被りしむ亦怪むべきの甚しき小わたりや云然とも

詩哥連俳の道浪説と

薰姫 織女の異名あり異名

分類公事浪源ふ乞

巧菓の机の上ハ火とるふ

短冊竹賣 七月

六日市中較の

秋

よ

た

ふりまゝのふ邪宗門御改の砌我家に何宗よりとり入
るありふ常ふ佛檀と設くることいふあり四葉物語
魂祭るとい一年は二度ありのうらやまて此月の祭と
年のとりよるもいふありてのれいふあり徒然草
十二月晦日の夜のこととて余ふ亡人の来る夜とて魂祭
ること此項都ふありこといふまのくふに猶も
このありしころ哀まき枕草紙ゆづり葉と師事の晦
日ありてめめても人の食物もあて云云○御經
菩提寺の僧来りて神前ふ誦經すことと御經
といふ○この部孟蘭盆全の条がなりていふべし
文字の火 いせの部施火 **鷹の埒出** 和漢三才圖
の条は出つ 会 四月羽
毛と易んしる時章縵と解さ去る鳥屋の内ふ放
つ日と逐て脱落して還新毛と生も七月中旬よりといふ
ことと片鳥屋といふ二歳毛と易ると兩鳥屋といふ三
歳と兩片鷲といふ○鷹とやわらうころり過ぬあり
今いふこととやと
鷹の山別 或鷹書曰鷹の山別
ハ七月廿五日ハ鷹の

巢と立父母は別るといふ下学集鷹ハ猛惡の鳥ハ
子生じて巢ふあり其子成長るといふハ親と食ふの義
あり父を畏て居巢より一尺杖と去て **鷹打**
子と養ふあり一尺量と呼び鷹打といふ
九七八月媒と以て鷹と取ると呼ぶ鳥屋待といふ鷹
の雛巢と離れて飛翔して自食と求る時常ふ絶産弱
巖の喬樹と度る其巖窟の辺ハ小茅と結んで居ると
鷹の至ると窺て羅と樹間ハ張死鳥と以て媒とて
ことと捕ふ此と阿賀計といふ **鷹祭鳥** 月令鷹祭
或ハ網掛は作る是と鷹打と云 祭鳥處暑
候七月 **玉の川ま** 天和本草 其実は梅嫂ふ似と
之中也 立花とこのひ人七月七日
花瓶は其葉と去る其実とのこ
して多く挾む此時其実粗熟 **兼三秋物** **龍**
田姫 岷江入楚 竜田姫ことと按むる小春ハ佐保山
の神より事ありさわ山の霞の色ふよせて春
ととむる神といふ秋ハ竜田山の神より事ありて紅
葉と詠むる故み秋ととむる神といふ又共ハ神の名ハ
秋 九

玉兔 つ部の部月の蟾と 立待月 新撰六帖我明と

七日の月、山の端の月と立待月と云ふは、衣笠内大臣の十

鷹の羽芒 白き魁あつて鷹 樽拔杵 是賦

関東の俗と樽拔と酒樽と 田の色 許慎

稻三月始めて生じ八月熟と云ふは、時ハ七月ハ

の庵 御傘田と守る時づり作て居る庵と 後撰 秋の田のうづし田の庵のと

八月 田の實の節 恃 昌黎月詩三

怙れ節 その部ハ朔 端正月 秋端正月今宵

出東溟事文類聚前輩中秋の月と名づけて端正の

月と云ふ。○季吟云端正の月ハ圓滿あると云ふは、

竹の春 竹譜竹ハ八月と以春とを 笥譜竹ハ八月

檀特花 呉響集客又曰檀特花と

和漢三才圖會 高サ三四尺葉芭蕉小似て小

甚柔あつた又葉茂小似て大く甚硬とらむ長サ尺ふ

餘り潤さ三四寸冬枯も春生む七月莖と抽んむ

花と開く深赤色形穂最も愛まへト子と結ふ圓く

黒色甚硬く用て念珠と作る本西南外國の草性最

多識篇 龍舌草 今按多豆 天和

本草 水中小生む葉ハ車前と似

草花 花鏡烟花一名淡把姑初て海外出後種

と漳泉小傳今地不隨てこゝあり木春不老

秋 た

小似て葉菜より大あり紫白の細花とひらく和漢三才

菡會八九月莖の頭小象種といふ小白花と開く赤

色と帯ふ畧紫苑の花小似たり玉章かの部玉瓜

子と結ぶ内小細子あり黄褐色の条注

蓼の花、蓼の穂和漢三才菡會二三月繁

花とひらく紅白色數品あり花穂と種瓢九瓢の

ち一実と結ぶ俗ふること種蓼と云、種瓢種子と

そづまのハ採収て是と搭のさきの下小鉤ふ或ハ火爐の上小

釣て水氣と去り乾き過して褐色とあり時種子とより

出し蓄い種茄子時珍曰茄中小瓢あり瓢の中小子

へやく、種茄子あり諸茄老小至つて皆黄あり、

茸狩木の子取爾雅菌ハ形蓋小似たり木菌土菌

石菌あり、○茸狩や鼻の先ふるあかと其角

大根時和漢三才菡會蘿菈大根八月ぬのむ

種と下し、彼岸小苗と出さ

雁伊勢物語とよりのこのひの雁むひとうふ君

狩と東人隣家相と小鹿狩事俊頼ハ田太刀

面の雁ことつり、諸抄雁と用ふ田の雁の事あり、

魚時珍曰鱗魚江湖の中小生と魚の形物と刺裂幾

始て出つ、状狭して長し、薄くして削はる木片のことし

亦長く薄くして尖る刀の形の如し、細鱗白色吻の上

小二の硬き鬚あり腮あの下よ長き鬚あり、麥との如し

腹の下小硬き角刺あり、快利のめどし、腹後尾小近く

して短き鬚あり、肉中小細き刺多し天和本

草本草綱目載る鱗魚小相似て同じ九月

高き小登るきの部菊酒九日○歳

醒醐祭の条小出つ、國宇

治郡小野の南、深雪山醒醐寺小あり、紀事九月九

醒醐天神祭能あり、又昨日夜小入て、清滝権現の社前

小於て能三番あり、こと夜宮能といふ○神藝三基才

一長尾天神才二清滝権現第三勝間明神以上三社心

當寺縁起云、祭る所清滝権現ハ沙迦羅竜王の才一女

長尾天神ハ延喜帝の御願小よりて、海願寺とあり

秋 た

故小勸請入勝間明神ハ神縁社説詳らむ（承切齒）

例祭九月廿三日小記を誤り廿三日ハ同所笠取祭あり

當寺の伽藍ハ山上下小降りて上醍醐下（室の市）

醍醐といふ土人長尾天神と以て本居と崇む

すの部住吉相摸 廿日洛東建仁寺の門

旅夷祭 前ふあり今九月廿

会の条小出づ

日るを祭る相傳ふ建仁寺の千光園師采西歸宋の

日船中暴風の難ありとあり（蛭子の像波濤小隨て漂

ふものあり采西とを収めてと祭る風を波靜り

て恙なきことを得たり采西寺小掃つと社と云今此夷

の宮是あり今小至して西海に赴く人此社小詣て風波の

難ありと祈る故小旅夷と稱を祭礼の日宮川町

辺の居民遺物造物ホと出也

神樂一基持餅（大般若） 黄大般若万重

やて花葉凡六百葉故小大般若（たもれ實）

ふちをどと名づく白色の者又ゆや

天和本草方土より（たもれ實） とも云漢名をきむ

桂の類二種あり一種ハ白タブと云葉ハ桂樹（似て香）

氣よくぬし冬赤き實ありツツノミとのハ鳥好んで食ふ

其實の大き木穂子よりや小肉と去ま（其内小山き）

實一ツあり一種クスダブと云其葉白タブ（似たり） 最よく

桂の葉（似たり） 桂葉（クスダブの葉ハ） とも本あり

ころる凡他木其葉のまぢ中（小一條） 桂葉ハ三條の

マ（本艸） 如吹りクスダブの葉ハ桂葉（同） とも

あり白タブと中のとて（さう） より又枝まら處々

クスダブの實ハ冬熟して黒し（こも肉） 去ま（其内） 實あり

クスダブの葉の形ハ桂と同じ味も桂（似て） 香

氣やま（ま） 白タブよりハ香あり味辛し木理クス

の本（似たり） 良材ハ白タブクスダブ（とも） 大木（中）

白タブクスダブの實（いづ） とも火（ふ） 油（多） 油（多）

こと（ら） 肉と去中の實の油ととりて（燻） 橙（抄の部）

燻（小） 作る（○） 桂桐とダモと訓（を） 誤り

黄熟（ま） とりの（つ） 正月の部（載） 八月

嘉祝（小） 用つ（故） 季（く） 二月の部（大） 漢



嘉祝小用つ（故） 季く（二） 月の部大漢

及（い） 葉相（似） とも（以） 名と得（五） 日（以） 矣（二） 下（以）

秋 れ

苗と生じ、蔓と引、莖葉卷讀並小葡萄の如く、やて小
 七八月小黄花とひらく、五瓣花の形、如く、瓜と結、長者
 四五寸短者二三寸、青色皮の上、斑痕、及び莖枝殺
 の形の如く、蒸すとも、黄色自ら裂け内、紅の氣あり
 て子と畏じ、熟す味甘くして食へば、形扁なりて、瓜子の
 如し、亦非瘦あり、南人言皮と以て肉及び塩漬、煮て
 蔬ふ元、苦く淡

連雀 和漢三才圖會 今處々小の
 形雀の大きのいこ、頭背
 胸赤色翅黒し、黄白の口、又あり羽尾の端、紅其尾短
 くして黒し、頂の上、毛冠あり、眼領の辺、黒く常小
 林、棲じ小群とふる形、赤きと以て、人さか、樊中、
 畜ふ、或ハ尾と披き舞ふ、さとし、畧孔雀の形、勢ふ似たり、
 但し、声好く、さし、比伊比伊、いひ、
 じ、蓋練鵲、字同音あり、物異

九月例幣 九
 月朔日より十一日、伊勢例幣の諸家門前、注連
 と引、門外、標木と建て、僧尼及び輕重服の輩、門内へ
 入へば、この字とある、ま、これと前斎とり、十一日の朝幣
 使登足、**公事根源例幣**とハ伊勢大神宮へ、脚幣と奉

らせめ、毎年のともれ、例幣とハ申、**續日本紀**孝德
 天皇天平始て伊勢大神宮へ幣帛使と製衣をらふ、詔、
 今より以後、中臣朝臣と差して他姓の人と用ふること得
 ざること命、あ、依て大中臣 藤波 祭主として、ま、掌ら
 る、**最上所と神**
 祇官代とま、
 漢和の篇、小云、爽ハ秋の、ゆけーととよむ、 **増韻**
 爽ハ清快、ささやくハ即ち清く快きの義、葵松年詩
 爽氣深出、
 袖の露 袖の時雨をいひ、か、如く、袖の滴
 千林赤、
 添水 かの部案山
 子の糸ふ出、
八月獻昨 ケ、た、と、せの部、款
 奠の糸ふ

兼三秋物爽氣 連、新式
 注、**蒼麥の花** 時珍曰、蒼麥一名莖麥、莖弱、翹
 磨て麥の、くも、故ハ蒿といひ、莖と、ハ、麥と名と同一
 う、ま、立秋前後種と下し、八九月收り、莖、性最霜
 と畏る、苗の高さ二尺、赤莖、綠葉、兼烏桐樹の如く、小
 白花とひらく、繁密、繁々然として、實と結ぶ、累々として

秋 ことつ

の劍つぎ三日月の状と刀劍の形なりの月つきの都みやこ 廣記 太平

羅公遠傳云中秋の夜時不空宮中より月と説ふ公遠奏して曰陛下臣不從ひ月中不遊んや否や乃ち祥杖と取空不向ひ擲つ化して大橋とあり其色銀の如し帝不詰て同く登る約まふ行と数十里精光目と奪ひ寒気人と侵も遠ふ大城闕くわん不至ふ公遠曰此月宮也仙女數百皆素練寬裳くわんして廣庭不舞ふと帝問て曰此何の曲と曰霓裳羽衣の曲と玄宗密ふ其声調と記して回る顧見ふ其橋歩不隨ひて滅と

蟾つづみ月の免つづみ 五經通義 月中に免と蟾とあり何とや月陰蟾蟾陰陽の免と並ひ明陰陽不係る○杜甫詩云搗藥兔長生

○白居易詩云照地幾許人斷腸金蟾玉兔遠不知○塔ハ月中三足の蛙とこと玉蟾とこと月の蝕くさく 天經或問 星月皆日の光と借日ハ月天の上不あり月ハ天の下不あり朔日月行と日天の下不在て日の光と掩ふ人地面の上不在てこと仰

き視ときハ其月の日と掩ふとことふあつて日光あたが如し然も定不常と失つる人其光とこと故ふことと日蝕とりの月蝕ハ朔より望月不至ふ一向ハ上度りて日月望む中間不正對するとき地球障隔も月地影の上不あり日地球の下不ありて日光とこと蟾とこと故ふ月其光ふし是と月食云

男おとこ 拾遺抄 月よと男月讀月夜見皆月の名つきの日本紀云ふ月ハ男神故不男とつ

出潮でうしほ 性理大全 余襄公安道云潮の漲退ハ海小増減するふあらと蓋月の臨む所則水柱と

西極不臨む故ふ月卯酉不臨むときハ水東西ハ漲る月子午不臨むときハ潮南北不平なりつきの彼竭き此盈て往來絶む皆月不繫る月の秋 御傘 夜る花の春とて月の宿 御傘 露水あふ結植物不あるも同じ

事居月とあはし 御傘 人倫あつて月 御傘 月 御傘 所あり

秋

の友 とも 御傘 人倫之但し句体小 ついで 朔日頃の月 つき

源氏浮舟の巻 ついで 夕月夜 云 炭俵集 細

とついでとついで月の宵の月利半 〇 月のものめとついで

とついでとついで月のものめとついで ついで 月の舟 ついで

とついでとついで月のものめとついで ついで 月の舟 ついで

月のものめ ついで 満月とついで ついで 鳥 ついで

女蘿ハ是松の上小浮蔓也 〇 地錦 大和本草 葉ハ衣の

紋小付るツタ小似て冬月も葉やらむ 〇 皆本草小の

とし和俗壁生草とついで秋ハ紅の 〇 又常のツタハ是小似

とついで冬ハ葉小似 〇 和漢三才圖會 鳥 菡 俗云 本細小

葉長くして光つ 〇 疎齒あり面青く背淡し白菡の葉

のどし故小鳥菡と名づく 〇 七八月苞と結び簇と

昔白色花の大き栗の 〇 黄色四出實と結ふ龍葵

の子の如し生香く熟まれば紫く内小細子あり 〇 云

是大和本草小の夏葛 〇 秋小至て葉深紅愛ま 〇 云

甘藷 和漢三才圖會 仙掌薯 葉薯蕷の葉小比

根の状似手柑小似て肥り大く攪漉者の如く故

小名づく 〇 鎮江府志小所謂佛堂薯 〇 云

粒芋 其莖小紫の理あり 白粉 枝と以

ね曝し乾す 〇 或ハ糸小繫て晒し乾す 〇 初菴麥積

稻藁と用て包宿してよく霜と生む 〇 豫州西条の産

甘美 〇 備州 〇 濃州及び 〇 妻梨 具さふハ

尾州の産ハ長さ三四寸 〇 名 〇 部 〇 繪 〇 行 〇 器 〇 敦賀祭

八月 〇 絲雀 〇 名 〇 部 〇 繪 〇 行 〇 器 〇 敦賀祭

氣比大明神ハ越前敦賀郡 〇 祭神仲良天皇 〇 瓦土

比ハ仲良天皇の鎮座 〇 例祭八月十日 〇 今月二日 〇 云

了十日まで近国廿里四方 〇 諸商人放下師狂言師等

来 〇 集 〇 二日 〇 神輿洗あり 〇 敦賀紙屋町 〇 所 〇 所 〇 入

例年紙細工の家 〇 墨燈籠と出し 〇 京の祇園 〇 難 〇 と模

秋 〇 〇

は三日神事四日と後宴と称し町々の氏子東番西番
も引山と出し地車や町中と引廻る山の上ふ一丈
むりの松と立四方錦織の幔幕水引ホ洛の祇園祭の
山の如し上ふ武者人形と飾る山の敷或ハ五ツ或ハ六ツ祭礼
當日ふこきと出ま天神の森と
鶴ヶ岡八幡祭
り所御旅所はして神輿遊行

相州鎌倉ふあり一名ハ雲井ヶ峯上の宮三座中ハ應神東
ハ神功西ハ妃大神ハ神下の宮四座仁徳天皇東ハ久礼
字礼の二神西ハ妹比咩ハ後冷泉帝の御宇伊豫守源頼
義朝臣安部貞任と伐時丹祈の旨りて康平六年ハ
月石清水の神と相州鎌倉郡今の下若宮の地ハ勸請と
永保元年二月成就義家朝臣修履と加ふ治承四年十月
右大将頼朝卿小林的卿ふ迂まがら今テハ雀ヶ岡あり
毎年八月十五日放生会並ニ祭礼奉幣流鏑馬角力ホ有
つとめし

司召

秋隆卿記司召ハ秋の除目あり京官除目号
も春の除目ハ縣召と号え各拜任の輩と
と召春ハ大政官の應秋ハ外記の應ふ於てとと召御
司召と称まハ司召定考同儀ととる猶この部定考

月見

の条とも見つ名月 今宵の月々人の月 昔名月
合も金し望の月 十五夜 三五の夜 月華

事文類聚 歐陽詹詠月詩序云月之為詠冬則繁
霜大寒夏則蒸雲大熱雲蔽月霜侵人最因侵俱
害詠秋之於時後夏先ハ八月於秋ハ終十
五之於夜又月之中誓於天道寒暑取月數則
蟾兔口況埃壙不流大空悠々蟬喧徘徊博華上
浮身東林入西林肌骨與之疎冷神氣與之清冷
○名月 潮東問答去来云三五十五夜ハ名月と
りいそのうちいづかの月々を名月といふ故あつとせ

きく然とも今日名月の詩哥と作らんふあふら故
實ハ限るべし尤故實ふよふ佳ふべし又明の字
と用るとハ和漢ともハ三五の清光と賞し来る故ハ明
と名と通ひとてりつて通用とべし○今宵の月、今
日の月、以上十五夜の月ハ限るとりつとを且るハ今
宵と賞まるとりつ中ふらされとつとハ續後衰
らふらあふむらさうひやせん々かの月 智月 ○昔名月

御湯殿記名月御祝三方ふ芋むり高盛て歳時

秋

拾遺浪華の俗十五夜と芋名月といひ十三夜と芋名月

といひ〇三五の夜白樂天詩三五夜中新月色〇月華

五雜俎人々の八月望月華あり或は八月夜半或は八月

後或いは八月のこあらを秋後の望といふことあり或は

いふその五采鮮明旁照數十丈金線の如きもの百餘道

或は但紅雲のこ開く繞るの鴨川兵比部攝謙少らじ

時一度ことと見るその景象鮮妍十態

方媚真人間まじり見ざる所の奇

草 時珍曰鴨跖草花と碧蟬花といひ三四月苗を主

花とひらく蛾の形の小し西葉翅のごとく碧色愛をこし

巧匠其花と採り汁と取て畫色と作と昔碧可くは鳥の

如し倭名抄鴨跖草 和名部 鴨跖草 月草と称

も月草ハ露草ハ万の花ハ朝日影ふらと咲と此花ハ月影

ふ咲けハ月 和漢三才圖會 土中より生ず

草といふ 土中より生ず 月夜草 大毒の

人通し 燕歸る 拾物總論 燕春社小来り秋

らど 社小来り故小是と社燕といふ 燕

和漢三才圖會 百舌及舌 鶺鴒 馬鳥俗ニ云真豆久見

狀鶺鴒のくくして灰黒色京師除夜毎小これを炙て

食ふを祝 例とす 九月 津村祭 八 棋及西成郡大

坂津村ふあり祭神 鎌倉権五郎景政 靈といふ 橋陽

郡談 昔津村河某専ら武勇と勵諸國と巡行して

軍術奥目と極む相模の国小至りて一夕景政の社小

詣て神殿不通夜時小神渠武勇と感託託して

云根津の國難波の勝地小祝ひ祭ま我將小汝と擁護せ

ん答云何と以て證とせむ曰枕上小神幣ありん明且こ

めてこまはばくして神幣ありみづのらとこと負ひ津

村小幣とて最祠と造り神幣と納てこを祭る御天

の宮これ元祿のころ御天の大明神と贈号あり毎年九

月二十七日神祭神湯の式あり津村の土人本吾神をも

椿の實 和漢三才圖會 海石榴の實口無果花

小似て老て枯るこハ殼四つ小裂け中は子

海松子のごとく皮と剥仁と取搾て 露時雨 露

油と取但千瓣の者ハ實と結をも 秋 つね

霜 露寒

古今にきつらひくこと申せしは露の
木の下露ハ雨ふまきまらり暮秋の露

露寒ハ露の気の凝んじると云ふべし

ね 七月願

の糸

公事根源云巧といふことわらうより事ね
らるり七夕祭とともくあり香花とともく供具

とともくして庭上ふまきとともくさとのこしふ五色の糸
とついで一事と祈るふ三年のうちふ必叶ふとついで此四色

ふ乞巧と申そし朗詠憶得少年念佛踊 洛北
長乞巧竹竿頭上願糸多し白居易 川合

村一乘寺村ふ念仏踊あり念仏 兼三秋物糸
と唱へるといふこと故に此称あり

まらち月

新六帖秋の夜のひとりねまらちの月うけふ
身と吹とわを度の松瓜 衣笠内大臣 八

重垣 まらちの月二十九日の 八月 薜菰草
月一説ふ子待と廿日の月

和漢三才品会 俗に云薜菰草朽木及び老樹の根上り
生じ九月十月盛ふ出一根座と云ふ數十叢生も織田

く泡頭銀小似て長さ一二寸莖細く葉軟く内
外灰白色凡て灰白色ある者と呼て薜菰草と此物

浅薜菰色あり 故に薜菰草称 七月 七日 御節供

日本紀持統天皇五年七月七日公卿と宴し朝服と賜
ふ紀事今日武家並地下の良賤各自帷子と著慶と

修入家々索類と 七箇池 事林廣記 藏
嘆又互ふ相贈る 夫人傳云高祖

漢宮七夕ふ百子の池小臨し五蟬を以て相羈とこと
相憐愛といふの七箇の池とハ星と祭る小七七のならし

小水と入て鏡とつけてほりの影とつとつとてハ百箇の池
ハ天の川ともいふかこ姫とハ棚機とつとて又百のとらふ小

水とつとつとつと 刀豆 時珍曰莢の形と以て名と
るとりつとつと

陽雜俎云赤浪不挾鈕豆あり莢横斜りて人の鈕
と挾めが如し即此豆あり三月種と下まで蔓生し引

て一二丈葉紅豆の葉の如くして稍長大五六片紫
花とひらく蛾の形のどろり莢と結ぶ長き者尺ふ近し

秋 七

微阜衰小似扁てあり 棗の實時珍曰按棗者

劍脊三稜宛然陸佃埤雅 三太有

と棗といひ小あつと棘といふ天和本草 夏芽と生故

ふあつめといふ○花の形春のふの部棗のむけといふ

条ふ 兼三秋物 梨子時珍曰梨木樹の高

賦あり、細き葉あり二月白花と開く雪の如し犬殺

紅稚子梨、観音寺梨、妻梨、松尾梨、水梨、田梨、空閑

梨、鹿の梨、との浦梨、山梨、木の種 鳴子、鳴子干

類多し各頭字の部小のちて注し

躬恒秘抄 棗の先小鳴子とつけて片山里小粟といふりの

と作し、榛と退ふ○秋の田畑小鳥獸と驚鳥具之

八月 長き夜夜の短き至りハ夏至ハ過ぎ夜の

秋の夜と以て長夜とまゝ所以ハ秋分昼夜等しく初て

夜の長きこと知れぬ夏の短夜と對して秋と長夜とまゝの

名の木散鹿文曰按もふ楓檀柞木のこころいふを

櫛ちる柞ちるといふべきと略して名の木

千梅も此事如何和漢三才圖會 榎の樹

のよりのあり和漢三才圖會 榎の樹

むらり小あつ者三四歩大小叢生浅褐色と帯内刻あり

甚滑其莖煤黑色奈女ハ滑ハ須々ハ煤色あり木ハ莖

の上ふりて 中稲和漢三才圖會 八月月

畝会八月小種と下し彼岸の中小苗と生と稍長 菜

種時注ふ 中汲酒半清半濁 九月 鳴瀧

祭福王子祭 鎮守の社洛西仁和寺の西北鳴瀧

鳴瀧川の辺アふらとと封む西朱雀より西河院ふ至り


九町の擁護神擁州府志 福王子の宮ハ西山鳴瀧ふ

ありと此此辺の地主の神なり仁和寺の鎮守とて西社

秋 なら

福王子祭九月二十八日神夷一基銚五本梅室の御所の庭ふ入云○福王子の宮祭る所斑子皇后へ皇后ハ桓武帝の孫女なりて、吏部尚書仲野親王の女、光孝帝立て皇后とあふ、宇多帝と生れ、此辺の地主神と崇り奉り仁和寺の鎮守と云、**滑誓雜談**俗ハ五器洗ひり、是一年中の諸社の祭祀の終りて、又當月の外ハ神祭らざり故に、毛吹草ハ鳴滝祭廿八日と記と、近來の排書外ハ福王子祭と並へ載り、同社の祭と誤り、再ハ出候、**和漢三才圖會**倭名奈良、俗ハ古奈良、樹の高と大、**橘**ハ、花實、柞の輩のど、秋ハ紅葉する時、人々賞と賞と、**大和本草**、**榊**ハ大奈良といハ、葉栗の如し、秋冬枯て落む、四五月花ひらく、栗の花ハ似り、實ハ楮の如く大、其苞半つたハ又小楮ハ木あり、材木とまへ、**南天**ハ、實の苞あり、半とつむる即、團栗あり、**天の實**、**獲頰**曰南天、株高三五尺、葉苦楝の如し、人家多く庭除の間ハ植、俗ハ南天、**ら**七月蘭、**ら**七月蘭、とりの、夏のふの部南天花の祭らば

ら七月蘭

宗輿曰葉麥門冬のごく潤し且、**四時常小書**ハ花黄綠色、中間瓣上ハ紫の點あり、春芳き者と春蘭とも色深し、秋芳き者と秋蘭とも色淡し、開く時満室、冬ハ香し、他花と又別、山谷曰一幹一花、香餘り、**大和本草**、**蘭**ハ、俗ハ花と玩賞する蘭、真蘭ハあらむ、今の蘭ハ本草ハそれと出さず、**蘭草集解**正誤ハ載す、

七月迎へ火

送り火 七月十三日黄氏日ハ及び、**都鄙**ハ、**聖**と迎へ

の義あり、此時門前ハおいて、必麻柯と焚て、**報恩経**とりの十六日又こまと行ふ、**五雜俎**、七月十四日卯時来り、次の日十六日午時、**五雜俎**、**人最**、中元と重む、**猪**、**陌**、**冥衣**の具と設け、**先人**の号位と列ね祭て、**女家**則父母の冠服、**笏**の類と具ハ皆紙ハ為る者、**塔**亦代て送る、**蒲**中ハ至るときハ、**清**、**晨**、**陣**、**設**らると甚

秋 ら

白交化、嘴黄色、鼻の辺微黒と帶脚脛黄、その声鶯
小似て、喧く好んで群とまじり、又小椋鳥の成相似、小

九月撰虫

公事根源是、あつて殿上の道通とて、殿上人の遊ひ

木蒙子

羅恭曰、蒙此
樹葉木槿に似て

て、嵯峨野をくひひいて、
虫と筆ふえらして奉ま、
薄し、細き花、黄ふくを槐に似て、稍長大、子設酸味、
似て、其中小実あり、熟せる莢豆の如く、田く黒く、
堅硬し、数珠とまろ小堪、ころ者是より、五六月

棕の

花収む、一、南人にて黄と染甚と鮮明あり、
時珍曰、魚患子樹甚廣大、枝葉、木椿の如く、特ふ
實、其葉對生、五六月白花と開き、実と結ぶ、大と

彈丸の如く、状銀杏及び苦楝子の如く、生、青く熟
まると、黄老とまじり、文皺あり、黄むとき、油燥の
形、如く、中畧、実中一の枚、
堅く黒くして、正、珠の四、
栗、
殼と去て仁とまじり、
擣栗の類あり、

七月 烏鵲の橋

孟蘭盆
しつかりの部み注せ

會

日本紀、齊明天皇三年七月、始て孟蘭盆と設け、同
五年、初して孟蘭盆會と諸國、小下し、講せ、む、
氏要覽、孟蘭盆は、是、釈氏の孝と述、恩と報、い、苦と救

ふの要、人、自蓮の母とまじり、と以て始とす、梵語、ふ、孟蘭
此、ハ倒懸と、り、盆、ハ此方の器、
云、目蓮比丘、その母の餓餽、中、小生むと見て、即鉢と以て
飯と盛り、往て、その母、餽を、食、い、ま、口、ふ、入、ら、ん、化、し、
火炭とまじり、終、小食ふと、得、む、目蓮、大、小、叫、ひ、て、馳、還、り、
佛、小、白、す、人、佛、の、日、汝、が、母、罪、重、し、汝、一、人、の、力、に、ま、じ、り、
所、
ふ、あ、つ、た、當、ふ、十、方、衆、僧、の、威、神、力、と、り、こ、び、ア、七、月、十、五、日、
小、至、ア、當、ふ、七、代、の、父、母、現、在、の、父、母、厄、難、の、中、ふ、あ、り、の、為、
ふ、百、味、五、菓、と、具、へ、て、以、て、盆、中、小、著、て、十、方、の、大、德、三、長、
を、べ、し、仏、衆、僧、小、勅、し、て、皆、施、主、の、と、り、七、代、の、父、母、と、願、
し、禪、定、の、意、と、行、い、の、あ、つ、て、後、食、と、受、ま、し、二、の、三、目、
蓮、の、母、一、劫、餓、餽、の、苦、と、脱、ま、る、と、と、得、ま、り、目、蓮、小、白、も、
永、く、來、世、の、仏、弟、子、孝、順、と、行、ふ、者、又、孟、蘭、盆、會、と、奉、し、
ま、ま、る、と、と、得、せ、ま、じ、べ、し、可、ま、ら、ん、や、仏、言、く、大、喜、し、
故、小、後、代、の、人、と、れ、小、因、て、廣、く、華、飾、と、ま、ま、る、本、と、刻、

秋

こ竹と割鉛錫煎糸花果の時珍曰鬱鬱金の花金二種あり

鬱金香是花と用ふ根と用ふ者ハ其苗莖の如シ其根
穴小指頭の如シ外黄内赤く人以水浸し色を染じ

又微香氣あり又曰四月の始り苗を生じ薑黄ふ似く
花白く實紅く未秋ふ莖心を出して實ふし嶺南の

者ふハ實あり小豆馬追とつハ其声 スウイといふ
ふ似て噉ふ不堪き

ごとしふふとふ似て小ぢり色純青し尻小剣あり又ふ
きとあり雌雄の異あり中元の時夜盛ふ鳴其響音紡

車と捲ぐごとし関東兼三秋物上露嘉元御百
の俗言ふ馬追といふ

よハ野ららの草の上露ハ落て鶏和漢三才面会按
下葉ふまこむまびり頃覚むろ小處々の原野

小多くこれあり甲州信州下野最多し畿内の産又勝れ
より黄赤小白斑の彪あり珍き彪のてきハ人甚これと

賞ま其声知地快といふがごとし數品あり嘩々快と上
ととも毎小早且日午夕暮ふ鳴凡春二三月始て鳴甚

種小至て声を止む六月又更小声を発し中秋小至て
声を止む人是と養ふ其雌ハ小く足卑く嚙むを呼て

阿以布といふ片鶏駟鶏鶉鷹鶉鷹鶉鷹鶉鷹鶉鷹
各頭字の部ふわつちて註ま

衣荀子曰子夏之衣懸結とて鶉の御今
只他人の短き着物といふ然とと秋の季手かつゆ衣

生類小二句去こ一説小衣の裾の鶉の床御今
破きて鶉の毛ふ似るをいふあり

と床とて夜分ふわらざり物の處ハ鶉の床とむりり出せ
て此道理と了簡まふ余の鳥とよりりてさり小空を翔

らむと書且草のうらふのこつらふよりハ此鳥鰻
と床とて夜分ふわらざり物の處ハ鶉の床とむりり出せ

和漢三才面会鰻鱺此物冬春ハ泥穴小蟄しハ
月小至て遊ぎ出此時味勝り子と生を鰻

して長サ三四寸性滑めて利ハ泥中と潜る故捕ふは
江州勢田城州宇治名を得り紀事秋月鰻鱺魚流

ふ徒ひて下る是と落鰻鱺といふ鰻と以てこれと捕
る小流小徒て鰻の中ふ落入故小捕へ易くして魚店小

秋

多くこれ 八月 宇佐宮祭 十五日 豊前宇佐郡 祭祭祭

あり、欽明天皇三十年、豊前國一既の峯、菱形の池の上の民家の児、記して、見我、是、第十六主、譽田天皇、廣幡八幡、我を護國、天、驗、威、身、大、自在、王、菩薩、と名、逆と諸別、神明、垂る、今、頭、此地、在、ま、り、り、て、これを奏、勅、して、祠、と、さ、つ、八、方、八、色、の、幡、と、立、つ、故、お、託、宣、て、八、幡、と、号、す、社、説、小、當、社、祢、宜、奏、して、云、大神、の、託、小、宣、く、我、元、量、劫、より、この、く、三、有、小、化、生、して、善、行、方、便、と、修、諸、の、衆、生、と、濟、度、を、我、名、を、大、自在、王、并、と、申、せ、と、帝、嚴、聞、あり、て、こ、と、許、し、ま、る、公、事、根、源、八、幡、八、垂、跡、の、号、後、八、豊、前、國、宇、佐、小、鎮、の、の、の、が、聖、武、天、皇、東、大、寺、建、立、の、後、巡、禮、し、ま、る、と、よ、り、託、宣、あり、依、て、彼、寺、小、勸、請、申、さ、し、き、き、と、勅、使、ま、り、猶、宇、佐、小、恭、と、り、の、宇、佐、宮、祭、の、由、に、ハ、勅、會、し、放、生、金、示、此、地、を、始、と、ま、す、宇、治、花、園、山城、風、土、記、免、道、と、ハ、輕、島、明、の、宮、の、御、宇、天、皇、の、御、子、宇、道、の、稚、郎、子、桐、原、の、日、折、の、宮、を、つ、り、宮、堂

と、く、く、め、ふ、と、小、り、り、て、御、名、と、宇、道、と、り、年、浪、草、三、徐、斎、云、免、道、の、稚、郎、子、崩、脚、の、心、と、新、勅、撰、目、と、し、人、の、な、ま、と、や、露、さ、り、ん、世、と、宇、治、山、の、秋、の、花、園、と、ま、と、わ、て、思、ふ、宇、治、の、花、園、ハ、桐、原、の、日、折、の、宮、の、花、園、に、故、小、慈、鎮、和、尚、と、稚、郎、子、崩、脚、の、こ、ろ、を、よ、と、ま、る、と、て、子、梅、春、耕、と、り、小、頼、通、卿、の、花、園、と、記、せ、り、稚、郎、子、の、崩、脚、の、こ、ろ、を、詠、る、哥、小、臣、下、の、花、園、と、り、合、せ、て、詠、る、例、ふ、し、殊、更、慈、鎮、ハ、宇、治、の、関、白、頼、通、公、と、り、五、代、後、法、性、寺、兼、実、公、の、子、と、の、先、祖、の、花、園、と、ま、り、と、ま、り、ん、や、

薄紅葉 薄色のもの みたるといふ

梅嫌 和漢三才圖會 梅嫌木 未詳 葉四、尖、り、微、小、き、鋸、齒、あり、野、梅、の、葉、小、似、て、小、く、冬、凋、れ、春、芽、と、生、ぎ、五、月、小、白、花、と、開、く、畧、南、天、の、花、小、似、て、と、結、ぶ、初、ハ、青、色、十、月、葉、落、て、子、紅、小、熟、ま、枝、幹、小、漆、て、多、く、美、し、一、種、白、き、者、あり、異、と、し、

漆の化 漆樹高サ 二三丈餘皮白し葉椿小似て花を槐小似るもの

子ハ午李子小似て木心黄し六七月刻て漆汁と取

秋

茴香の實

和漢三才圖會 倭名 本綱茴香 宿根より深冬小苗を生

高と三四尺肥 莖葉糸の如し五六月花開く蛇状の花のごとく... 細き稜あり俗呼て大茴香とす... 出る者と以て第一とす... 茴香といふ按むるは懷香と大茴香とす... 大茴香と稱る者八角茴香... 肥者即懷香... 肥者莖粉青色細葉淺緑糸の如く... 中の子は皮と同色あり... 鶉卵 鶉卵の如き草花肆小尋る小者ら... 師小尋る秘傳の粟の異名 海雁 大和本草海雁在 ありといふ小者も... 雁小比まじり微小あり色灰色の如し味及び 足黒し其頸小環の如き白色あり翅短く...

太秦の牛祭

十五日 紀事 山城國太秦の廣隆 寺に常盤村の南山の内村西

北より桂の宮院内小伽藍神あり大辟の神社と号す 祭る所の神秦の始皇帝あり元亨叔書聖德太子九 つの伽藍と造る四天寺法隆寺元興寺中宮寺橘寺蜂 岡寺廣隆寺 院の庭ふらして牛祭と修む寺僧各集會を相傳ふ慈 覺大師帰朝の日順風と聲多羅神ふ祈る坂山の後 此神と叡山の麓小勸請も赤山太秦なる此社あり 故小今宵寺中の神事も八多羅神と祭る者寺中 の行者紙衣と著牛小乗をて上宮王院の前ふ出祭文を 讀誦も是悉く懺悔の詞ありてのふりハ寺僧ら多く 者として修む法令畢つて門前小角力ありハ 寺説ふこの會ハ大会仏會と稱す十日の 曉開闢十三日の曉に至ての結願也 本草温州橘其葉蜜橘小似て薄く 小之其葉肥蜜橘小似たり大之亦同 漆橙 漆樹の注 八月の 秋 うわの

部漆の花の条ふくろくせき漆の木しやくのきの枝梢迄えだしやう不悉ふしつく鋸のこぎりと以て挽目ひきめと附つ其挽目より脂あぶらと登のぼり是則こゝろ

生漆なまじやく汁じゆと奥羽おくう及および下野げの和州わしゆ花多はなおほし中國ちゆうごく也なり所ところあり其脂あぶらと檢取けんきよ諸國しよこく皆みな六七月ろくしちがつことと九月くわがつふ出いでせること

裏枯

しんがれ 卿傘きやうさん草葉くさばの外そと色いろづきことりる事こといふことにし

植物しょくぶつふ二句ふにくち草くさの名な草くさの字あざなの字あざなの字あざな植物しょくぶつふ三句ふさんにくち連つふ裏枯うらこ過すて秋草あきくさの句くちふことの字あざなの字あざな也なり

枯かとらりる者ものあらはらしる御傘みかさの支し体たいあらはらしる草くさ小限せうげんれ

梅紅葉

うめももぢ 梅うめの木のきの葉のばの紅べに葉はありる 秋あきの寒さむさむ

の七月残る蚊残る虫

残るのこ 貞享けいかう式しき残るのこといふ字あざな其季そのきよりこ此季このきふ

残るのこ 残るのこといふ道理ことわりありる中ちゆう畧りやく譬へい言げんをを残のこること重陽じゆうやうふ残るのこと残るのこ虫むし何なにふ残るのこまことや残るのこの字あざなハ総くわて其季そのきの次つぎふ取とりて此論このろんと残るのこの字あざなの例れい

志しふ志しとらひて六月ろくがつの部ぶふ出いでしることも通俗とくふく志し推おし瓜うりの書かきふこと其蕉門せうもんの式しき小せうのりりのこことも故もとふ今いま改かへて秋あき季きとも残のこ暑あつ 秋あき暑あつ山さん谷や詩し西せい

残暑あつしゆ推おし不去いけず○稍しやうままて来きて 後ののち敷ふ入いり 春はるの部ぶににあらはらしる 秋あきのあつさとらひる支し考かう 注しゆ後のちの

空くう断たらしもも秋あき季きふ連つららしる秋あきの部ぶににあらはらしる 八月はちがつ

句くと秋あき季きのあつさとらひる後のちの字あざなふ及およびる 八月はちがつ

野口念佛

十五日じふごにち 播州はりゅう加古郡かこぐん教信寺けうしんじ小せうのりりと野口念佛ののちんぶつといふ清和天皇せいわてんかうの

御宇ごう教信けうしんといふ者ものありる姓氏せいし詳しやうありると或あるいはらしる南都なんと其その福寺ふくじの住僧ぢゆうそう永西坊えいせいぼうの才さい子しありると加古かこの駅舎えきやの比ひ草庵くさあんと結むすびる常じやう小西せうせいふ向むかひて称なづ名な念佛ねんぶつと姓せい仁愛にあいとい

て旅人りょじんの荷にと助すけけを助すけふ貞觀けいくわん八年はちねん八月はちがつ十五日じふごにち完粟くわんぼの卿きやうふ盗賊たうたくのあつさとらひる首くびハ教信けうしんの庵あんにに

贈くわりる駭さいハ其地そのちふ葬さうふ毎年まいねん八月はちがつ十五日じふごにち僧徒そうだ多おほく教信寺けうしんじふ集あつまりて仏事ぶつじ念佛ねんぶつといふ教書けうしよの畧りやくふ云い播州勝尾寺はりゅうしやうびしふ僧そうありる勝如しやうにょと名なく八月はちがつ望もちの夜よ僧そう表ひふこと

秋あきの

秋あきの

門と敵く即迎へ入る客僧り吾ハ播州加古の教信
念仏の功力ふりて今宵極樂ふ往生も尊僧ハ必
聖年の今宵往生まへまきといふと去る時小のち
空中音楽きこえ明年八月十五日の夜果して死せし
後

比彼岸 いづん 春秋の彼岸ハ昼夜等分なりて長短なし仙道
ハ中道と崇ふこの時節まこと中道の辰故

仏事と修も提謂經淨土三昧經ハ王子ハ善と修ま
ことえりハ王子ハ彼岸ふりてハ王子ハ立春春分

立夏夏至立秋秋分立冬冬至是也天神の諸神陰陽
交代する時この日梵天帝釈鎮臣三十二人司命司録關

魔大王ハ王使者悉く出て四方と巡り見人民の善惡と
校録をとり故善事と修まへまき善道大師觀

經教念仏して西方往生の願行とまきハ冬夏の兩時と
取て春秋の二節ととも仲春月仲秋月ハ正東より

日出て真西ふ没る弥陀仏の因真西の没所ふあは
故弥陀の在所と衆生ハ指示して往生とけむる

後の出替 のち 紀事雲嶠類要云秦の人本家婢を
得て一子を生じ妻ととも惡くして隣家

小興ハ鄰家大ハ富貴あり本家貧し後二月二日と以て
取帰しハ後復本家富貴マ合し和俗二月二日と家僕の

交代の節とまきと元此の野分 月合仲秋月旨
本くる後二月二日八月二日 風至注言風疾

風也 倭名抄 暴風漢の御今 何々々々
語抄云 和木ク如世 野山の色 秋ハ植物ハ

二句ハ中畧又枯野も色の字さへ 野菊 秋ハ植物ハ
ハ秋あり枯野とむりハ冬あり 野原ハ自然

と生むる菊と云く花葉とも菊ふ似て小ハ楊紫の
花多し稀ハ黄花のりと是上古より本邦ハ菊

ハ小毒あり食ふべからむと云り今又家ハ植て翫
ハハのハ唐土より来る上古ハ野菊の外ハ

和漢三才圖會 按もるハ俗ニ云野雁ハ頸頸灰白色
の端黒く其背ハ黄赤紫の約文あり 朝深黒腹正白

脚掌蒼黒くして 九月 後ハ雛 滑整言雜談 和
後の趾及璞あり 國の女兒雛遊

今又九月九日ハ賞もる女兒多し源氏物語ハ常も

秋の

雛のついでとて重陽ふりてあそぶ左も何の事
う、俳諧是と名づけて後の雛祭とて後と上已ふ對
して謂ふの部十三
野の宮に別別の御御
夜の条注

後山城國葛野郡小倉山下椿原のりて伊勢
斎宮始此所小栖ありて伊勢大神宮と勸

請も此所嵯峨野故小野の宮と称こ延喜式九齋
宮の親王定て畢て宮城の内便てよき所と止て

初齋院とて後禊て乃又明年七月に至りて此院
小齋を更ふ城外の淨野ととし野の宮と造て八月

吉日とトして河ふ賤て後禊して即野の宮入云
○野の宮の別と齋宮爰小籠らせありて二年の九

月伊勢へ奉りて天子へ御暇乞ふ奉内しふ
此時天子御手づり由豆の瓜櫛と齋宮の御頭へは

官移りて故小野の宮の別と申この瓜櫛ハ素
盞烏尊稻留姫
皇六年天照御神と豊鋤入姫の命詔して大和國坐

同書同書垂仁天皇廿五年三月天照
太神と豊鋤入姫命同書倭姫の命詔し

景行天皇二十年二月五百野の皇女とつりして天照太
神とまのりて三代のりて故小代々皇

女と伊勢へ奉りて宮仕せしむ天皇即位の後親王の内
處女とせらりて太神宮の御給仕と定めふんと定て

内親王あきとて諸王の姫君と定て例ありのつれよ
てと定の奉りて二年の八月より翌年の九月迄野の宮お

は此間三度の神事三度の後ありて土御門院承
元二年四十一代の齋宮後鳥羽院の皇女素子内親王の後

此事断絶なり○九齋宮群行の九月十七日其前
日桂川ふおいて後禊と修とて桂川の御後

桂川山城國菅家文章草黃花之過重陽世
葛野郡俗謂之殘菊○重陽以後の菊

といふ殘菊の宴ハ十月菊の異名藏王藏王載
五日ハ冬の部とて

野山の錦の条ハ併せ注す
秋のねく



どの部ふ
併せ出そ
く
七月
化生
五雜俎歳時記云七
夕俗蟻と以て頭免

と作り水中の浮へ以て婦人子小宜しきの祥とてこま
と化生とりん王建詩云水拍銀盤弄化生是今の入
泥塑嬰兒或ハ銀靴と以てまら者化生と
あそこところりて七夕の戯あることとあらざり
苦丹
丹 苦

と龍騰といふハ誤
ふハ龍騰の条ハ注
観音草
観音草
あわりの葉蘭ふ
似て少く狭く短し石菖ふ似て志のきこあ一六七月

茎と抽て小花とあらり穂とあも淡紫其苔とまき
愛まへ一然るふ大和本草ハ観音草無花無穂とい
へり京師の俗中元の日此茎と以て蓮の飯と縛ハ観音
草の名義
常山花
和漢三才圖會根と常山と名
ふよりの

本處々ふあり其葉甚と臭し高と丈許葉梓樹の葉
ふ似て團く尖て畧皺とて澤わらふ六月細花と開く白
紅雜
常山の虫
同上 蟲ハ此木株の中ふあり蝸
木の心と蝕ふ六七月株と破て元

と取用て瘡の葉ふ入る或ハ灸て小兒ふ食しむ九蠟と
取の法虫ある木ハ株ふ必小き穴あり管と以て水こ中ふ
入るは虫首と穴より出る輒木
と剪而端と縛りてとと探り得
栗奴
和漢三才圖會
栗の苗と穂と

ふを時黒き煤と生る者
類の奴麥の類の如し
鑣虫
和漢三才圖會 鑣虫
正字詳ふも按とる
小此虫莎雞のこくハ翅青く腹黄色前脚長く疾走
て跳る毎穴ふ出入する故ふ獲とてし秋鳴吉馬の響
の音ふ似たり
蛸螿
時珍曰秋月鳴て音
因て名づく
此ある者蟪蛄とま

秋物
降り月
滑稽百雜談 師説ふりかきり月ハ
十六七夜の既望まらる月といふ
然まハ居待月の頃より廿二夜迄の月次第ハ魄と生ぞ
ると望とらりともらり月ともいふべハ藻塩草の傾くの

義も捨
葛
真葛
和漢三才圖會
其葉薄く
楮の葉ふ似て面青く背白し風至まはよく翻る恰も
掌と又まらとて婆娑とて声とふも故ふ奇人葛の

秋
く

葉の裏見と称し人の恨みあり大和本草根と冬月或

春のまど苗と生せるときほりて用ふ長さ一數尺乾用

葛根是云古式八月の季とも不審○真葛の真のむ

る辞真葛が原ハ京師知恩院山門の南ふありとらと

只葛の生ゆる原 **花壇** 貞享式 今按るふ花壇と

といふちのち **草の花、草花實** 諸草のこふい春夏ふ花を開

草花と秋とも實もま然る古今みどりふ **栗**

ひつ草と春ハ秋ハつらぐの花をとりふ

芋 **観音寺梨** 近江國芦浦観音

の条ふ **八月 桑名祭** 十八日春日大明神の社勢

祭る神四座別當仁眼院説小云經津主命ハ神護景雲

元年下総香取の宮より勸請を又武甕槌命ハ正應

二年八月十八日帝陸國鹿島の宮より勸請天兒屋根命

姫大神ハ永正二年八月十八日伊賀の名張より勸請あり

毎年八月十八日と以て祭辰とあすとい應永仁の月日

と以てと修まといり○先十七日社前の南北ふ車二輛

ツ飾夜ふ入て試ホあり翌十八日祭礼のとき件の車と

南北へ引渡し音楽と奏も明和十年の春回祿以前ハ

両社六座一北三崎の神社三坐南春日の神座三坐上

小往古ハ春日鎮坐の日と以て祭る回祿後祭礼延引を

三崎大明神ハ土地の神ハ鎮座の年月詳ふらま **凝洲寄**

鳥洲寄泡の洲寄合せて三寄といふ又七月七日の神事

あり氏子貞寺川ふ於て石ととも来て両社ふ献ここれと

石取の神事といふ此日囉遠物と出も○此八月祭と天武

天皇の祭礼と記せる書あり日本紀ふ天武天皇元年九月

朔車駕還伊勢國桑名宿了ら云今歌中ふ神社あり

ありて誤 **苦夫引** 時珍曰苦ハ味と以て名く参ハ

功と以て名 **和漢三才圖會** 其

花莖の梢小穂とあそ七八月開く莖根葉

とふ小葉用とも故小根と連ねると採る **薬堀**

秋

秋

秋

秋野山小出て葉草とともく秋あき 虞美人草ぐびんそう 和 **大**

本草名花譜云花四瓣色艶罌粟小類けいりく之小園史

云吳俗呼て虞美人草と云是ハ四五月花と云し

者し花景美人蕉せうせう 此芭蕉の一種類説し宸斜山谷

の中小虞美人草の形鶴冠のてく大ありて化ふし葉

皆相對も或ハ虞美人の曲を唱ふれハ兩葉撫掌ふてうし

頗る節拍せつぱく小ゆるが如し○鴛水が新式小口決ありといふ

もの何れの草くさ 栗茸りしき 和漢三才圖會わかん 山原小生と高す

小過む織四五分田く卷正白色

剥む栗の肉の 下菓げか きの部落鮎らち 九月菜くつき

故ハ栗茸りしき云 きの部菊酒きくしゆ 栗の節供りしき きの部菊の

併せ 九日小袖くふちこそで 菊襲きくせ 清嚴正徹記せいげんていけき 九月衣類菊襲

出い 縹色の小袖と着しし 互あひ 鞍馬祭くらままつり 九日 諸神記しよじんき 鞍馬

相賀あいがと是と九日小袖と云 面おもて白裏紫しろうらむら ○地下良賤今日

天慶年中勸請も神社啓蒙てんけい 鞍くらの社ハ山城國やましろ 交野郡鞍

馬山うまやまあり祭まつりの所ところの神一座かみ大己貴命おほのおのきのみこと ○此社ハ天あまニ不豫

世上よこ騷動の時とき鞍くらと此神前かみ小懸こかけ故ゆゑ小由よ本もとと号なづ蓋かき大己

貴命おほのおのきのみこと少彦名すくもひなともハ疾病しやびやうと療いふ天下あまと治いるの神かみと

りく五條天神及當社ごじょう小鞍こくらとくらの遺法いふとハ或説あるいふ小祭こまつりも

神かみ蓋かき鳥尊とりのみことと云いふ例祭れいまつり九月九日くつきハ八日の夜よ式しき子の男おとこ

和

大

和

和

和

和

和

和

和

和

和

和

和

和

和

和

和

和

和

和

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

達所小綱の神人長吏の補仕と授け、指部といふ又
 十二月九日頭人の宅に御家衆と饗應し、能拍子亦り又
とと古那志といふ是小習礼の訛り又十二月十二日頭人
 夫婦杉山不動堂の前より垢離と修をとと精進合と
 の又十二月十三日頭人浄衣と著し七所の社に参り奉幣
 けり頭人の婦も又とと並ふ御家烏帽子浄衣と著
 し奉供ととの行瓶甚とと古風なり放生川小橋ニッあり
 一ハ安居橋と名く是安居當人の渡り橋常とと不浄の
 人と禁とと頭人ととと渡りとと今日山上相知る所の社僧の
 坊とと止宿とと精進潔斎ととこの間西池桂の里に女子
 孫夜又白布と以て頭髮とつととまとと桂飴と棒とと是
 と桂帽子と称とと今京の童謡ととみとと桂帽子とと是とと正月
 十五日安居頭人夫婦社奉本社の前とと大とと一本建とと
 白布二疋ととの上下の枝ととけ人ととてとと飯小猿ととのとと
 とととその松とと登せととのととけ布ととの枝ととと伐携ととて頭屋
 小帰とと後代修頭のとと増山の井とと今ハ正月十五日とと云
糲米 本朝食鑑今製とと焼米ハ青稻と以て特撰
 と去り炒り過してととと蓄ととと桶木ととと

此と焼米と称とと甚佳味とと熱州莊野の市上ととと焼米
 と造る青麥艸と以て俵子と作ととと畏ととと四方に

送 弟切草と
薬師草 の部
益母草 の部

灸花 蔓草小白花とひり内
 微紅とと兒重其花ととり唾とととととと莖付

方と上ととて手足或ハ頬とと貼ととふととあととから灸ととのとと
 依て名とと○是和産とと其蔓葉とと女青とと以て七月葉

の間とと筒とと茨の花とととひとと五瓣ととやととて少しくとと瞿ととの形

あ **やんま** この部蜻蛉
 の条よ出
兼二秋物 暮菴 やまののち

和漢三才圖會 和名夜万都伊毛俗ニ夜万乃伊毛今云
 長芋其根の長とととむととくり周とと二三寸灰黄色肉白し

煮て食ととべとと救荒本草とと暮菴菴溪の辺とと而とと出ととし時
 時凡水とと小感ととてとと鰻とと煮ととむとと半とと変ととる者ととととと人とと性ととの

○此者暮菴ととといふ暮菴ととといふ又山藥ととといふ初ととの唐の
 太宗諱ととと菴ととといふ因ととてとと辟ととて暮菴ととと改ととむ又

宋の英宗の諱ととと暮ととといふ因ととて山藥ととと改ととむ **焼白巾**

秋
 や

紙燃の輪と作て篝中小設くる時ハ飛て其輪と燈
別小箱と篝の隅小安て宿處とと○此鳥藝とよくは

山雀小藝とと
敗荷注不
九月山口祭

中巳午日周防国吉鋪郡仁壁の神社九月中巳午日
祭礼と行ふれと山口祭といふ山口の古名ハ仁壁の庄故

仁壁の神社と号す祭る神住吉三神と以て本社と
合せ祭る神二神味鉅高彦命下照姫の命各二社以上王

殿三社とて仁壁の神社と号す又織機大明神と
又稲宮とも称も衣食の事を主り神事と云りて

此号あり祭礼の事も織機の神事あり次の日神幸
神輿三座本社の西神幸の地小出と奉流鑄馬より

皆国主よりとと執行とらる官司よりて國主の拜礼
あり又六月御田の祭り鎮守の年月詳やと人王十

一代垂仁天皇の御宇勅幣
と奉らるその傳記失散も
八幡花の頭日紀
山城国八幡山の社僧九月廿日花の頭と修も先六月

俗板と割と片とつひ又割とつひ是板と割て臺と制衣をるの
義あり花の頭とハ社僧の弟子髪と剃衆僧の列小如るの

とき社僧と衆僧を小彩箋と以て草花と製し臺と神
前の廻廊小飾り酒宴の興を催も故小花の頭と称も

山路草菊の異名の柄のくちめるのちも猶やばらん前内大

臣實焼栗 山粧臥遊録秋山明浄 破

芭蕉芭蕉翁移芭蕉詞ニ云唯この陰小遊 漸寒

次弟も寒きといふこ
あて秋の末の寒きと云
ま 七月 槓賣六道恭

の糸 曼珠沙華天和本草 金燈花 鐵色 昔前とも云

花と生して葉死る花葉相衛と云此花下品其葉
石蒜小似たり一類此花と國俗曼珠沙華と云翻譯名

義曰曼珠沙華此小葉軟又赤華といふ酉陽雜俎曰金
燈草俗人家ふるとと種るとと惡ふ一名無義草と云

秋 やま

ついでに右のどくはよみつらん云々○真洲翁の説
ふよみつらんハ定家蔓ハ似たり俳諧ハ秋末季と定めたる
ハ古哥ハ色づくことあり

冬青の實

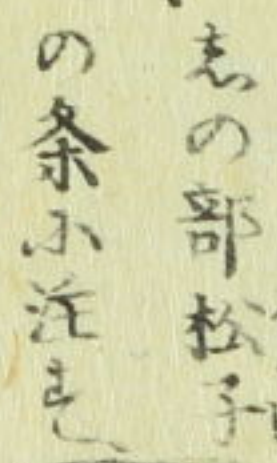
冬青其葉永冬
由まこと正言く光澤あり田長やて太らむと喫る鋸
齒ありハ夏小白花とひらき秋実と結ぶ生ハ青く熟まじ
ハ紅むおのつゝ裂て中小白子あり
枝とさして活易し藩籬とひる堪たり

天和本草譜の一種ハ葉ハ楕小似て厚く大ハ色深青
面ハ光沢あり屋材ハ器と作り舟の楫とも其用楫
と同じ一類別種ハ実ハ楕より大ハ鱗

とを民用と助く○実と以て秋とも
檀和漢三才圖會
会其実棟

の子は如くありてハ痰ありある生ハ青く熟るとハ淡
赤し裂て内紅子三四粒あり其葉秋小至て紅あり

松の實



七月今朝ハ秋

立秋との余小注
牽牛志の部三星
夏解けわき
夏書納げかこととめ
の余小出

夏ハ四月十六日入七月十六日解是と夏解とつハ夏九旬
の間他の化益の爲ハ聖經及び名号題目と書寫し夏
終るの後是と堂塔伽藍ハ納め三畏方盡ハ

夏解草
日向を是と夏書納とつハ在家ハ亦此ハ效ハ

欽氏要覽僧尼解夏ハ日録と以て節と束ハ檀越ハ
遺ることと夏解草とつハ今この草と詳ハまのふこハ五
分法身の座とも故ハ吉祥草と名づく

漳州府志四時
一色泉石の中ハ生む山村ハ人散ハ挿と先と祀と陰字
ハありとらと葱翠やとて周まを家ハ吉事ハハハハハハ

ら花開く故ハ吉祥草と名づく
字彙節ハ伊又及音
印草の名ハ大和本草夏解

兼三秋物 玄兔

草ハ麥門冬の大なるものハ
月の異名之○謝莊月賦云引玄兔帝臺
○つの部月の兎の条ハよしとらとら

つこの部月の
時珍曰雞冠花ハ形と以て名
都の条ハ出

雞頭花

高き者五六尺短き者幾ハ數寸
畧六七月梢の間ハ
花とひらハ紅白黄の三色あり
畧花最久ハ耐ハ霜の

秋 けふ

後始てけいも 鎮江府志 葦も蔓も花も實も山菜

焦る、黄獨 小類も葉大りてや 田く根ハ其れ如

くうて髪あり味微苦し 和根 正字白石子蓋

俗小何首烏王といふ者長 梨の味あり

その実太く大豆の如し 小兒疱瘡鼻穴開く

八月 けふの月 紀事 土民

年の貢と納る九秋米收納の法 晩秋小縣史先

田地の立毛の善悪と巡檢 是と毛見といふ草と毛

のふ故ふ稻未刈獲 嬰粟子蔴 月令廣義ハ

栗子と種と花 盛やして繁し 七月 舟形の火

部施火燒 古枝草 蔵玉 宮城野

しの秋も花 藤袴 和漢三才圖會 高さ二三尺葉

六七月細き白花を開く 今云藤袴是 倭白抄 蘭

本草云布知波如萬新撰 万葉集別用藤袴二字 天和本草 真蘭和名藤袴又ア

ラ、キといふ古哥ふらふともありハ雲卿抄ふと蘭と

ふちむくまといふと書あり葉ハ麻ふ似て而岐あり、香よし

乾て弥香し、是真蘭野ふあり秋紫白の花と云く若

葉ハやまきて食をべし其芳香美味凡菜ふと云く詩

經楚詞やふ詠が、蘭是、和訓栞花の色と云く藤と称

其辦の管筒と云くとりて袴と称せり、○袴ふと云く

と奇俳諧と云く同し古今何人うきとぬきうけし藤袴

秋と云野と云くもす 曠野 藤袴ふと云く密ふと云く甘菓

筆津虫 魅醉の異名 異名分類 古き筆の代

兼三秋物 卧待月 八雲卿抄 子待

桂明抄 永徳の頃、為重卿廿日月とり山題ててうと云く

雲ハ廿日月と遊と云くと望月ふりて廿日月ふ詠ハハ

審ふハ廿日月の百首やふ十九日月の〇一説ハ卧待

京都及び諸州小夏草との名の是又根あり草と云
根鬚より葉ハ細長として尖まり莖を折ると汁の味
能生ス滑替雜談或説ふこの葉の形指の爪に似たり故
小仙甲草とも仙指甲の名あり此草の葉生ひ出て石地ハ
ある形蓮花の如く故云岩蓮花といふ舊信ハ非
いよこの岩蓮花にあらずば佛甲草雜物也

待冬と隣注不 **七月** 小町踊たの
部七

夕踊の条 御靈比御出おひで 八口御霊の社ハ上ノ京都
下ノ出 御靈比御出おひで の北西より下ノ京

極大炊御門の北より一雍州府志此社始ハ近衛通新
町あり上御霊ハ京極の西出雲寺の北より上下脚
灵の社毎年七月十八日御出八月十八日祭礼あり神興二
基一御灵八所ハ崇道天王伊予親王吉備の聖灵藤原天
夫廣繼藤原夫人橘速勢文屋官田九火雷神一世小火
雷神と謂て菅家の灵とも者ハ誤傳云御靈八所の
内四所ハ桓武天皇の御時とて勸請と下の四所ハ仁明天皇
の御宇とて勸請と○上出雲寺と上御灵の神官寺

と下出雲寺と下の御霊の神官寺とす傳教大師の
草創也と今兩寺より小絶より竟文中慈眼大師の
遺誠より久遠壽院の准后山城国宇治郡山科の御小
於て出雲寺と再因一ハ毘沙門天と安置一ハ御灵
の社あり是古と存まの遺意あり上御灵の御旅所ハ京
極通り中御灵あり下御灵の御旅所ハ年々この所と定
めむとて羊神事頭屋の家内ハ安置ハ
御旅所不在との間とて御旅と称す
あつらひ使

すの部相撲 小鷹鳥狩こたかとり 滑替雜談 初鳥狩ハ鷹鳥狩
の条ハいハ 小鷹鳥狩こたかとり 少しづりめりといふこと

万葉新点よりハ差別あり小鷹鳥と秋よりハ鷹鳥雀
その外秋の小鳥狩あり大鷹ハ又とて鶴雁鴨の類と
狩こたかとり 凡て鷹ハ冬より小鷹の分ハ秋とこの種
類多し刺羽といハ小年ハ朝鮮より来る雀鶴雀賊
つこの雄ハ兄鶴鶴つこの ありの雌ハ鶴つこの 巢のりといふ
ハ秋巢より取といハ凡て鷹ハたぐの扱とされ別とハ

大々々ハ鶺鴒ハ小こたかとり 仙翁花ハせ 浮菖うきあやむ 枯梗
たうれ名ハ 紅梅草べにうめ の部とてし

秋

日くせこ葉ハ葵の形似て滑ふるところ那岐似る
 夏末より秋碧花とひらく花こあざと云々水草あり
 是と水葵とわらえこ輩多し水葵ハ菘
 花苗あり○腥し小あぎの上の鮠の腸芭蕉
 酉陽雜俎 寵馬 狀促織の如く俗に寵馬あれ食ふ
 足の兆 天和本草 蟋蟀小似てひげ足ふるくせい高く頭尾
 さがりてまると寵のあがり小穴居を筑紫の方言ふ
 井口○海士家ハ小鍛ふぬるけく竹芭蕉

三秋物 心の月 秋の枝折 心の月 氷の輪 月と
清き心といふ 見立

て云東坡詩 氷の鏡 同く 牛蒡引 注ふか
 氷輪横海濶 月といふ

胡盧杯 名豆杯即乾杯 樹練杯 形鳥の卵の
淡霜とまむ 如く撰津丹

波不多し所謂鶏の子折秋京師 御所枿 大和の
 ふて御所枿と以木棟枿といふ 御所村

より出ツ樹枿 紅瓶子梨 瓶子の形して
 の上りあり物 赤く其肉白 空閑

梨 肥前の産微赤色極りて 小瀑江鮒 和漢三
 大なり其味川梨小亞 全縮みき

者と江鮒と名く或ハ名古或ハ伊勢鯉或ハ口々又伊勢洲
 走小瀑江鮒といふ中 畧八九月稍長じ大さ六七寸海の
 交あり此時泥味多く脂多くして愈甘美色
 黒と減して潔し洗ふが如し故小瀑江鮒といふ 八月

小望月 十四日のこ 今宵の月 月といふ 部の月見
 月といふ 駒 の条よりつ

牽駒迎 望月の駒 江次才 本八月十五日あり朱
 牽駒の駒 雀院御国忌依て十六日小改

め用ふ云頭書云信濃勅旨の牧ト九ヶ所延喜式に載る
 所の一は天皇南殿ふ出御ありて御馬と分ち取りひ出御
 ありて建礼門の前の大庭ふ於てまを牽分りひま裏
 書云上野九牧延喜式に廿八日云七日甲斐の勅旨の牧
 十七日甲斐穂坂の牧廿三日信濃望月の牧廿五日武藏勅旨
 の牧又十五日信濃勅旨の牧廿八日上野九牧以上六日延

喜式に云々この外兼平官府十三日武藏鉄父の牧廿
 八日同小野の牧の御馬と云と貢公事根源公卿以下次

小御馬と給る馬の差繩とて御前小御馬二并に取殘
し馬と引分の使として次將とて院東宮とて
（き）所々へおわらせらるる新葉秋の田の穂坂の駒と引つれて
とて備まつ世の人も有り御村上御製金葉東路とは
るふ出るのち月の駒とてひせの人の坂の関仲心格遣
相坂の関の岩と踏わつて山ちららるるの駒馬還

御靈祭 十八日 八所の御靈祭
神の名七月の御靈祭
の御出のち余の注せ

見合事 紀事 午後小神輿二基中の御靈の離宮と出て幸
の鉾八本元鉾と床上下建て棒二本四入とてことごとく荷ふ
と幸の鉾といふ神室の内持ふことと尊守敬とて又勢力の人
鉾と帯の間ふ立両手とて以てとて捧げ行くとて祭鉾といふ
又一人空の光道祖神の假面とてけて神輿小先づつ此
仮面の鼻長夫俗とてと王の鼻長といふ別當及び氏子供奉
御旅所より西の今出川下烏丸と登て長者町より室町
と過り本社小入上御靈の社へ京極通筋違橋の乾二町余ふ
あり下御靈の神輿も同時小拜殿と立つ鉾五本別當氏子
供奉上御靈の行列の如し神幸の路次京極と出樵木町

の西より東洞院の西と登て出水小行室町と下り二条と
過り油の小路の下立賣と上り東へ行京極より本社小入

下御靈の社へ京極通大炊御門東
北の方ふあり例祭八月十八日あり
定考 十日 名目抄
定考逆

小讀例之公事根源 是はむろ六位以下の加階とて人々
かの藝能行跡格勤とていらして采鳥と給ひたる上御
官の東の廳小つきて事と行ふ次小朝所ふついで三献

の儀式あり次小安穩の座ふつゝ又三献あり挿頭の花
と上卿以下の冠ふさそと大臣ハ白菊納言ハ黄菊參議

ハ龍膽其外ハ皆時の花とて造花小わらむ大々
二月の列見小同じ式兵の兩省より諸司の輩の言と選

成とてと列見といひををと書あめて奏とてと擬階の
奏といふ此人々を擇出し
衣ころも きの部 砧の
金

て定めらるるを定考といふ
和漢三才圖會 山野處々小あり人言と三人並

剛草 枝花葉並ふ秋ふ似て小く七月花と開き英
とあり小豆の莢のとし中の実黒く其根甚と強し故

小菊人牛馬と繫ぐべし俗呼て駒繫といふの陶弘景言

秋 乙

狼茅其根獸の齒牙 **革草** 和漢三才圖會 山の

のこころ故小諸名あり 麓木の葉を載生む

状松茸小似て織の外黒く粒々の皺あり晒し乾せば黒

やして深革のごし裏黄赤ふて毛糸の如きものあり柄小

鱗甲あつて **五十雀** 去の部四十雀 正字未詳

味微苦 の条に注を **小雀** 和漢三才

雀 俗云古加良状山雀小似て小故俗呼で小

雀といふ山林小多し頭黒く頬白くして口き紋の如く背

腹白く翅尾黒く其声滑めて多く **九月御灯** 三

轉る捷輕やくして上下をえがく 同日其条

御香れ宮祭 九日 神社啓蒙 山城国

あり祭神一座秋神功皇后○古老云鎮座年紀分明あ

らむ昔より垂跡此地あり秀吉城と築くの日東の丘

ふ移し奉るといふも神の祟るあり故復旧地ふ遷し

奉るといふ乃今この社地○一書云この地紀伊郡小属

を例祭九月九日之朝日と御出といふ十日神事能ありは

し祭る所の神九座く神饗も又九基あり土人本居神と

を今ハ神輿一基造り山二基遠物ホと出と○當社ハ延

喜式小載さる所の御諸の神社是より鎮坐年月未考一

書小貞觀二年勅 **後日の菊** 紀事 九月十日或ハ上

請のり記せり 日禁裏小残菊の宴

あ **御難の餅** 土言 文永八年九月十二日蓮上人相別

の下僅小一命と全うも今日宗門の徒餐と 鎌倉龍の口小於て厄難ありハ白又

作して像前小供とさると御難の餅といふ **小倉祭**

十月豊前國到津の社ハ企救郡今村の庄到津村より祭

る神中ハ應神天皇左ハ神功皇后右ハ玉依姫草創年月詳

あも後鳥羽院文治四年宇佐八幡とこの地小勸請しとの

神秩と分て四時の祭祀と備ふ承してより宇佐太祝の子

族世々祝史とあるその後清末駿河守といふ人到津の城

小居して常小奉祝も天正の季九國乱きて神社灰燼と

秋 乙

きふ加ふ九月十四日晡後神夷伎殿不遊ふ流鑄馬あり
夜ふ入襖と修し舞樂と奏と神湯の祝あり當日十五日
國主家臣さして幣を奉らしめ又流鑄馬あり晡後本社
ふ還帥一説ふ小倉祭或ハ巨掠よ作る山城國宇治の近隣
之例祭九月十五日といつりふも増山の
井との外の書々豊前の小倉と記とる多し

木幡祭

昔日、神社山城國宇治郡木幡ふあり（薩州府志祭る所）
の神正哉吾勝速日天忍骨尊（是地神オニの神小）
して父ハ素盞鳴尊（後小）天照太神取て御子とあり
この神下土小降（さ）らるる故ふ山陵（さ）あししてその天と祭
てし木幡の神社と号と○例祭九月廿四日（今神興ニ基）
内一基田中明神田中の社ハ同所地主の神祭る神詳
あらむ或説ふ柳大（こ）金草（こ）菊（こ）の異名（）藻塩草（名）
明神是木幡の神
もろの数の數（こ）花濃黄（ま）薬弱の花（時）
中（こ）故（こ）名（こ）
曰春苗と生と五月に至てと移と長一二尺宿根より
自苗生と根の大き芋魁（こ）○蕪頃日莖斑（ま）花

木の實

柑子

菓物秋多し故ふ名とささ
む木の實といふ秋あり
柑子（こ）柑類の總名
衣打袖の霜（ま）
あり今云柑子ハ橘の屬あり
月の部ふ衣打袖の霜と別条の如く誤り出り青藍按
むるふ衣打きぬこのこふいして八月の部ふ出せるこ再
九月の部ふ衣打とて出せ理あり全く衣打者の袖ふ
れく霜といふ時ハ九月の本とて心むく出せると別条に如
く書るハ書むの誤（）芋環（元）枝葉集（元）小衣

實の増
の井と
の如く
の如く
の如く
の如く

打袖の霜と一条ふ認めと證とささふ足ささささ深く
も考へて獨（こ）古（こ）別条のこく認め又一条衣（こ）
衣打といふ文字ささ首きと出せ皆誤（）濱の真砂持衣
の条云飛路霜と袖（こ）
重て打ともあり

七月

閻魔赤

十六日

要覽閻羅王此ハ地獄の主鬼官の總司とて
俱舎論閻羅王ハ地獄の主鬼官の總司とて
殘虐或ハ殘虐といふ此ハ靜息と穢とて造惡の者不善
業と靜息とを以す故ふ或ハ遮といふ○七月十六日と大

秋
こ
に

齊日といひて善事と修しぬ奴僕や暇を紫葛と和漢三才面会紫

葛の葉蒲萄に似て夫と結槐の花三安石譯三槐黄中不其美と

懐く故三公位を蕪領曰槐木極々大なる者

あり按不尔雅云槐數種あり葉大なり黒きの棧槐と名づく晝合し夜開くものを守宮槐と名づく葉

細り青緑なり槐と四月五月黄花とひ

らく六月七月実と結和漢三才面会其花未開時米粒

の如し其实莢く連珠を中小黒子あり槐の花本

草小四五月開花然不増山の井毛吹草

等秋と色を小り愛ふ出ま狼尾

草時珍曰狼尾其穗の象形を秀てある稊然と

草と田あり故不守田翁の称あり莖葉穗粒と

色紫黒毛あり燕尾香と開宝本草蘭草の葉蘭

其葉岐あり俗不燕尾香と時珍曰穗の象狗尾

故不俗狗尾と名く原野垣墻小多く生苗葉粟小

似こ穗も又粟小似こ色黄白りて実あり和漢三才

面会小児とと用て蛙と釣て戯るとくうせともの

草おのれと種のあるものををものあると誰のいり俗

云阿波国鳴門例ちらも鳴動して杉大うて

止まて和泉式部此哥と詠して止ま圓座抄肥田藪

附の處肉起了痕とまと青芋蕪恭日子多し

もの所謂著蓋折秋細長くして毒多し

八月繪行器絲雀八朔紀事京俗八月朔日

所の女子は行器一双と贈るとの行器の中小生物はり

藤の花と盛藤の花ハ白赤餅赤小豆と点ししこ此

餅の形度白赤似り故白赤持深更喜に裕赤小豆

赤と点は是あるきの義とりて深更と名くの

今白童の戯小松笠と以て雉子と作り或ハ鳥賊の甲と

以て鷲非鳥と作り或ハ糸繁と以て金灯籠の実と

拾り飄の形と又挑仁と刻し松虫と製是示の

秋にて

類とと遊び或ハ互に相贈ふこれと類合といふハ○類
と雉子鷲の類と同じト又蒼以仁と枝を折て行春と
とハ相贈ふ京師の俗
これ今日嘉祝の物也 **えびと草** 龍膳の和 **榎**
名あり

葎 和漢三才圖會 榎の根上ふ最生ま織二三寸た葉
色裏白し細き刻あり微木あり味い美なり

九月 榎の實 大和本草 榎本草 榎の類とも
今按むるハ榎の類あり

葉桑ふ似て筋多し冬落葉を實ハ胡椒の
木と秋熟して黄く味甘し小兒好んで食ふ **て** **七**

月 兼三秋物 天井守 此の部番椒の
条下ふ出たり **照**

月次 拾遺 水の面ふても月なりと云ふ事ハ今實を
秋の最中よりけり源順のてる月と月次あり

八月 天中節 八朔 拾芥抄 八月朔の日
の出り以前 天中節

赤口白舌隨節減と書て門戸ハ押陰陽秘法むじ大
國の石天中樓ふかりて事あり其人素懐と遂にふり

忽ち火神とありて天中樓を焼く時ハ后咒して曰八月乃至
隨節減云傳ハ凶惡の日陰陽家天中の札と以て良
賤の門戸 **天狗草** 太毒あり故ふ **てらつぎ** 木啄
鳥心

きの部 **天王寺一乘會** 十四日 摂州大坂四天王寺
一乘會ハ九月十四日

或ハ十五日六時堂ふかいてと修と此堂傳教大師草
創之且本尊菩薩如來日光月光の三尊大師手造り
とつり寺説云九月十五日未刻衆僧三綱堂の司樂人
沙汰人堂仕公人出仕を先時時刻と三綱及ハ和尚小告て
出仕の鐘一番二番と撞諸役人太子堂へ出仕と太子の
像と鳳輦ふりつりその式二月十五日の如し廻廊の下より
六時堂へ渡御あり法事の次第振鉾阿弥陀經傳供方
歳樂延喜寺樂陵王納曾利悉く終る西の刻還御
てんまのやまのめ

天満流鏑馬 廿五日 摂州西成郡天満ふあり終る所
の神北野小同じ九月十五日流鏑

馬あり社家とと勤む鳥居の辺より **出落粟** 紀寛
天満橋ふりて馬と馳て射る 土俗

秋 てあ

誤りて古(不孝の子あり此粟と以て投てりて傷
る因ててこも粟とて和俗父と称しててつひ〇一
説此粟自ら能と脱して
地ふみり故も出落粟と云
あ **七月秋の初風**

秋の初らつてこの **秋さる** 秋の来 **秋さる** 姫朝
こころふらむべし **秋さる** し夏に **秋さる** 姫朝

顔姫 棚機七姫の内 **異名分類** **秋去衣** **八雲御抄**
等うと注釈見えぞ **秋去衣** 秋去衣ハ

棚機の布 **御傘** 棚機の具 **云** **万葉拾穂抄** **天の川**
只秋の衣 **秋さる** 秋の来るといふとあり

銀河 **銀漢** **雲漢** **字彙** 天河箕斗二星の間あり其
星河 **河漢** 長きし天ふ竟も **揚泉物理論** **漢**

水の精 **氣** 登りて **舟** **精華** 上 **浮** **宛** **轉** して **飛**
流る名つけり **天河** **云** **雲漢** **云** **衆星** **云** **出**

鳥井の鞠 **紀事** 棚機小飛鳥井家並小難
露拂並枝鞠上足小の義あり堂上及び地下の門人多
く集る **滑稽百難談** 楮の鞠の事と毎年七日飛鳥井家

あて行りて式 **鞠** の露拂小富家門弟の上足 **荒鷹**
の者坪の内へ持来る是二星へ手向る心あり

鷹の雛已 **菓** と離れ自ら **食** 時 **羅** と以て捕ふ是と
網掛といひ又わら鷹といふ新 **捕** 人 **馴** と **荒鷹** と

愛宕火 **紀事** 伊丹池田の愛宕火七月廿三日
より廿四日至る **云** **撰陽群談** **揚** **豊**

鳥郡池田村あり愛宕山古 **云** 小所謂五月山ありと云山
上小愛宕権現の社あり毎年七月廿四日の夜種々の灯笼火
を点して愛宕火と名く大坂北の町より望み見れば星

の如し又愛宕の神社有馬郡 **道場** 河原新町口あり祭る所
火産灵尊毎年七月廿四日祭礼 **扇置** **太平新**
あり世俗と云と愛宕火と称と **扇置** **録詩**

人皆棄 **朝茶の湯** **貞享式** 風炉と夏とあり **炒** **公**
秋扇 **朝茶の湯** きこと冬とあり **本地** の炒 **縁** と **春**

とふせれ **朝茶** の湯 **朝顔** の例と假て秋の用と云ふ **云**
茶人の家 **云** **朝茶** の湯 **日** 中の暑といふ故と

青葉 **青葉** **朝茶** **朝顔** **美**
の条 **云** **朝** **茶** **花** **云**

牽牛花 **和訓栞** **朝顔** **美**
の条 **云** **朝** **茶** **花** **云**

牽牛花 **和訓栞** **朝顔** **美**
の条 **云** **朝** **茶** **花** **云**

牽牛花 **和訓栞** **朝顔** **美**
の条 **云** **朝** **茶** **花** **云**

牽牛花 **和訓栞** **朝顔** **美**
の条 **云** **朝** **茶** **花** **云**

牽牛花 **和訓栞** **朝顔** **美**
の条 **云** **朝** **茶** **花** **云**

名く、あらしき 蘭とりのふの部 ありのひる

桔梗とりのふ わごころえん 主日飄草 ひの部飄草 栗穂 あまふ 和漢

三才面全種類九て數十青赤黄白黒の色あり早中晩あり早粟米實晩粟ハ皮厚く米少し○秣、狼尾草

粟奴各頭字の部 あきつむ 秋津虫 えんぢうのこ 秋の この部とるし

蝶、秋の蚊、秋の蚤、秋の蠅、秋の蟬

注秋及むを中とる秋の蟬 はらへり 兼三秋物

朝月夜、朝の月 黒双紙 朝の月ハ十七日 より二十八日まであり 曉月

夜 源氏初日巻 影 あり 有明 八雲御抄 十五日以後 の由匡房往生傳

あり云々青藍云云有て あきつ 秋月 清光と賞と 明るとりつる義ありと

種や秋の月貞徳 上ゆく下ゆく雲 秋天 や秋の天 九兆 秋風 楊良

論秋氣動 秋の野 秋水 莊子 其風清 秋野 秋水 水時小

至て百川河不灌ぐ涇流之大雨不浹渚涯の間牛馬 秋聲

歐陽永叔秋声の賦あり 秋の七草

松の葉や細きやもゆも秋の声 秋の七草

秋野尔咲有花乎指折可伎數者七種花 源氏

之花乎花葛花瞿麥之花 花部志又藤袴朝貞 源氏

之花○是と秋の七種、称と撫子の一種ハ連非 源氏

も有りの由名入霜を結ハ冬もあ 源氏 霜の後撫子咲 秋の山 秋の山 秋の山 秋 秋 夜 夜 夜と打とぐ ありはみ

小山林不棲不時群飛寺院の叢林よ出る事あり百
千群と成て天と蔽ふ状を雀不似て大く背太し頭頸灰
蒼やうく棕色の斑あり領黄赤之背白し背蒼赤と
帯ふ黒き斑あり日本紀天武天皇七年鴛子鳥天と蔽ひ

西南より江鮭あまのこ鱒なまこ草魚くさうい鯨くじら和名向米わなこめ
東北に飛べ

三尺小き者尺小満るものあり儼鯪魚の如し江鮭と六則
江湖の鮭河鯪魚より臆多し湖水での佳品は秋ハ

月雨水河より湖中流し入る多き多き川より新走
上る菜と構へ或ハ大なる櫛細と以これと取る

新酒の尤早き湖東問答著問云春の
ものを新支と云秋の暮

作者多しとりり尤秋の暮ハ秋の夕間暮あり
春の暮ハ暮春の事侍る也云云春の暮ハ暮春

又一片に限るべし一句の趣やもよほし秋の暮
といふこと文字の數もさかちまき句まはる累して秋の暮

とらふと近より下五文字ハ秋の夕といふらま
あり秋のゆづといふゆづといふは作者心得あり九月

温酒

御光明寺殿下御抄九月九日ハ寒温のさうい身
肉より時此温酒と飲ま病と得まこと
より酒と温の用よりあり十五日増いの丹百

世諺明答と引多り粟田口祭川橋の東
八大天王の祭祇園牛頭天王娑竭羅龍王の女類梨女

とめりてことある八王子ありこれ曆より八將神
穴織祭あや織まつり十七日摂州豊嶋郡池田村民家の北なる山上

其間僅十町むり日本紀應神天皇十四年春二月百濟
王縫衣の二女と貢ぐ真毛津いふ云同三十七年春二月

戊午朔阿知の使主都加の使主と呉小つうて縫工女と
求めむ阿知の使主ホ高麗國小至ると更小道路と志らむ

道と知る者と高麗小と高麗王乃手久礼波久礼志二
人と歌て道守者とことふありて是小通むること得る

呉の王工女兄媛弟媛呉織穴織と與ふ云同四十一年春二
月午朔阿知の使主ホ是より筑紫小至るの時宵形大神

工女とことふ故小兄媛と以て宵形大神小奉る今筑紫小
ける御使君の祖既りてその二女と率て摂津國小王

秋

武庫小来りて天皇崩すゆふ及むも大鷲鶴の尊仁
 小献るこの二人ホの後今其の夜縫蚊屋の衣縫是あり○
 仁徳天皇七十六年戊子九月十七日小縫媛二人とも去あり
 てつひふふと祝ひ祭る縫寮の神をまつ毎年九月十七日
 十八日と穴織呉織両社の祭礼と和衣荒布の神供備
 てことと神衣祭と称と社家の説ふ應神天皇春二月
 縫媛と呉ふ 秋の花 いざ不審その体ふふさの
 求むとつり 菊の異名とつり 異名
 あり藻塩 秋一久の花 分類 藻塩草小同ぢふ
 草ふつり 枯るまで野ふ残るつり秋一くの花
 是古き物ふあり或説ふ菊と秋一くともむと云今按
 ざる小埃裏抄云聖一國師重陽の佛事の時に草
 の花と北の藻ふ植てノントくと南の山と見るとよめ
 しりしそえとる是ハ古文前集小陶洲明う採菊東籬下
 悠然見南山とつり詩と東と北と採と植とつり傳
 寫の誤るべト埃裏抄ふよる藻塩草 赤小豆引
 の秋一くの花も誤るべく秋草の花

大抵土用の中種とわ 孝子傳 関損く後母
 蔣九月とれと収む 芦の穂絮 生處の子ふ衣るる

小綿絮を以し損ふハ芦花の絮を以てと云と出ると
 す損ふ日母在せば子單あり母去らば三子寒しと遂ふ
 止 本草別録 烏桕を煮し乾を甘温 秋

烏桕 多識論 烏打今按 阿末保志 秋
 御今 初霜ハ 朝寒 御今

の葉 秋の霜 朝寒 朝寒
 秋さむき朝寒きゆと 網代打 藻塩草 網代ハ冬
 朝氣さむいづれも冬

九日の前小打初て宇治の 秋過て 秋暮て 秋
 網代人供御小奉るあり

を隔る 秋小後る 秋より後 秋の別
 秋の名残 秋の限り 秋と惜 秋深き

秋の湊 注 不及 七月 ささか小姫 棚機
 異名七

秋 わさ

狹雄鹿ついで狹山狹野ついでとてり詞あり〇萬

葉こ小牡鹿こと書るはちひさき鹿こといふありこ小

てりこ猿酒さる猿菓と取り山中樹木のこ鹿こ或は嘉願かの

酒さけの如く味あじ甚お甘あま美いこれと猿酒さる

といふこ獵者あや往々見て竊ひ食む八月はち壞こ天神てんじん

祭まつり三日み泉州府志せんしゅう泉州せんしゅう常樂寺じょうらく天神てんじんの像ざう菅神かんじん

也こといひこ長徳二年ちやうとく或は正月しやうげつ海濱かい漂ひ来り

より此所こ安置あんじ或は昔むかし塩穴しんけつのこ郷こ湊みなと村むらあり故ゆゑ

塩穴しんけつ天神てんじんと称なづ中世ちゆうせい此このこ荘しやうふこと勸請こんせいと文明二年ぶんめい

菅原すがはら為な長郷ちやうきやうの記き云は和泉國わいせん毛須深井もうすかふ草部くさぶ土師とじ向井むかひ

為な長卿ちやうけいの真跡まあとせ今いま按お小塩穴こしんけつ天神てんじん八天穂日命やちほひのみことうち後ご

小菅丞相こすがのしやうさうと合あせ祭まつりる〇例祭れいまつり六月十三日りくごくとしと夏神樂なつかみ

八月三日はちがつさんじつと秋神樂あきかみとこの日このひ恭請こうせい多おほし神輿かみこ塚七道濱つかしちみち

なな夷島あまがしま渡御わたがみ即日いつじつ還幸えんさう先板せんいたの諸しよ

抄四日せうしよじつとあるある今いまハ三日さんじつありあり三五さんごの夜よ

つつの部月見ぶづき西院祭さいいんまつり廿八日にじゅうはちじつ春日かすかひの神社じんじやハ洛西らくせい

の糸小出いとこで郡ぐんありあり四糸しよし通西つうせいの上のうへ

手四町計てしよちうけい云い西院村さいいんむらの西平林村せいへいりんむらの中なかありあり名跡志

按お小西院こさいいんの号ごう中頃ちゆうけい此所この西さい齋院さいいん居いありあり故ゆゑ

小此辺ここのへの名なとて齋院さいいんと書かくと後誤ごごと西院さいいんと作つく

る次つぎ〇例祭れいまつりハ八月廿八日はちがつにじゅうはちじつ神輿かみこ二基ふたもとありあり其その一ひとつは住すま

神輿かみこ推吉おしきちの社しゃ同どう紀事きじ柘榴しやくじゆ時珍ときちん日榴にちじゆ榴じゆ丹たん貴き

西院八幡祭さいいんはつぱんまつりといふ未詳みしやう垂たとてと贅ぜい瘤じゆの如ごと

事類合璧じゆりよくへい榴じゆ大おほくとと盃さかの如ごと赤色せきしきふふ黒くろきき斑まだらの

點いあり皮中蜂かわちゆうへいの巢うの如ごと黄膜わうまくありありことこ福ふく子こ

人の齒はの如ごと淡紅色たんせきしき亦また潔けつ白はくめて雪ゆきの如ごときき青あおありあり潘

岳賦たけふ云い榴じゆハ天下てんかの奇樹きじゆ九州きゆうしゆうの名果ななつかり千房せんぱう同どう映えい千子せんし

の如ごと飢うとと禦ごきき湯ゆとと療りやうし醒せいと解げし醉すいと止とむむ元史げんし李祖

收傳しゆへん元魏げんゑい安徳あんとく王わう宗しゆ李祖りそ收しゆと納なてて妃いとと後ご帝てい李り

かか它かふふ幸しやうとと妃い母ぼ二ふたの石いし播はとと帝ていの前まへふふ昔むかしむむ人ひと其その意いと

知しとと祖そ收しゆ云い子こ孫そん多おほららんんててとと飲ちんとと今いま鬼おに子こ母ぼ

神かみと祭まつりる人ひととと小備こひふふ小櫛こしとと以もててももハ千子せんし多おほ

子の義ぎややららるる花はなの形かたちハ夏なつのこの部ぶととハハ三七さんじち

秋 さ

の花

本草三七春苗と生し夏高サ三四尺葉菊
艾ふ似て勁く厚く岐尖あり莖赤き稜あり
夏秋黄花とひく蕊金糸の盤鈕のごし愛を感し
氣香と花乾くと死に繁とてなて苦賣繁のふりし

烏鳳

和漢三才圖會今云三光鳥近年ことあり計
碧色背の上赤と帯腹白く羽黒くして微

赤項の毛乱起て頂上冠あり眼大りて臉青く其
尾長き者一尺半計やとて廻轉せ其まは清越日月星
と云り如し今三光鳥と稱せ其雌雄ふ似て浅く尾短く
俱ふ性勇悍難と育る時か鳥鴉の未さきハ羽と
振ひると拒む或ハ其眼を啄く其巢鞠の如し
兩端ハ口あり表より入裏ハ出尾の長きと以然り

鮎

この部落
鮎の糸出
九月坐摩祭
廿日坐摩の傳
記ハ夏のさ

の部空摩の海抜の糸出注りて夏ハ果と例祭九
月廿二日と見と相嘗八十島祭と号と新嘗の神事や
小 逆髪祭 廿四日 社説云江列滋賀郡琵琶湖の南
逢坂山關の清水大明神ハ延喜

四の皇子蟬丸の社ハ蟬丸双眼盲と云る故ハ初して延喜
廿二年壬午春三月公卿大夫蟬丸と供奉して逢坂山ハ左
近し奉て各涙雨と滴て帰京を残り留る人白川の妃
則長基經古屋の美女師輔ハ云の爰ハ於て姉の宮深く

蟬丸と云るハ密ハ禁闕と出て相坂山ハ未だ蟬丸と共ハ
花月と清賞し旅駅の山岩川陸と偏登して雲鬢緑
髮顛倒と國人御名を逆髪と号く天慶九年廿四日遊
去りて故ハ毎年九月廿四日の祭祀今ハ至て怠る事
ありハ姉薨去の後蟬丸と云るハ一社ハ合せ祭と云ハ青藍
云蟬丸と延喜才四の皇子及び盲人と云るハ女説ありハ
後撰集のゆくも云るハあるハ哥の詞書ハあるハの人
と云ると有と云るハ諸書ハ論ありと云るハ水

戸學士の一説ハ唐の南朝元帝の諱と延基と云るハ延基
の三男極禰の時より一痘あり其上瞽と云ハ遂ハ是と相関
と云るハ所ハ捨るハ此子の名と彈兒と云るハはんと云るハ幼年
より延と云るハ彈せり故ハの付り今此事より日本の
蟬丸の支と考ふるハ延喜と延基とキの音同じ蟬と

蟬字の形相似り又相関ハ相坂の関も相似り又延
秋

喜の御子と捨りて彼是同意(彈)の事ハ古史考卷の三十一ふとそり云惟諸歲時記接ふ逆上六坂上の誤り寺門の説云江州相坂山関の明神二所一所ハ坂上あり一所ハ坂下あり云元坂上の社をどつりど誤りて種々の説と設けり云又云二所とも道祖神と祭りて関所の鎮守とも朱雀院の御宇蟬丸の灵と當社小合せ祭る依て土俗蟬丸の社と称も下の社の前小井あり関の清水と名く清水明神と号祭礼九月廿四日上下の社同日神興二基云この説種あり皂角時珍曰皂荚樹廣志小豆と鶏柗子樹の高さ大葉槐の葉の如し瘦長して尖枝の間刺多し夏細き黄花と開く実と結ぶ三種あり一種ハ小みて猪の牙の如し一種ハ長くして瘦薄く枯燥て粘も其樹刺多くして上か加さもら櫻紅葉櫻のちもち珊瑚仙蓼珊瑚仙蓼二名同物園史兼山茶の如く小夏白花と開く秋紅の実と結ぶ珊瑚の如く累々々々天和本草珊瑚兼ハ

橘の如く及ハ莽草の如く刻鋭あり葉長く節あり寒と日と長陰地小宜く本草綱目雜草の部百両金以ハ

此と同物久和漢三才

栲栗

江東小栗

七月

南会仙靈草本草云

北野御手水 六日山城國葛野郡北野天満宮此この處も朝日寺の地

帝闕より北ありを以て北野と名く紀事七月六日

北野松梅院御手洗と神前小供も松風の硯穀の葉

と添てる也と供も松梅院幼年北野煤拂

或ハ故障ありときハこの義あり

雍州府志 毎年七月七日北野社内外の陣あり所の神

室と西の間及ハ幣殿会所出しと曝まるこの間小

宮仕内外の陣 乞巧奠

の煤こ拂ふ 乞巧奠 名目抄 今の俗キンカウチ下

乞巧奠ハ人々其業小巧とありてを願ふ意あり

開元遺事 七夕小蜘蛛を以て金盒の中納蟬開て蛛

絲の稀密と視巧の乞巧針 乞巧瓜

多少と得りとも 乞巧針 乞巧瓜 荊楚歲時記 七

夕小婦人七孔小針と穿ら或ハ金銀鑄石と針と瓜菓
を庭中小陳ね巧とをふ蟻子ありて瓜の上小綱を時
ハ巧と得

九枝燈

漢武内傳七月七日帝宮掖の内
と掃除ト雲錦の帷と張九華の

燈と燃せ西王母降公事根源
燈臺九本ののく灯あり云

禁裏御燈籠

滑徳言雜談當世ふおいて禁裏へ御家門方より燈籠と
獻せらる奇巧金銀と鍍り花鳥人形赤の美と公せり

是と南殿ふらふらふのころより始るる也事ぬ
べし十四日ハ禁門と赦して賤の男女と庭上ふ入し是と

切子燈籠

和漢三才圖會一種岐里古燈籠
聖吳祭ホホこれと用ふ飾る所

逆の峯入

紀叟七月初大峯の修驗道
山伏の客僧大峯より京師小

出て大なる法螺と吹き自ら今剛杖と拏う々と遍歷
して齋料と乞ふ或ハ前鬼木鉢或奈良碗黄木の物を
且那の家小贈る九峯入の法本山派熊野より大峯入
是と順の峯入といふ當山派大峯より熊野へ出是と

逆の峯入といふの春の部順の峯入の条かよるるし
○貞享式峯入の類も順逆といひて春と秋とと断れ
今の俳諧の省法よらら秋と春とつれてハ
秋とハ春季つとてハ春と初ハハ
小ありて名々
清水千日詣 十日七月九日より十
日小玉まで京

清水千日詣

日小玉まで京

經木流

十六日 摂州四天王寺此
東僧坊の前ハ

良清水觀音小諸人参詣と夜ふ入て参詣殊ふ多し今
日の参詣平日の千度小あるとつハ江戸浅草の觀音と
同日より参詣多し

俗四万六千日といふ
龜井の水より白石玉手の水と号をむく白川法皇
の上東門院當寺小詣し時其水盤ハ龜の形あると見て
白石玉手の水と以て龜井の水と詠むこれ其早の起る
ところあり

新古今濁とあき龜井の水とむまひりけて
心のちりこまきつるうねの七月十六日世俗經書堂ハ
いして經木の表ハ法名と記し此水と手向て灵魂と出
と摂陽群談よもといふ昔八月毎小六斎の日講堂ハ
いて經と誦し参詣の戒名と名帳ハ記し面向せしハ和

秋

き

和

秋

泉式部恭詣のとき名を薄ふまゝして詠むる奇樟弓

こころへしとほもなほとほりてあき身の敷ふりぬる今の

經木この名 **桔梗** 時珍曰桔梗結其草の根結實

薄の遺意也 **桔梗** して梗直之故ふ名 **和名抄**

桔梗 和名阿里 **和漢三才圖會** 山野及人家ふ多くこれと

種凡紫碧の者と桔梗の正色とと又白花あり紫白相

交る者あり單葉あり八重あり **古今** 物名秋ちう野

ありありちう野のおけること葉もゆるくゆるく友則

蟋蟀 **大和本草** 本草四十一卷竈馬の附録の一名

蟋蟀 又蚤とて立秋の後夜鳴くイナゴに似く

黒し翅あり角あり頭ハ切らる如く大とあり俗にうら

あくとつ西土の方言クワツとつ古奇ふきりぐとせ

よりは是は秋の末まであり故に古奇は霜夜よありの

今俗にふきりぐとて **莎雞** 家持集 **きりぐと** のは

こゝ鳴あふとむらまぬもの我 **華** つ虫ち

うむすげの庭鳥ホの異名あり頭字の部ふちて注

兼三秋物銀兜 月とつ入階煬帝云 **既望** の

清露冷侵銀兜影

さよひの糸 **既生魄** 既生魄と生むる十七日の月

小併せ註 **既生魄** 月の照る所と魄とらふ **暉**

素 **文選註** **金波** **前漢書** **霧** 尔雅孫炎註天

月光 **月光** 下り地不應せざる

と雲とらふ地気天小弁して應せざると霧とらふ **和漢三才**

合 **霧** 霧の二種皆露の凝する者秋月盛んして其降

朝と夕とあり甚と多きとに **菜蔬草木凋枯**

と霜雪より列 **藻塩草** 霧は春夏も詠むて秋

限るべからむとつとと連非小霧とむり **秋** 八雲御抄

の如く春山の霧ふまるとる **鳥** 又夏霧とも万葉あり

と云 **俳諧** とも春夏の季小結 **春夏** あり

べし **朝霧** 夕霧別義あり **胸** の霧 **む** の部 **注**

の **色** **霧** の立へてつる **霧** **野原** 小下 **霧**

とほ **霧** の海 **の** 渺々 **と** **海** の

と **霧** の香 **御今** 霧小匂ふのありの **草**

こ **霧** の香 **物** ち **霧** の香 **霧** の香

の香とふきと詩ふも作る **只** **秋** **霧** の **香**

秋 **霧** **立**

秋 **霧** **立**

秋 **霧** **立**

秋 **霧** **立**

秋 **霧** **立**

秋 **霧** **立**

秋 **霧** **立**

人八雲御抄霧雨霧の深き所ハ雨木淡霧の降ずるべし

樹小熟し美伽羅材一名透徹材形長く四

味脆く美錦馬鹿の異八月北野祭四日

幣あり後冷泉帝永承元年八月四日小定らる五日ハ母

后の国忌ふりて拾枝抄北野祭今ハ四日ハ五日先

例大臣より始て納言參議至大頭と称も催し申

あり料米六十石○祭神三座中ハ天満天神東ハ中將殿菅

美聖下立賣の西御旅所不移奉る其間

廿余町の地蜀錦敷き供奉の筆綾羅の袂とつらみ

管絃の聲雲井ひびくる礎四子打綾卷字林直

よ富社の古記あり礎衣打志打小春と拵

と古人衣と拵小女相對と一拵と執米と春

如し然る今易小拵拵と作對座してと拵

其便と取る和名抄唐韻云礎和名岐擗衣石擗亦擗

杵和名○綾卷衣と表末との緒と巻と打と○四手打八

雲御抄志きり小打衣とて打ともよめり銀杏實

○志とろ打とろ打との名と拵と打とと銀杏實

時珍曰銀杏其葉鴨の掌小似とり因て鴨胸と名とる

の似始て貢と改て銀杏と呼其形小杏小似て核の色白

小因て今木の子取たの部茸符拒引筋白

霧雨

木淡

伽羅材

透徹材

錦馬

八月北野祭

幣あり後冷泉帝永承元年八月四日小定らる五日ハ母

后の国忌ふりて拾枝抄北野祭今ハ四日ハ五日先

例大臣より始て納言參議至大頭と称も催し申

あり料米六十石○祭神三座中ハ天満天神東ハ中將殿菅

美聖下立賣の西御旅所不移奉る其間

廿余町の地蜀錦敷き供奉の筆綾羅の袂とつらみ

管絃の聲雲井ひびくる礎四子打綾卷字林直

よ富社の古記あり礎衣打志打小春と拵

と古人衣と拵小女相對と一拵と執米と春

如し然る今易小拵拵と作對座してと拵

其便と取る和名抄唐韻云礎和名岐擗衣石擗亦擗

杵和名○綾卷衣と表末との緒と巻と打と○四手打八

雲御抄志きり小打衣とて打ともよめり銀杏實

○志とろ打とろ打との名と拵と打とと銀杏實

時珍曰銀杏其葉鴨の掌小似とり因て鴨胸と名とる

の似始て貢と改て銀杏と呼其形小杏小似て核の色白

小因て今木の子取たの部茸符拒引筋白

白果と名く啄木鳥取食と故小名く禽經三小か

者雀の如く大と者鴉の如し面桃花の如く啄足

皆青色爪剛と利と錐のとし長と數寸舌味あり

霧の深き所ハ雨

透徹材形長く四

鹿の異

四日

菅

菅

菅

菅

菅

菅

菅

菅

菅

菅

菅

菅

菅

菅

菅

菅

菅

菅

菅

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

花の宴

九日青藍云俳諧歲時記小周の穆王其時
 小傳慈童八百歳とあり貌少年のごし魏の文帝
 の時名と彭祖と更て文帝小此術と授け奉る文帝の
 術と受て壽七十歳今の重陽の宴是此説安談の甚
 しくいへり列仙傳小彭祖ハ帝顓頊の玄孫姓ハ錢名ハ鏗
 周小至リ八百歳ありて衰老せむ穆王召して大夫とせし
 ず病と称して與らむ後遂小流沙の西小姓彭祖の傳か
 くの如し慈童より事と以て附會せり元野史小
 説の詩話より出づ菊花の宴ハ秦漢以來より既小あり云
 論ひり實に安談附會の甚しといへり夫つてあはれ
 大開文粹ハ視賜群臣菊花詩序云紀綱言採故事於
 漢武則赤黃挿宮人之夜尋舊跡於魏文亦黃花助
 彭祖云又世諺問答と魏文の説と引きてこれハ古くより
 いふことハ七女談あり九風雅の道ハ事の虚實ハ
 其趣のまじりて隨ひてあはれといふこと
 毛也ハ附會の説といふことゆら不捨き
 もあはれ○ちの部重陽の宴併いへり

菊花
 公事根
 源御前

小菊瓶とわく云全文ちの
 部重陽の宴の条小これなり
 菊花の酒 高小登る統
 茱萸の袋内

諧記 汝南の桓景費長房小隨ひて遊學するも思年
 長房謂曰九月九日汝が家中災わらん急小去へし家人各
 絳袋と作る茱萸と盛り以て臂小繫て高き小登りて
 菊花の酒と飲め此禍ハ除くべし景言の如くし舉
 家山小登る還て見れば雞犬牛羊一時小暴死と長房
 此言を聞て曰此まふ代る今世の人九日高き小登りて
 酒と飲婦人茱萸の
 囊と帶蓋此小始る

菊花の節句 栗の節句 菊酒と
 親戚朋友互小贈る故小
 菊花の節句栗の節句と稱す
 御湯殿記九
 日の夜小入御
 殿の南階小小菊と多く植其菊小赤白黃の添りて
 丸め菊花小作ると枝々小付る今日葵と菊小取つて
 らるるとり云々○青藍按むる小菊小著まるとる
 くら菊花の露とまら小移しとる面とぬらひありて老せぬ
 葉とせしむる後撰集とあり小まると侍る時九月八日
 伊勢が家の菊ふりて著ふつりて又のりて

秋 小
 葉とせしむる後撰集とあり小まると侍る時九月八日
 伊勢が家の菊ふりて著ふつりて又のりて

訶遇突智と斬て三段とて其一段は高麗龍と云ふ改曆雜事記九月九日見

貴船の社の船王命と高麗龍と云ふ改曆雜事記九月九日見

咳逆疫して死亡する者多し仍て相者としてトセし云貴

船の神の祟まは所くして弘仁二年百六代後秋九月九日

疫と追しび今貴船の神輿と稱して洛中と振るものはこの

遺意より今以来毎年九月九日小兒相集りて小き

神輿と作て貴船祭と稱して市中

北山祭廿七日六所

洛北鹿苑寺の西南衣笠の岳の良平林の中より祭

神詳ありて例祭九月廿七日名勝志の説北山天神祭九月廿

六日この拜殿ふ於て三番更あり正月廿七日六所明神小猿

樂り管見記九月廿七日等持院村祭本社等持院鹿

苑寺小相隣る故ふまづ北山祭と稱も類聚國史北山の

神社大北山村あり天長五年八月天地震災ありて

丁也北山の神祈ふ名勝志北山高橋の西北四五町小

らり高橋北野平野の洛陽より成交のこ北方より

ととと古より北中と稱を疑らる村名小より

う。毛吹草北山祭廿五日と記諸説迭ふ異し

金柑

時珍曰金橘実と結本草橘の如くして

ふ秋冬より黄熟も和名枳殼

刺多し春白花を生む天和本草枳橘今案も

カラモチといふもの其木より多き故小人家植て和名

盗不備ふ昔より國俗誤りて是と

枳殼枳實とて和名非多

寺千部十五日より明顕山祐天寺江戸驪黒あり

廿五日まで開山ハ祐天大僧正例年七月十五

日より廿五日まで何弥陀經

千口修行この節赤詣多し

夕顔の實ふくく品類

○瓠長きこ越瓜の如し首尾一のこ懸瓠瓠の

一頭より腹あり長き柄あり者柄あがくしてひら

まぐり○匏柄あがくして四方形扁き者○壺匏の

短き柄有て大腹ある者○蒲蘆壺の短き腰の者○

其形状各同いらむとて苗葉皮子性味ハ

右本草時珍説○乾瓢ハ瓠畜と云生あると日小姓

又盛ていへりおのりと

兼三秋物

夕月夜請

秋 きゆ

の大小ふよきて翌二日の夕より出現の事分明十日
 あまりの頃までも暮は出るわだの月と夕月夜と讀ふ
 らん **弓張月** 釈名弦は月半の名其形一弓の曲
 し一弓ハ直くして弓の弦と張が如き
夢野の鹿 摂津国瓜土記云雄伴郡夢野の
 父老傳ていふ昔刀我野小壯鹿
 居る彼壯鹿夢野島に往て妻と相愛を既しく壯鹿
 来て嫌の所小宿を明且壯鹿その嫡を誥て云今夜
 吾背の雪よりおけりを見き又まき草生よりとまき此
 夢何の祥ぞとの嫡まき夫の妻の所小向往まきと悪
 詐相して云背の上小草生る矢背の上小射の祥
 又雪より白塩穴は塗の祥汝淡路小渡ら心船入小射
 られて海中小死人謹て復往事ふまきその壯鹿感意小
 勝も復野島小渡る海中行船小あひて終小射殺る故
 此野を名づけて夢野といふ俗説小刀我野小立る真壯鹿
 夢相のまふ云 **河社契仲大八云仁徳記小菟餓野の鹿
 の夢のといふ也とぞとより夢野といふといふとこまき**

よりく夢野 ひの部菱取の
加菱 糸もむし
九月 柚 説文 柚の橙

小似て酢し柚の皮ハ **柚味噌** 滑替雜談 近世編笠
 柚味噌といふものを作ふ
 苦く橙の皮ハ甘し
 柚一箇を二片とあり 辨核と去熱湯小投て輕く炙し
 取出し乾し置て柚味噌を用ゆる所の味噌と其斤小盛り
 包み編笠の形ふありよく蒸して用ふ **行秋** 行秋の
 圖の余店関東何其始て制衣とよ所

の部 こ由
七月 益母草 猪森俗目

をいこと云蓋ハ胡麻小似て葉ハ麻のよし其葉兩を相對
 して一層ハ東西一層ハ南北とくぐひふ十字字す七月紅
 紫の小花を開く又微白の物あり本草ハ
 ハ花四五月と記す土地の違ひあるべし **八月 名月**

つの部月見 **眼白鳥** 和漢三才圖會 頭背翅尾黃
 青を鮮明俗にハ黄
 の糸小出
 色是眼の睡小白圈あり胸臆白くして羽色と帯ふ
 腹白し性よく群とあり文と好て樊の中ハ在る亦一様

小集の相依て祭推を其中一雙飛出群と披るまき余り相推も又中より披去初のこころ毎小柄と好む

み

七月

鼠尾草

時珍曰鼠尾草の形を以名小命○韓保昇曰鼠

尾莖の端小夏四五穂を生ず、
車前の如し花赤白の種あり、
水懸草ハハやく七夕小より水懸草ハ稻の事、
あり又或説小こころを聖霊の水ひくる心あり、
三井

寺女詣
十五日江州長等山崇福寺
又蓮地福院を
大津の側あり、
園城寺又三井寺と

称園城寺ハ御園小隣と以て名と、
三井寺ハ西巖
小灵泉あり天智天武持統三帝即位の時この井の水と搥
て浴湯小献因て御井といひ後小改て三井小作是三皇
の浴井龍華三會の義この寺平日女人結界の山に只七
月十日女人の恭詣と許し登山せむとこれと
女詣といふ當山ハ智證大師山珍の開基

妙法寺
御狭山祭
信及諏訪

の火
の条は出ツ、
郡諏訪明

神の祭今在記
上諏訪ハ建御方富命下の諏訪ハ坂
入姫命○或説小御射山の祭ハ薄く神殿と造る其外
人の家も祭の程ハ皆薄く作る又こころをまきこのとて
日本紀才三野槌の神ハ五百箇野葎の八十五箇と採りて
是ハ天照大神と天の岩戸より出し奉ると世時のまき
信及諏訪と山祭ハ薄く以幣とす故ふこころ川信濃
とつらふ○此祭ハ遠笠懸と射て進らまき其始田村
將軍の安倍高麻呂と伐んとふ信濃國に至り此神小
祈り申されし小握の葉の紋付し直垂著る人湖の波上
小馬とまきを笠懸射りしと今笠懸射て神事とす
るハこの所謂マキハうて遊波も記して諏訪ともありと
縁起不出當社ハ祖武の御宇田村將軍の建立ことあり
この神はまき田獵のことと主とらふ○穗屋御狭山小
作る穗屋ありこの祭ハ貞徳説ハ八月に藻塩草七月廿日
とも増山の井ハ七月廿七日とも此説多しとてかき秋
むりハ勅使と立ちらふハ穗屋といふハ勅使尊敬のこ
新ハ仮屋と設けらるこ今もその余凡そ穗屋と造るや
と新式秘抄云穗屋つらふハ諏訪祭のこと諏訪祭ハ

秋

川塚の庄塩穴の下糸開口村あり住吉日記祭る神伊

并諾尊の御子事勝食勝国長杖之後生玉牛頭天王

と合せ祭る乃住吉の外宮と故小朝廷二十年一度住

吉の社造替とありあふこき當社も此義あり土地元

開口村本村原村の間俗三村大明神と称し本寺祭る

泉別府志社説云密乘山念仏寺聖武帝の御願依て行基僧

開基所社領八十石例祭八月一日二日三村祭

又大寺祭といふ木村開口村原村の産沙神あり大念

佛寺の鎮三津八幡祭 十日振州西成郡坂三津の寺

敷津難波津是傳へり昔行基寺院と建て三津寺と

号後神託小より八幡と勸請も毎年八月十五日祭礼

あり社説ふり當社清和天皇の御宇筑紫宇佐の神

男山遷座のとき西海より初て至りあふ洲中その旧跡

小祝ひ祭るといふ又一説小應神天皇行幸の地といへり

○振州難波堀江の人月と此所小賞も各深更及ひて

家小帰るといふと月見と称も又水引の花 和漢三

難波の御被と称も是八幡祭る 面盆水

引草高さ二三尺葉揚櫃小似て皺ありて秋長徳と出

小き花つく紅色其莖山く織く然及ひ水引の如故

小名 水始洞 月令 九月三度栗 本朝食

川下野別山栗あり極て小なりて一年三度栗と収む

故小三度栗と称も味佳あらむとせ及古のはくぐり

水木 和漢三才圖會美豆木高さわの二三丈葉梅葉

黄色あり一種土佐の山中より出る者高さ二三丈葉粉

團花の葉小似て小し正月黄花と開く檳簇下り並

る子と結ぶ赤色呼て土佐美豆 蜜柑 和漢三才圖會

木つらの実と賞して秋とい 太知波奈和

名ハ橘類の總名今單ハ太知波奈と称もわの包

福の專果と其皮と葉とを乃蜜柑其実熟をこそ

きハ蜜の如し故小名づくたを草福ハ准とせり

化して根とありてさきとくきとくきとくきとくきと

このん九年母をいひるもの其樹と移し 水の紅葉

て出羽小植とせり此樹とあるといひ

秋 みま

川の紅葉小同し **七月七夕** 七日の夜

かの部 **星** 牽牛織女天飼星 月令廣義 焦林大年記云天

河鼓彦星 天所居の河の西小星あり煙々として

参俱不出と云と牽牛と云天の河の東小星あり微々

として成の下小ありと織女と云世に雙星と云倭

名抄 尔雅注云牽牛一名河鼓 和名比古保之 織女和名木

豆 和訓義解 ヒコ星ヒコハ男子の美称織女の夫と云故小

男星と云 **二星の屋形** 唐の天室年中官中七夕小

ころりあり 錦綵と以て結びて樓殿を

も高さ百丈數十人と容下花果酒炙と陳ね坐具と設

け以て牛女の二星と祭る ○本朝式少く異七ツの棚とか

き花と折瓜果と備へ **七種の舟** 七種の舟ハ色々の室と

空焼おの事あり **新吉原燈籠** 七色舟小續て手向

ると云七ツハ 一日より 享保元

七の敷と用云 **聖靈棚** 鹿鳴草 類智

吉原の遊女玉菊追慕の爲一年七月中の町の揚屋

各燈籠と出す是より例とありて毎年此事ありんをの燈

籠綾羅と以て禽獸諸物と造り奇麗莊觀つて云々を

この節男女群集まると燈籠見物と云燈籠小玉

は菊が来る夜 聖靈棚 鹿鳴草 類智

抄鹿鳴草 和名ミ 故小此名あり云々ハ雲異本云々を

草とあり教長集 都方も咲わらむも鹿鳴草名あり草ハ秋の



七月

七夕

七日の夜

秋海棠

石蒜

檉柳

秋海棠

檉柳

秋海棠

秋

諸物と添べし、**澁取** 和漢三才圖會折液造法、粉一斗、故添の名あり、

葉と去水二升五合、和確、持、編、ふ盛り、宿と經て、こまを搾り、渣も又水小和て、

二日と經、よぐらひこれと搾る、其用甚多し、 **兼三秋物**

志り露 李白詩、秋露如白玉、伊勢物語、つらつもの、何ぞと人のとひ、とこ露、こころつて消あり、

物 えんせら **新月** みの部三日月、の条、注、 **志まほ** 月の異名あり、

風、やちる、みよりの空、小風、 **常娥** 淮南子、羿不死の、

け、ぶ、ふ、ま、ま、ま、 **常娥** 葉と西王母、請入、

娥娥、こま、こ、編、て、以、月、小、奔、 **真如** 後天文志、常娥、昇、

毒、不、死、の、葉、を、食、編、て、月、を、毎、日、と、蟾、蛤、と、す、 **真如**

の月 法華、正義、清淨、真如、雲、外、の、月、の、ど、り、の、衆、生、の、真、

如、仏、性、に、常、に、煩、悩、ふ、つ、ま、れ、て、も、其、体、は、少、く、も、深、く、も、

汚、く、も、論、は、月、の、雲、小、輪、も、こ、も、其、体、は、清、く、明、ら、く、も、如、

し、こ、も、と、真、如、の、月、と、し、く、真、く、不、死、の、義、如、不、異、の、義、

條芒 宗祇曰、まきまき、こ、 **縵芒** 縵、白、の、ひ、と、

穂、こ、り、ぬ、薄、と、り、 **忍草** 文、あり、

箱、云、志、の、草、和、名、抄、の、古、の、類、小、垣、衣、と、よ、み、み、り、

古、き、築、地、朽、も、物、の、端、古、き、軒、端、も、小、常、小、生、る、草、と、云、

と、い、ゆ、か、く、も、ハ、 **山** 中、小、は、る、ひ、の、草、と、さ、ら、の、け、し、と、根、と、つ、と、軒、小、

う、と、と、云、ハ、古、き、と、こ、ろ、得、ぬ、の、偽、名、の、今、云、忍、草、ハ、

本、草、小、い、石、長、生、の、ゆ、ひ、や、べ、し、と、石、長、生、ハ、四、

時、凋、今、俗、の、樞、掛、る、の、の、冬、枯、る、ハ、後、醍醐、帝、

の、廟、前、お、て、御、廟、年、を、經、て、忍、ぶ、ハ、何、と、も、の、草、 **鹿**

是、ハ、垣、衣、ふ、よ、 **新澁** 七月の部、澁取、 **鹿** 格物論、鹿の性、

う、と、て、下、め、ら、 **鹿** 格物論、鹿の性、

良、草、と、別、他、獸、多、く、ハ、三、辰、八、卦、ハ、屬、也、惟、鹿、然、ら、び、一、

千、年、小、い、と、蒼、鹿、と、あ、る、又、百、年、う、て、白、鹿、と、化、し、又、五、百、

年、や、と、と、鹿、と、あ、る、鹿、小、麋、あり、鹿、あり、麋、あり、天和、本草、

鹿、の、角、ハ、春、生、し、夏、長、じ、秋、堅、く、冬、脱、杜、鹿、ハ、鳴、き、杜、鹿、ハ、

鳴、く、と、七、月、の、末、あり、八、月、の、中、は、く、ふ、九、月、末、ま、て、鳴、く、ハ、

秋

鹿

鹿

開帳 五日神祇正宗近江白鬚大明神孫由彦也神

中より止む今八尺内陣と開て宮殿と拜せしむの事

四月上の辰の日祭礼神輿渡御あり往古の神門石橋の

邊へ今水中一町をり湖水の沖あり縁起あり鳥

居のありし所と鶴川の北と鶴川領と入別當と白頭山延

命寺福壽院と号、毎年二月八講の久開帳八月廿

賀八幡祭 十五日淡海志四十代天武天皇即位九年

の御前八幡大井八今の聖真子是唐光僧の形聖真子

ハ阿弥陀八幡大井の分身ハ是山王七社の神カ淡海

因滋賀郡坂本村あり見瀬村の神社ハ秋社月

廣義曆書云立秋の後五戌の日と秋社を註ふ云

社ハ后上あり民とて祀りむ以て農と祈み死

活杖祭 此祭ハ京都猪の熊三条の南福速の神社ハ

断じて以て死刑と行ふ故ハ刑死の人の為ハこの社を建て

祭祀と修せり毎年八月神事ありことと死活杖の祭

といふハ本引接寺壬生の地藏亦て毎春修ま

所の念佛會ハ元死刑人の為ハ修行せしむ始れり

四手打 志ころ打 きの部礎の紫糸死 鬼の

蕪頰曰紫苑三月の内地ハ布て苗と生て其葉二四相

連て五月六月の内黄白紫苑花を開く黒子と結ハ万葉

菅草音下紐余着右跡鬼乃志許草事仁思安

利家里 家持ハ鬼醜女草これ紫苑ハ袖中抄鬼の

志ころ草ハ別の草の名ハ忘草ハ愁と忘る草

志ころ草ハ忘草といふ名ハ只事ハありん猶意ハ忘れ

鬼の志ころ草ハ忘草といふ名ハ只事ハありん猶意ハ忘れ

ハ詞ハ日本紀第一ハ不煩也凶目汚穢之所云と云わり

ハ嫌ハ詞ハ凶の字とあり俊頼抄昔人の親ハ三

人ハ此ハ此ハ孝行ハあり親ハ此ハ此ハ親ハ此ハ此ハ

秋 志

ゆきぬ其兄公ついで私とついで思ひも
 やう只よ止む時あし忘草ハ思ひとよひ物と塚ハ
 こゝと植る弟ハついでと恨と紫苑ハ忘れ草
 こゝと植る兄ハついでの程ついでと行せせ草忘
 草とついでと弟ハついでと絶と詣てぬあ日親
 の塚ハ声あり恐るへついでわれい君親の塚と守る鬼
 神ハ兄ハ忘草と植て公ついでとついで忘れ草の
 家と思つて實ハ其許ハ思ひ草と植てますく思ひ
 至孝ハ天帝ハついでと給てこれついでと今より益
 わしついでと夢ハ告つてますついでと弟ハ思ひ
 おのひ帰すぬそれ益あつて夢ハ見ると違つて徳と得
 ついでとついでこの紫苑草ハ糖しきとあつて人ハ植てます
 う敷くついでと人ハ植へついでと草ハ故とあつて
 ついでと鬼のついでとついでと鬼の師ハ草とついでと
 和漢三才圖會 椎の木より生を大 **松露** 和漢三才圖會
 ありもの二寸より大小最生も **松露** 麥草俗云
 松露沙地松樹あり陰處ハ生を松の津液と秋濕と相
 感じて菌とあつて織柄とく状ち零餘子ハ似て田く大

し外褐色内白く柔 **濕地草** 和漢三才圖會 原野
 小淡く甘し香あり **濕地草** 濕地ハ生を故ハ濕地

茸と名く状松茸ハ似て小くすまうふ邊も織の内灰
 白色柔く脆く破易し九月盛ふ出つ又織の外黄
 色の者あり並ハ食ふし **本朝食鑑** 標茅草標茅草

茅此多く生を地の名下野國黒髪山の下標茅草
 あり此則其處あり此草草茅 **猪草** 和漢三才圖會
 卑濕の地ハ生を故ハ名づく **猪草** 草茸ハ似て黒

く織脂潤ハ其裏小穴 **代々雁** 夜止宿中
 あり蜂の巢の如し毒あり **代々雁** 更毎ハ居る

このこと代々ついでと代々田 **四十雀** 五十雀 和漢三才
 のこと春の部苗代の条ハ注あり **四十雀** 面会小

雀ハ似て大也頭黒く兩頬白くして白き田紋黒き圈頬
 小至て胸背灰青翅尾黒あり灰白の堅條あり腹
 白色あり胸より尾小至て黒雲の紋あり其声清滑

て多く轉ふ四十雀ついでとついで故ハ名づく其老
 るわれ毛と換色あり異なり形も又大 **鷓鴣** 積頭白

俗呼て五十雀から入雌ハ腹の雲紋微 **鷓鴣** 状ハ母

秋

秋

鷓つばき似て鷓つばきの如し胸の前むね白しろき圓まるありて真珠まゝらのごとし
 背毛せうもう紫赤むらさきあかの浪なみの文ぶんあり○時珍ときちん曰鷓つばき鳩とび也なり必南かならずみなみ
 飛とて必南かならずみなみ向むかく東西とうざい小回せうかい翔たぎまことも翅はねと開ひらく始はじり
 必先かならずまづ南みなみ向むかく其志そのこころし南みなみと懐なついて北きた小祖せうそと性せい霜露しもつゆと
 畏おそまそ早はや晩ふ出でるる稀まれに花はな栖すまふ木きの葉はを以もつて身みを蔽おほふ
 多く對たいし啼なぐ今俗いま其鳴そのなを謂いて行ゆ不得た奇きら其性そのせい
 潔けつきと好このむ和漢わくわん三才さんさい圖ず會くわい字じ彙ずい云鷓つばき鳩とび鳩とび其その也なり數月すうげつ小葉せうは
 正月しょうげつの如ごときごといい飛とびて止とどまま蓋かき水みづ知し然しかるる也なり近ちか年ねん亦また
 中華ちゅうわより来きるる最も珍めづししとと状じやう雉ち雞けいの雌めに似にて
 頭かぶハ鷓つばきの如ごとしと藻そう塩しん草そう此鳥このとりハ寒さむくくも鳥とりハ仍なほ我われの
 未いままま紅こう赤せきの散ちと背せ中ちゆう小負せうおひひて雪霜ゆきしもの寒さむくくせ
 ぐ故ゆゑハ哥かふふ鳥とりのと和漢わくわん三才さんさい圖ず會くわい今鷓つばき青鷓せいせき一物ひともの
 上うへももの紅こうぬぬととありり鴨鴨ハ山林さんりんに在ありて
 原野げんやにに出でるる形かたち雀せきに似にて黃赤わうせき色いろ
 翅はねハ甲かささとと綴つのの斑はんあり脚あし掌てのひら黒くろしし新酒しんしゆ
 白米はくまい一斗いっとうと用もちてて酒しゆを醸かふふ須す加利かり酒しゆとと濃のくく小填せうてんて舟ふねに
 入いれ其酒そのしゆの水みづ半滴はんてつ復また布ふ囊ふくろにに入いれれ壓おさしし酒しゆおおののら
 滴たりり出でつつ酒しゆ滴たりり尽つて後汁ごじゆと取とりり去されれ新酒しんしゆととりり
 ○新走しんそう中ちゆう汲く醱か醱か醱か袋ふくろ洗せん各其頭各自のあたま字じの部ぶにに注ちゆうす

九月四の宮祭

十日 近江国滋賀郡大津の駅えきあり
 了しやう祭まつりるる神かみ四座しうざ大比叡おほひる大比小
 比叡おほひる四常しじやう氣け比ひ仲哀ちゆうあ小禪師せうぜんじ火々出かか按おむむふふ當社たうしゃハ日ひ吉きちの
 神かみ殿だん故ゆゑハ四座しうざと以もつてこの地このちハ比ひ也なり里民さとみ云いふふこの神鎮坐かみちんざの目
 官幣くわんひ使つか四位しうゐ某そのの脚あし故ゆゑハ四座しうざと以もつて四位しうゐの宮みやと号なづけけて
 四神鎮坐しうじんざのゆゑハ四位しうゐと号なづけけるる社説しゃせつ云いふふ祭まつりるる神かみ五座ござ大比
 枝え小比枝せうひえ氣け比ひ小禪師せうぜんじ塩土しんちの老翁らうおうハ小禪師せうぜんじと本社ほんしハ或あるハ
 四の宮しのみやとのハ例祭れいまつり九月十日大津浦中おほつうらなかつの大祭たいまつりハ神輿かみこ二ふた基もと水みづ
 山やま十一じゅういち整物せいぶつ造花ぞうはな水みづと
 出でるる夜よにに入いりて相撲すもう有あり
 下鳥羽祭しもとりばまつり 十日 山城国やましろ下鳥羽しもとりば郡ぐん下鳥羽しもとりばに
 あり祭まつりるる神かみ半頭はんとう天皇てんかうと号なづけけるる例祭れいまつり九月十日下鳥羽しもとりば
 及および横大路よこおぢの上うへ人本居ひともと神かみ守まもりり神輿かみこ一基ひともとのハ名勝なかつ心こころ云いふ
 神社じんしやハ法傳寺ほふでんじの巽むすひニふた白川祭しろがはまつり 十三日 名勝志なかつし天満てんまん
 町まちむむつつりり森林しんりんの中なかありり天神てんじんの祭まつりありり
 て洛北らくほく白川しろがはの里南山さとみなみの上うへありり持社山もちしゃやま王春日おうかすひ八幡はつぱん紀事きじ
 神輿かみこ一基ひともと録ろく五本ごほんありり○社説しゃせつ云いふふ祭まつりるる神かみ天満てんまん官くわん少せう々々名な

白川祭

祭まつりるる神かみ天満てんまん官くわん少せう々々名な

の尊徳社の前小同じ天満鎮座の延喜八年三月十三日
後所ハ本社鳥居の前二町を、西ふわの例祭九月十三日
土人産沙つちのうぶ 十三夜 後の月、二夜の月、高潔たかけつ十三夜の
神かみ 豆名月、栗名月、月見ハ我朝の瓜うり

はこと近世のませ儒者ハ天邊將滿一輪月又光彩通空
輪將滿りんしょうまんの詩又明の十二家詩ハ鄭少谷何大復が
十三夜の月と翫あそぶぶの詩と引て異朝少十三夜の月
と賞あやむとといふ附會の説ハ信景云今彼集かみ家持かみとこ
るハ是八月十三夜ありて九月十三夜ありて其他ハも九月十
三夜の月と賞せし詩文ありて一句一章ありてもと凡ハ

其人臨時の興ありて天下の名月とせし事ハ我朝のこれ
旧風ハ右中記七十五代崇徳院保延元年九月十三夜今宵
雲清く月明々々見むじり寛平法皇皇明月魚返のより
仰出さる依て我朝九月十三夜と以明月の夜とせし常盤記

姓な熊くま万里小路常光卿の御説と引て云十三夜の月と賞
せし正ただき起りハ天曆七年九月十三夜始て月の宴と行
いとゆいり遺例とあり来りて但此宴ハ本八月十五夜の
御遊びとせられて行いりて其由ハ八月十五夜ハ先帝先帝朱

の御国忌ハ當りても不辨も後れて此九月ハ其遊と行い
と多し此月とせし十五日ハ猶其日次も忌りてんんん
十三夜不定て此月の宴を開き行りて○忠道公十
三夜翫月詩云閑窓寂々月相臨從属窮秋望望巨擘潘
室昔踐凌雲訪蔣家旧徑躡霜尋十三夜影勝於古數
百年光不若今馮前軒回首見清明此夕價千金○唐ハ
富士ありてこの月も見よ素堂○後の月とハ十五夜小對

しての○二夜の月十五夜の月とくら二夜の月と賞せ○
栗名月、豆名月ハ浪華の俗十五夜と芋名月
といハ十三夜を栗名月、豆名月といふ

祭 土日より 江戸芝増上寺大門の傍あり神領十五石
廿日まで 別當金剛院神主西東氏當社旧地ハ増上寺の
山際あり故ハ飯倉明神と号も祭礼九月十日より廿一日まで
神幸 此節時として秋雨多しうを以て世俗神明のめくれ
祭との祭礼の間社内於て生姜と高たかふはと根ね勝かつ生姜しょうと
ハ本朝醫方傳小云薑ハ穢土と去神明ハ通とまま上俗じやうの
事と誤り傳つたへつ生姜と賣うむむ外あ外あ繪え割わり筆ふで小藤
の花と画えき内うち小船ふねと盛もりてこれと風木箱かぜのこばこと称なふ但し

秋 志

風木の餘りをして作れるもの謂ふく、城南寺祭
恭詣の人必生姜と此ちき箱と買て歸る。

廿日 神社答蒙城南の社山城因鳥羽の里あり祭る所
の神一坐鳥羽天皇○社説云祭る所二十二社の内七社

伊勢石清水松尾稻荷賀茂上下平野春日以上城南神
と号をも例祭九月廿日神輿二基ありこの地人皇七十四代鳥

羽上皇の離宮ありて王城の南 鹿ヶ谷祭 廿四日 紀事
浄土村

十禪師祭云 洛東銀閣寺の門前北の方小十禪師の
社あり同所小八所明神の社あり神号詳ふらむ土人産沙

神をも祭礼九月二十四日 今九 雍州府志 鹿ヶ谷 狸々菊
天皇祭云 今祭礼微ありて記もふ及む

黄狸々ハ万重大ん乱狸々ハ本紅あて配 女花 菊の
尖り大ん小狸々ハ狸々の如くして小ん

女節女莖の異名あり 兼和の色 菊の異名之藻塩
是ふよりてりふや

わてそあつて陶洲明ふりあり我朝あて兼和帝
仁和より始てりて遊ひあひ故ふ兼和の色と申ふし此

天皇

このついまぐ菊の品も分たきむ只黄あつて用いられり黄

菊とて兼和色とも兼我菊とも申さるや云藻塩草の

説くくの如くとも類聚国史小桓武帝の菊の御こと載

らまてれ兼和帝より菊とけりめて愛しあひあわらに

只此帝やまて菊とわて遊ひあひ 志ら菊 和訓栞
菊ハ大要

黄と貴り詩人の賞まけ兼用ふ入もまて同じる小哥

小多くかあつて新羅菊の義ことつり花史在編ふ菊品

新羅一名倭菊千 芍薬の根分 芍薬其花肥大
葉純白と云えり

壞とて毎年九 栲栗の熟 熟材 賜ふ秋の
月根と取削り去る

熟折哉 推の實 推柴 推の葉 大和本草推ハ闕
支考 書ふことと載て

本草ふこととあり 羅山文集 余幼年かり推ハ木の名と子果
あつて太平御覽ふ在と聞く後ハ又考ま蓋胡説後項画
書南山志と見る小推ハ科子其末尖て錐小似り
故ふ推といふ宋志ハ推ハ作る木に従ふ之下 和漢三才

齒會 榧子 鐵櫛 其葉櫛小似て鋸齒細く小強く冬もま

葉落む 其實長く尖り筆頭小似て紫褐色 仁白く両片

とある云 凡榧 鈎栗 榧子の棟相似り小椀の如し俗呼

て供器といふ ○季吟云 堀川百首小推柴と冬の題小出

せり其故あや冬とも一説ありて実ふつきこ推 松子

ハ秋季と持し小推柴も葉も実も秋のつり

新松子 海松 天和本草 海松五葉あり若水日信別

戸隠山あり然るに日本小本ありあり

から松し訓むるハ非あべし松うさ大く子ハ果と食

ふべし日本の産ハ朝鮮より来るふおと

漢語抄云五葉松 ○青林と 新蕎麥 貞享式 此式

子 和名万豆乃美 大坂の里語ハ新松子といふ

奈何とあれハ茹ハ冬ふして食ふ 新米 本草 食療

ハ秋あ前後の働と賞して 霜踏鹿 千首 かりのと

年と經る者ハ亦病と發を 霜置て岡への道ハ

とてしつゝの聲 聲名院 名 任せ出い 七月 椒

の葉と戴く 尊華録唐の時立秋の日京師椒の葉

てん 一葉 桐一葉 淮南子 一葉落而天下知秋の一

と戴く 一葉 葉ハ桐とも柳ともいふ句体あり

一葉の舟 一葉の水を停むると舟 御个 初

暮秋ハハヒとや 志の部二星 火取香 棚機 小手向

西北机 居香爐一口 納殿の百和香四兩盛 菟麻子

公事根源 机の上ハ火より小終夜に空焼物あり

唐胡麻と 椒 時珍曰 椒葉大なりと早く脱つ故これ

の部ハ注すと 椒と椒といふ 榧葉ハ小なりと早く秀故

ふこれと榧といふ 花景 備 品字等 ヒサキキサケカフ

テコブラ、ライテンキリ、人家社々るること裁 高と二丈白

鐵樹ハ類して皮赤龍の鱗の如し葉ハ朽木ハ類

大或ハ尖り或ハ三尖 夏筒子の花とひらく小なりと白色

紫点あり凋て莢と結ぶ數十簇 天和本草 時珍

とて枝の間ハ垂る長さ尺餘 虫 曰小なりと色青

秋

綠ある者、尔雅註云、小青蟬也。此世中山中、小あり、蟬ふく、故、小名、常の蟬より、小なり、青赤、音、聒、聞、小、堪、り、寒、き、と、鳴、く、**兼三秋物引板**、拾遺抄、板、小、木、と、添、し、鹿、と、驚、**一本芒**、天和本草、一葉、**八月菱**、了、多、く、叢、生、す、

取、時珍曰、菱、實、一名、菱、或、沙、角、の、角、菱、嶼、と、護、り、俗、呼、び、凌、角、す、中、自、湖、中、小、生、も、葉、実、も、小、小、其、角、硬、く、人、と、刺、其、色、嫩、も、者、青、く、老、る、者、黒、し、嫩、う、時、刺、食、ふ、甘、美、老、る、時、蒸、と、食、ふ、**天和本草**、**稔**、時珍曰、稔、苗、莖、赤、の、如、し、八、九、八、月、九、月、と、れ、と、採、月、莖、と、抽、ん、つ、三、枝、中、に、細、花、と、ひ、ら、く、簇、り、て、**瓢箪**、**百生**、千、生、和漢三才圖、粟、の、穂、の、如、し、**青瓢箪**、**金苦瓠**、俗、三、云、瓢、箪、壺、盧、と、一、類、や、て、別、種、ある、者、明、け、し、葉、花、小、み、て、壺、盧、ふ、似、て、瓢、の、味、食、ふ、堪、は、口、本、なる、者、多、く、炭、斗、ふ、作、る、長、し、て、細、腰、あり、れ、酒、樽、ふ、作、る、ア、長、五、六、寸、の、者、あり、俗、**百生**と、称、ス、二、三、寸、の、者、あり、千、生、と、称、も、細、

腰本末相均、き者俗呼、**平草**、和漢三才圖、林、の、濕、地、に、生、す、苦、棟、て、闇、夜、と、り、珍、や、と、の、獨、多、く、こ、こ、と、出、も、十、月、盛、ふ、其、形、松、草、ふ、似、て、瘦、傘、薄、く、遍、し、故、小、名、く、大、二、三、四、寸、亦、至、て、大、なる、者、あり、灰、白、色、裏、白、く、細、き、刻、と、あり、性、柔、う、脆、く、其、柄、多、く、正、中、あり、畧、偏、て、生、も、大、小、叢、生、と、味、淡、く、**鴻**、和、漢、三、才、圖、合、菱、喰、状、ち、雁、小、類、と、て、大、あり、背、頸、俱、

灰、色、翻、深、黒、其、尾、本、白、く、末、黒、し、腹、白、く、脚、黄、背、黒、と、鼻、の、辺、小、黄、の、條、あり、其、肉、の、味、雁、ふ、方、も、**鴨**、脂、も、多、し、臭、香、鶴、の、肉、ふ、似、と、**三才圖合**、俗、比、土、里、状、ち、鸚、鵒、ふ、似、て、尾、長、く、蒼、灰、色、頭、上、の、毛、乱、き、起、眼、の、辺、小、微、赤、色、と、帯、胸、臆、灰、且、腹、の、下、灰、白、く、俱、小、黒、き、嘴、利、く、脚、短、く、掌、も、黒、く、常、小、群、と、あ、と、飛、啼、好、て、草、木、の、實、と、食、ふ、或、ハ、云、山、茶、花、**鴉**、古、抄、秋、之、貞、享、式、ふ、ら、日、雀、和、漢、三、才、と、食、ふ、冬、の、部、小、く、注、す、**雀**、和、漢、三、才、云、比、伽、羅、状、四、十、雀、ふ、似、て、小、く、頭、背、赤、色、頰、の、辺、白、黒、相、交、ふ、腹、白、く、翅、尾、黒、く、其、根、澤、あり、**鴉**

秋、ひ

河原鷄 和漢三才圖會俗云此和止里雀より小く全体黄

色ふし青と帯ふ頭背頸翅ふ黒と交へ尾黒し腹黄白

背灰白脚黒し其声清滑よく轉る又河原鷄狀鷄

ふ似て稍大く頭背灰白眼の後微黒く背ふ黒き斑

あり翅蒼黒くして黄と交ふ天和 鯉漬 和漢三才圖

本草唐鷄紅鷄蓼鷄より狀略之 會一二寸む

りの小鰯と用て醃く人造法鮮鰯一升洗ふすして塩

三合和し三日ゆくと後石と以てこきと壓す或は同く茄子

生薑穂蓼番椒漬るも又佳く鰯 九月賜水

の字未詳 本朝食鑑 鰯ハ小鰯より

と九日 公事根源 十月の旬のこふわらむ今日と

魚 氷臭と給ふ例あり 年中行事 菊のみぢ折

給ふこききのちぶき肉衣 百菊 滑稽雜談いよて

て菊と愛さる中ふ殊ふ百菊とて百種の名あるゆえ

り傳へり足利將軍義輝公御園ふ植らむ御寵愛

あり義景藤孝兩人ふ贈られ百種 鴨上戸 和名

の菊あり百菊ハこの種ふらう云

わの部 出づ 錐栗 時珍曰栗稍小きもの山栗とて山

の樹 和漢三才圖會其木の葉女貞ふ似て厚く狭く

長く微淡し三四月小細花を開く深赤色実と結

ぶ大豆の如し自ら裂る中子細小く黒色別ふ其葉

の面小子の如くあるもの脹出て中一小さき蟲あり化し出づ

殻小孔あり塵埃と吹去る空虚とある大なる者ハ桃李子如

し其文理極椰子の如し人用ひて胡椒秦椒木の林と収り

瓠瓢ふ代ふ故俗瓢の木とふ或ハ小兒戲ふ吹く笛と

駿州ふ多くこきあり祭礼ふこの笛と吹て神樂供養を

楹藤 時珍曰其子楹の形小象る故ふ名く紫黒色

微光る大さ一二寸山むと偏人多く肉と剔き

去る葉瓢ふ作て腰ふ垂 廣川記 糴 字粟 秣再

藤ふ似て樹ふつく通草のごとし 糴 生糴糴

古今川まゝ田ふはつるひらちのわふ出ぬ 七月

世と今まらふあきとてふとふよとてふと

百子姫 棚機七姫の内ハ百子 百子の池 子の部

秋 ひと

相撲 十五日江戸麻布雑色町ふあり麻布山と号し開
山了海上人の忌日あり故ふ寺内ふ祭る所の麻布
権現の社前あり童相撲あり報恩のころありと
公羽花 花の形刻と有て小刀或ハ鉄と以てきりませるが
ごら俗ふせんとりふ秋深紅の花をひらく種類数品あり
松本セシ小倉セシブシセンフレコロ眼皮ハ類異種あり
カニヒフレコロハ三四月五六月中咲依て剪春羅ともあり
惣て此花和種昔嵯峨清凉寺の北ふ寺りハ仙公羽寺と
つ其手絶て跡ふ珍花生む時人仙翁花
兼三秋物

千秋樂 盤涉調の曲也 体源抄 千秋樂 柏子八又
王子降誕七夜ふことと奏を盤涉調ハ秋
野不教女郎花風ふ吹く如く吹きこけ俳書ふ千秋
樂と出て万歳樂秋風樂と出さる秋風樂ハ漢の武帝
の時出来て秋声の辞ありと
秋季ふハ才一ふありきとあり

八月 釋奠 献昨 續
日

本紀 聖武天皇天平二十八年八月癸卯秋奠服書及ひ儀
と改め定む二月ふ同日春の廿の部とふし公事根源あり
る日秋奠の昨とありて藏人持て朝餉の前ふそむ藏
人答てふんやのつらこの奉まふ昨日の秋奠の昨音と文字
とふくくひて高く撃持て簾の中ハ入事此支ハ二月ふ
あふきや昨と獻まハ八月ふ限るをも承ふ猶有職の人より
尋めよハ秋奠の翌日ある 鶺鴒 鶺鴒の部 鶺鴒鳥 千
事ハ昨とふひりきとあり 鶺鴒 鶺鴒の部 鶺鴒鳥 千
振 胡黄連とせんありハの部 飄音 千生 千生の部 千生の部
寺舍利會 八日浴の泉涌寺舍利殿ふありて毎年九
月八日舍利會と行ふ音樂ありハ律師
湛海宋の白蓮寺ふ 仙蓼 珊瑚とせんありハの部 梅檀の
受持の仙牙あり 仙蓼 珊瑚とせんありハの部 梅檀の
實 時珍曰其子金鈴の如し熟する時ハ黄色金鈴
と名く形ふあるハ梅檀ハ棟夏の部の部

七月 硯洗 水灯會
条下ふ出づ

秋 せら

十六日城洲宇治郡大和田黄蘗山万福寺あり、其事
 八華人黄蘗德元琦禅师明曆中の建立、**紀事**、今會
 宇治川の船中あり、と修、水中施食の法事、其
 式船二艘と双へ申の刻む、り、小岡屋の前、出先、流
 所、宇治橋の下、至、暮、及、船中、数、個、の、燈、臺
 と、点、し、僧、徒、左、右、の、座、と、列、ね、七、如、來、の、牌、と、安、し、供、物、と
 備へ、經、卷、と、誦、し、音、磬、と、鳴、り、て、流、に、隨、ひ、下、り、て、
 後、三、百、六、十、個、の、燈、と、宇、治、川、に、浮、べ、流、ぶ、る、に、水、の、頂、ひ
 散、乱、せ、び、恰、も、螢、火、の、如、し、その、灯、白、紙、と、以、小、蓮、花、と
 造、り、内、の、艾、心、と、堅、く、の、熟、艾、の、燭、硝、と、以、て、煮、え、火、と
 其、の、末、の、点、し、た、ま、に、或、は、流、ぶ、る、と、伏、見、豊、後、橋、の
 下、至、り、り、の、僧、徒、の、刻、む、り、小、岡、屋、の、前、へ、帰
 る、其、間、遊、覽、の、船、數、千、一、月、令、廣、義、南、國、の、風、俗、中
 元、の、夜、家、々、各、善、美、飯、と、見、へ、齋、供、と、門、前、の、羅、或、は、桐、衝
 の、所、傷、亡、の、野、鬼、と、祝、祀、畢、り、て、水、燈、三、十、六、と、り、伏、
 流水、の、流、む、り、て、浮、び、名、づ、け、て、度、孤、と、り、燈、ハ、紙、燈、あり
相撲 部頭使 漢書注 兩々相當 了て力と技藝射
騎小紙戲とも故小角能との事原

史記秦の二世甘泉宮在て樂と角力戰、俳優戲と、
 漢の武帝この戲と好む、即、今の相撲、**垂仁紀**、大和國當
 麻、速、と、出、雲、國、野、見、宿、禰、と、力、と、撲、む、速、野、見、小
 勝、と、あ、く、ま、む、その、腰、と、踏、折、り、て、死、せ、り、野、見、言、家
 の、祖、**扶桑畧記**、柏原天皇の時、久代々天子皆悉、相
 撲と好む、貞觀以後、寂然、と、無、事、今、聖、主、三、代、と、捨
 せ、り、**又、集**、くらしむ、○先、二、三、月、の、ころ、大、將、以、下、陳、の、座
 ぶ、於、て、相、撲、使、の、と、と、定、む、諸、國、七、道、不、遣、と、相、撲、人、と
 あり、**根源**、相撲、江次才仁壽殿
あり、裏、谷、小、云、南、殿、出、御、の、とき、仁、壽、殿、於、て、百、合、の、技、出、ホ、あり、是、は、諸、國、の、供、御、人、供、御、八、相、撲、と、奉、行、國、の、防、心、と、り、あ、つ、め、て、七、月、小、相、撲、の、節、と、し、ひ、て、天、子、の、御、覽、む、ら、と、あり、先、十六、日、の、間、小、召、仰、あり、上、御、勅、と、奉、り、と、左、右、の、次、將、小、相、撲、あ、ら、ぶ、き、よ、と、仰、ら、ふ、左、右、の、近、衛、方、を、分、て、國、々、へ、使、と、下、し、て、相、撲、と、召、さ、し、と、り、葉、小、こ、と、り、使、と、つ、り、廿、六、日、小、内、取、と、い、ふ、と、あり、仁、壽、殿、江、才、重、君、云、大、の、月、廿、六、日、小、の、月、廿、五、日、仁、壽、殿、於、て、三、行、御、物、心、の、し、ま、清、涼、殿、小、お、り、と、こ、と、あり、近、手、御、物、忌、と、申、し、こ、の、義、と、い、ふ、内、取、と、い、ふ、り、く、小、出、御、あり、左、右、の、角、力、人、東、こ、て、角、力、十五、番、り、故、障、續、鼻、の上、小、狩、衣、袴、と、着、く、あ、ら、と、き、ハ、仰、不、隨、て、進、止、ま、續、鼻、の上、小、狩、衣、袴、と、着、く、
秋 十

延元三年江記云角力人三十人決行列その後東馬子狩衣
 積鼻禪差細狩衣の上糸帯と着下衣袴と著と後詔各三又
 おときふまの取て勝負あり廿八日 大の月廿九日 召合
 あつ、裏付云召合技出、左右相撲相合、江次才云勝方乱言
 時と決ま左勝負右勝負のとき、右先納曾利と奏、左
 綾三と奏、又せんけいあるゆきき、他の舞も奏す、天皇
 南殿より出御、王御恭上と、大将相撲の奏と執、十七番取、
 勝方乱声あり、又廿九日拔手として、角力とまごり、御覽せ
 らる、神龜三年お始、て諸國より召上せらる、寛平七
 年お八童相撲と御覽あり、まごりて角力の起りと申、日本紀
 垂仁天皇七年七月當麻邑お勇士あり云、○助手最子加
 手まごり相撲ふり所、助手是と取手より、江次第り
 る、か、今閑服ふり、まごりて名と設け、
 意波仁
 和漢三才圖會、苗、黍、類、葉の間、枝とまごりて穂と出
 實と結、其梢の而、小白花と開、九草木の花落
 て實と結、此花と実と別、形、口、未、尖、端、白、絲、三、條、と
 出、暑、乾、く、まごり、絲、脱、去、て、孔、と、あり、上、下、通、む、小、兒、絲、を
 貫、き、て、念、
 珠、と、も、せ、
 西、瓜、
 和漢三才圖會、慶安中、黃、藥、隱、元、入、
 朝、の、時、西、瓜、扁、豆、木、の、種、と、推、考、へ、ま、り

始て長崎小種、本朝食鑑、水瓜、西瓜、俗小瓜、中水多
 故小名、大和本草、三月種と下し、蔓延て地お布、四五月
 黄花と開、甜、鈴、虫、
 俗云鈴虫、此亦蟋蟀の類、眞黒、
 瓜の花のとし、
 松出お似て、首小く尻大、背窄く、腹お黄白色あり、夜鳴
 声鈴と振、如し、里里林、里里林、と、い、か、ご、り、
 ○此鈴虫の
 舟、まの部、松出、
 すげの庭鳥、
 異名分類、
 兼三秋物、
 尔雅、薄、草、
 薄、草、の、山、お、ま、ご、り、
 蓬、か、松、の、ま、け、の、庭、鳥、
 と薄らり、又芒と、の杜栄、○時珍曰、芒、葉、皆、ま、の、こ、り、
 み、と、大、く、長、と、四、五、尺、甚、快、利、や、て、く、と、傷、こ、り、
 如し、七月、長き莖と、油、んで、穂、と、ま、ご、り、
 者、○、縷、芒、蓀、芒、鷹、の、羽、芒、糸、芒、簾、芒、十、寸、穂、芒、
 麻、苧、穂、の、芒、眞、蘇、苧、の、芒、德、芒、花、芒、
 尾、花、鬼、芒、等、各、頭、字、の、部、お、ま、ご、り、
 相撲草、
 三才圖會、野原湿地、おあり、葉、地、お、布、て、最、ま、と、忍、凌、お、似、く、
 微、扁、く、石、蒼、お、似、て、浅、く、秋、莖、と、起、て、嶺、お、穂、と、ま、ご、り、青、白

秋

分別の月 住吉の神送 晦日九月晦日揚州住
見うぬ芭蕉 吉の神楽王出嶋

の仮殿一渡御即被と修まると住吉の御菅の被と入
祝祠あり又北奈と称と出雲石と入所と称宜出雲
と通ふ拜むとを神送と入今日四天王寺石の鳥居の
邊やもまこと神送あり天坂所々の神社も又神送りの
神吉支 月令此記戌月之候爵為

あり 爵入大水為蛤 蛤飛物化為潛物 九月節
あり 百菊の内大入薄 其花老る
酔楊妃 紅のちて万重大々輪 芒散 時祭の如く

ありて風ふまごかりて 散乱まるとて鶴鳥もの如く

追加は 八月 八朔梅 冬のふの部冬の
梅の余の注と

ほ 七月 星草 大和本草 穀精草 沢中水田
の中小叢主と葉の中より
一莖と抽んで其形其蘭に似て莖の末より白
花の四さむと〇俗太鼓のフチとりふ

り

七月 琉球芋 大和本草 甘藷葉ハ番薯と藪
菜の葉に似たり根ハ瓜樓根に似
たり根の下小短き蔓あり根の餘のひけあり又蔓
卵に似て大ききあり鴨の卵に似て小ありあり大あり
ハ重と一斤あり長きあり口きりや夏月蔓長く生
む中畧此種元禄の末琉球より薩州小渡の煖土に
よりし寒地ハ 大和本草 品鬼ツ
植まると生せむ

ね 八月 鷓 大和本草 品鬼ツ
グより三倍やと大あり厚し多し山中ふあり鷓の字
順の和名抄ハ唐韻と引ける中華の書ハ怪鳥と

と 九月 万年青 前おき 此詞増
山の井
み出以万年青のまきむき牡丹の腹松の脰とて立花ふ
用ゆるあり但し池の坊三ヶの傳受あり委しむる

し 八月 鳴の羽盛 鳴の羽より千鳥
の羽よりなる料
理ふと事あり切と頭翅を以て全体のみと
作てその脊のとりへ焼くる肉と盛ふると鳴

秋 追ぬを

の
と
り
盛

増補歳時記禁草秋之部終

